芦屋市

寺田遺跡発掘調査報告書

財團法人　古代學協會

昭和６０年

目　次

頁
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第３章　発掘調査の経過・結果 …… 4
　第１節　試掘調査の経過 …… 4
　第２節　発掘調査の経過 …… 4
第４章　層序と遺構 …… 7
　第１節　層　序 …… 7
　第２節　遺構の概要 …… 11
　第３節　おもな遺構 …… 24
第５章　縄文時代・弥生時代の遺物 …… 37
　第１節　縄文時代晩期の土器 …… 37
　第２節　弥生時代の土器 …… 38
　第３節　石器 …… 41
第６章　遺　物 …… 43
　第１節　瓦　類 …… 43
　第２節　土器類 …… 45
　第３節　その他の遺物 …… 49
おわりに …… 54

図 版 目 次

図版第1　調査地全景
図版第2　北・南区第3層上面全景
図版第3　北・南区第4層上面全景
図版第4　北・南区調査終了全景
図版第5　上：東区第3層上面全景
　　下：東区第4層上面全景
図版第6　東区調査終了全景
図版第7　上：北区東壁断面
　　下：南区南壁断面
図版第8　中央東西セクション
図版第9　東区東壁断面
図版第10　溝3，4部分・1
図版第11　溝3，4部分・2
図版第12　上：溝5全景
　　下：うね全景
図版第13　上：北・南区第4層上面全景
　　下：建物1・2全景
図版第14　建物1全景
図版第15　建物1－柱穴1全景
図版第16　上：建物1－柱穴3・6全景
　　下：建物1－柱穴4全景
図版第17　上：建物1－柱穴7全景
　　下：建物1－柱穴9全景
図版第18　建物1－柱穴10全景
図版第19　上：建物1－柱穴11全景
　　下：建物1－柱穴12全景
図版第20　建物2全景
図版第21　上：建物2－柱穴1・2全景
　　下：柱穴7，建物2－柱穴3全景
図版第22　上：建物2－柱穴4全景
　　下：建物2－柱穴5全景
図版第23　建物3全景
図版第24　柵1全景
図版第25　上：柵1－柱穴1全景
　　下：柵1－柱穴2全景
図版第26　上：柵1－柱穴3全景
　　下：柵1－柱穴4全景
図版第27　上：柵1－柱穴5全景
　　下：柵および建物3全景
図版第28　上：柱穴1・2・3・4全景
　　下：柱穴1全景
図版第29　上：柱穴2全景
　　下：柱穴3全景
図版第30　上：柱穴4全景
　　下：柱穴5全景
図版第31　上：柱穴6全景
　　下：柱穴8全景
図版第32　上：石鏃出土状態
　　下：和同開珎出土状態
図版第33　上：土壙93内須恵器甕出土状態
　　下：建物1－柱穴3内須恵器蓋出土状態
図版第34　上：土壙93出土須恵器甕
　　下：縄文時代晩期・弥生時代土器
図版第35　上：石器・和同開珎
　　下：土錘
図版第36　柱根
図版第37　柱根
図版第38　柱根

挿 図 目 次

頁

第1図　遺跡の位置……2
第2図　遺跡の範囲および調査地周辺地形図……3
第3図　試掘壙位置図……4
第4図　グリッド配置図……5
第5図　層序実測図・1……8・9
第6図　層序実測図・2……10
第7図　第4層上面遺構実測図……25・26
第8図　建物1実測図……27
第9図　建物2実測図……29
第10図　建物3実測図……31
第11図　柵実測図……33
第12図　溝3・4，柱穴実測図……35
第13図　縄文・弥生時代土器，石器出土分布図……37
第14図　縄文時代晩期の土器実測図……38
第15図　弥生時代の土器実測図……38・39
第16図　石器実測図……41
第17図　瓦類出土分布図……43
第18図　瓦類実測図……44
第19図　建物1・2・3，柵出土土器実測図46
第20図　柱穴・土壙出土土器実測図……47
第21図　土壙93出土甕実測図……48
第22図　溝3・4出土土器実測図……49
第23図　土錘出土分布図……49
第24図　土錘実測図……50
第25図　和同開珎拓影図……51
第26図　柱根実測図……52
第27図　砥石実測図……53

付 表 目 次

頁

第1表　遺構一覧表……12～23
第2表　建物1柱穴計測表……24
第3表　建物2柱穴計測表……29・30
第4表　建物3柱穴計測表……30
第5表　柵柱穴計測表……32
第6表　土錘一覧表……51
第7表　柱根一覧表……53

例　　言

1．本書は，昭和59年に財団法人古代学協会平安博物館が，前川佳子氏の委託をうけて行った，芦屋市三条南町57番地，58番地の2におけるマンション建築工事に伴なう発掘調査の報告書である。

2．遺跡名は，調査地が周知の遺跡である寺田遺跡の一部にかかるため寺田遺跡とした。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

南　博史（平安博物館考古学第2研究室）
　第1章，第2章，第3章，第4章，第6章第1節・第3節

山田邦和（同　嘱託）
　第6章第2節

大下　明（関西大学学生）
　第5章第3節

森下英治（　同　）
　第5章第1節・第2節

第1章　調査に至る経過

兵庫県芦屋市三条南町57番地，58番地の2におけるマンション建設にさきだち，当地が周知の遺跡である寺田遺跡の一部を含むため，芦屋市教育委員会は，昭和58年12月に財団法人古代学協会・平安博物館に対して調査の依頼を打診してきた。同館調査部はこれをうけ，下條信行調査部長，南博史調査員は，昭和59年1月25日芦屋市教育委員会において，原因者前川佳子氏(代理・株式会社長谷川工務店安田喜行氏)を交じえて協議を行った。そして，2月1日より4日間の予定で試掘調査を行い，その結果によって昭和59年度に本調査を実施することで合意した。

試掘調査は下條・南が行ったが，その結果同教育委員会は全面調査が必要と判断し，2月22日協議を行った結果，引きつづき平安博物館がその調査を担当することになった。

本調査は南博史が担当，片岡肇調査部長(昭和59年度より)が統括し，昭和59年5月16日より約3ケ月間の予定で行った。

調査補助員として下記の方々が参加した。

緒方泉(平安博物館嘱託)　岩元雅毅(立命館大学学生)　山田勝　森下英治　本岡雅子　六辻紀子　松本千夏　中村健二　尺采義貴　滝本智己　柳沢和男(関西大学学生)　髙田一博(私立高槻高校学生)

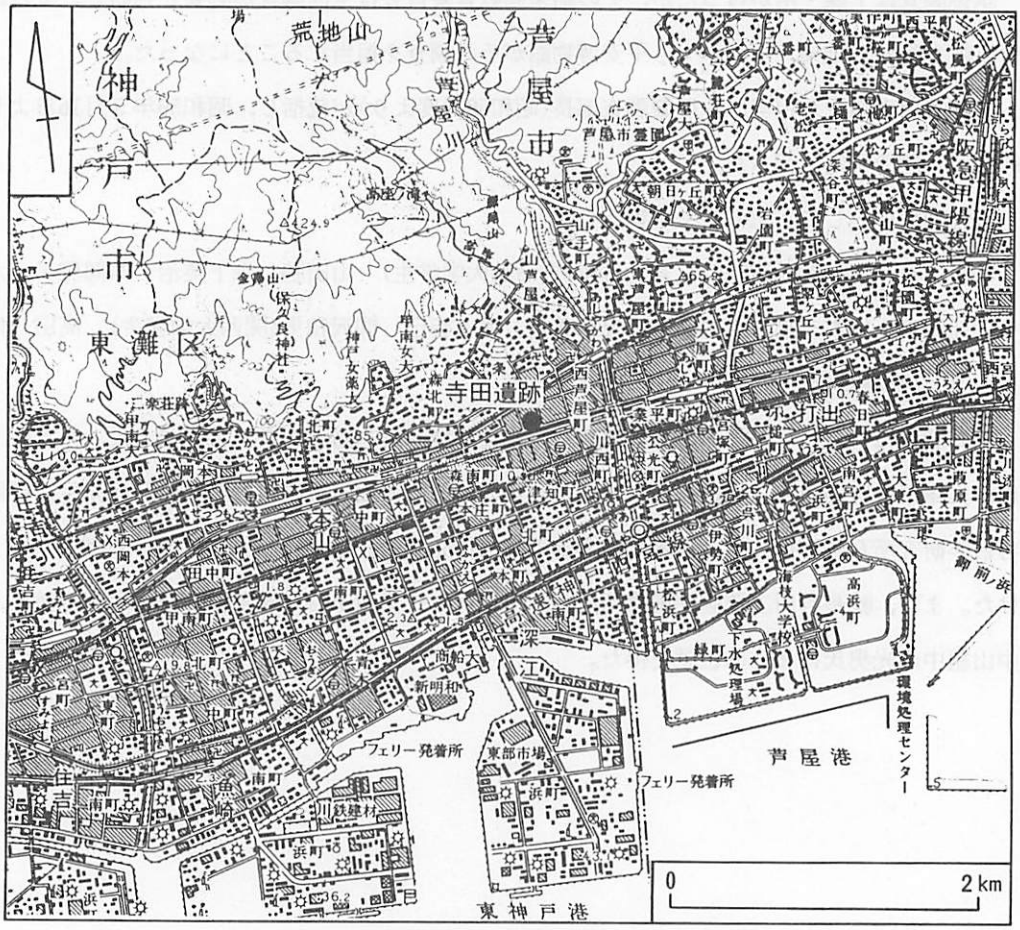
なお調査にあたっては，芦屋市教育委員会社会教育課岩本昌三課長，森岡秀人氏，祭本敦士氏，兵庫県教育委員会大村敬通氏，池田正男氏のほか，大阪経済法科大学村川行弘先生，橿原考古学研究所石野博信先生，西南学院大学下條信行先生(元平安博物館調査部長)の御援助をうけた。また，㈱長谷川工務店安田喜行氏，西田治氏，作業面からは㈱平田工務店平田剛敏氏，中山組中山光男氏に多くの世話を得た。

第２章　遺跡の位置の環境(第１・２図，図版第１)

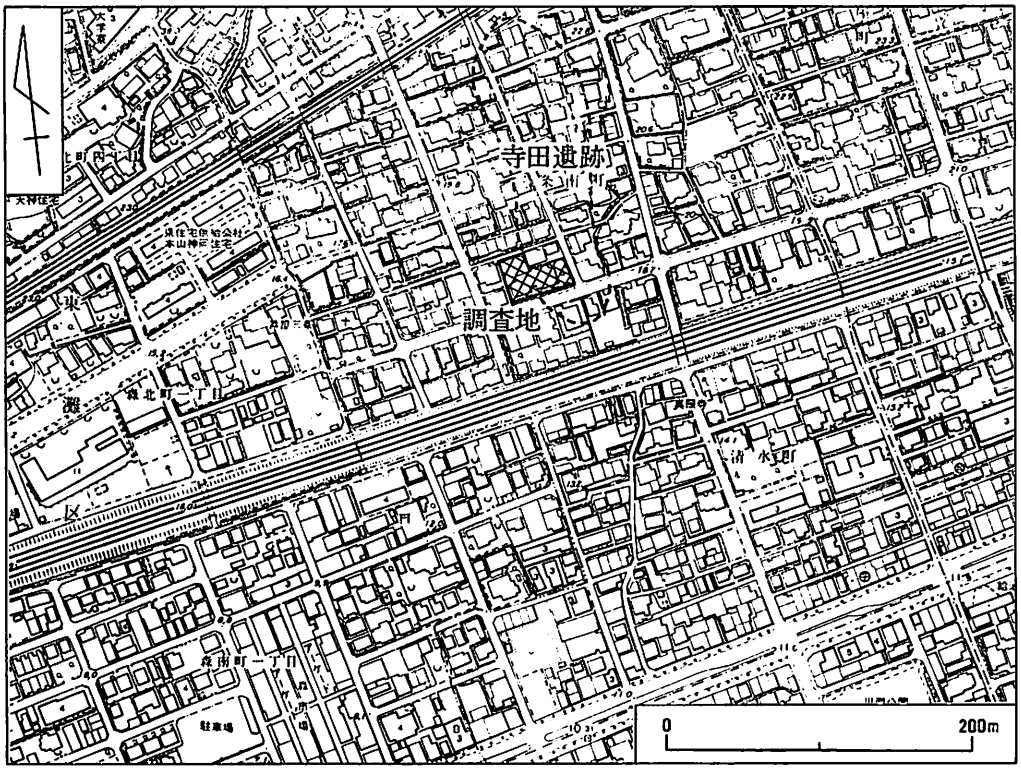
寺田遺跡は，兵庫県芦屋市三条南町一帯に位置する(第１・２図)。そして，その範囲は芦屋川の西側約500m，標高20m前後で，南北約150m，東西約50mにおよんでおり，その性格は，古墳時代以降の遺物包含層・散布地として周知されている。

このあたりの地形は，芦屋川の扇状地内の微高地上になるものと思われ，東北から南西に向かう傾斜地になっている。現在の三条南町は，芦屋市の西端に位置し，北側を阪急神戸線，南側を国鉄山陽本線とにはさまれており，西側は神戸市東灘区と市境を接する。この周辺は，比較的古くから開発が進んだものの再開発は進んでおらず，旧邸宅が建ちならぶ閑静な住宅街となっている。

周辺の遺跡[1]としては，弥生時代の高地性集落遺跡として著名な会下山遺跡[2]，また弥生時代



第１図　遺跡の位置



第2図　遺跡の範囲および調査地周辺地形図

から南北朝・室町時代にかけての幅広い時期の遺物を出土した三条岡山遺跡[3]，奈良時代から室町時代まで続いたといわれる芦屋廃寺祉[4]などの遺跡がある。とくに芦屋廃寺祉は，寺田遺跡ともっとも近く，今回の調査でも芦屋廃寺関係の遺構・遺物が検出される期待があった。

今回の調査地は，寺田遺跡の中央部の西端に位置し，調査地の東側の一部がこの範囲に含まれていた。調査地は，L字形を呈しており，東西約42m，南北約32m，約16mを測る。調査地面積は約1000m²である。また，現地表面の高さは，調査地の北側が18m75cm～18m84cm，東側が18m47cm～17m89cm，南側が17m89cm～17m20cmである（第2図）。

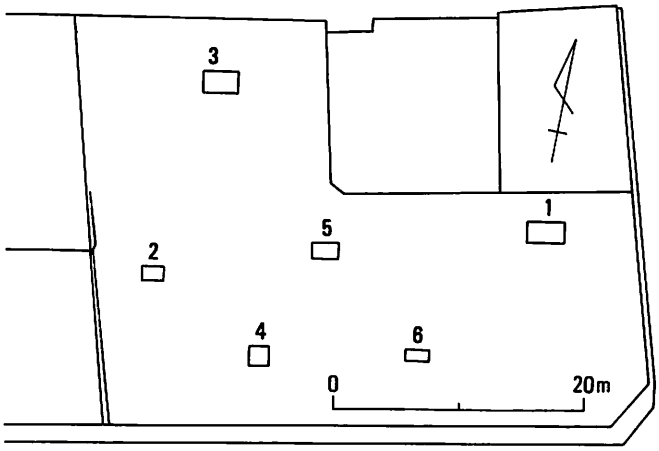
第3章　発掘調査の経過

第1節　試掘調査の経過・結果(第3図)

試掘調査は，2月1日より開始した。

試掘壙は重機によって6ケ所設け，このうちNo.1，2，3試掘壙は，表土下約2mまで掘り下げた。

この結果，各試掘壙で表土層，黄褐色土層，茶褐色土層より，古墳時代から中世に至る土器片が数十点採取された。また，茶褐色土層の下層には黒色粘質土が認められ，古墳時代以前の遺物が含まれる可能性があると判断された。そして，遺物包含層は北東に薄く，南西に厚く，調査地全域に広がっていることが確認された。



第3図　試掘壙位置図

そして，2月4日，各試掘壙の図面，写真撮影を終了し，試堀壙の埋め戻しを行って試掘調査を終了した。

第2節　発掘調査の経過(第4図)

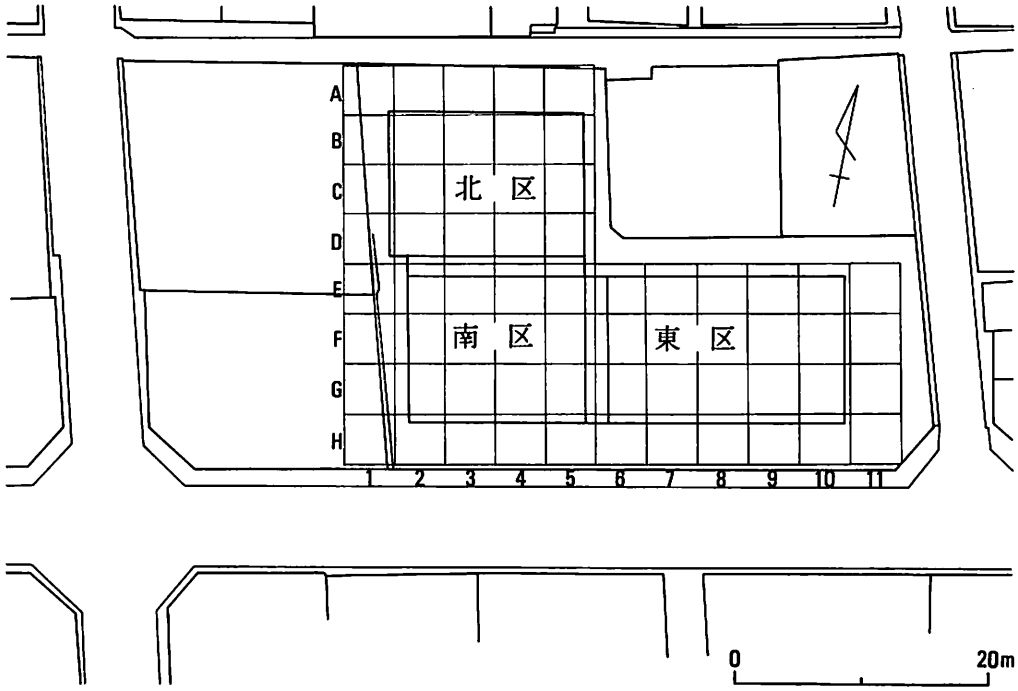
発掘調査は，5月16日より3ケ月の予定で開始した。

グリッドは，調査地全域に4m四方のあみをかけ，南北に北よりA～H，東西に西より1～11として，その組みあわせによってグリッドの名称とした。また，調査地がL字形を呈しているため，排土処理，プレハブ事務所の設置などの点から，調査区を北区・南区・西区に大別した。調査は，前半に北・南区について行い，終了後東区の調査に移ることにした。

そして，層序の観察は各壁面と，北・南区の境(第D列)，南・東区の境(第6列)に設けた，中央東西セクション・中央南北セクションによって行った。さらに，北区西側，南区西側・南側には雨水排水も考えて，西トレンチ・南トレンチを設けた。

なお，調査面積は約650㎡である。

5月21日より重機による表土剝ぎを開始した。試堀調査の結果に基づき，表土は重機によって掘り下げ，5月23日より第2層の手掘りに移った。その際，旧建物のコンクリート基礎が部分的に認められたため先に撤去したが，その下底部は第4層上面にまで及んでいた。



第4図　グリッド配置図

以下，第3層，第4層上面で遺構調査を行った。とくに第4層上面では，奈良・平安時代から中世に至る多数の遺構が検出された。おもなものは，柱穴，土壙，溝などであるが，とくに柱根を一部残す建物1（2間×3間）は注目された。

この段階において，市教育委員会との話し合いによって，第1回目の現地説明会（6月22日）と気球による遺構の空中撮影（6月25日）を行った。

第4層の掘り下げは上面遺構の調査終了後，北区より始めた。しかし，第4層以下からはまったく遺物は出土しなかった。このため，第4層上面での遺構の広がりを，東区と関連づけて調査する方がよいと判断されたので，南区は第4層上面以下の調査を，第F・G・H列のみとし，建物1の位置する範囲は，そのまま保存した。

そして，7月11日，市教育委員会立合いのもとで，前半部分の調査を終了した。

翌12日より東区の調査に入る。前半区と同様に，表土を重機によって削平した。第2層上面では，旧建物のコンクリート基礎が多く認められ，前半区と同じように，その下面は第4層上面にまで及んでいた。また，F5区では近世のコンクリート井戸が検出された。

以下，第3層，第4層上面で遺構検出作業を行った。第4層上面では，前半部分と同様に多くの遺構を検出した。とくに，柵状柱穴列，建物3などは，前半区の建物1・2などとの関連で注目された。さらに建物3からは和銅開珎が出土した。

このような状況のもと，第2回目の現地説明会を8月4日に行った。

第4層以下の調査は，第9・10列において行ったが，前半区と同様に遺物はまったく出土し

なかった。このため，その他の部分での第４層掘り下げは行わなかった。

以上の経過をもって，８月15日，図面作成，写真撮影などの作業を終了し，翌16日市教育委員会の終了確認をうけ，すべての調査を終了した。

第4章　層序と遺構

第1節　層　序(第5・6図，図版第7～9)

本遺跡の層序は，おおむね下記のとおりである。

1：表土層

　1a・1b…撹乱層

2：黄褐色砂質土層

　2a…黄灰褐色砂質土

　2b…溝5

3：茶褐色砂質土層

　3a…暗茶褐色土

　3b…茶灰色砂質土

　3c・3d・3e…土壙

4：黒色粘質土

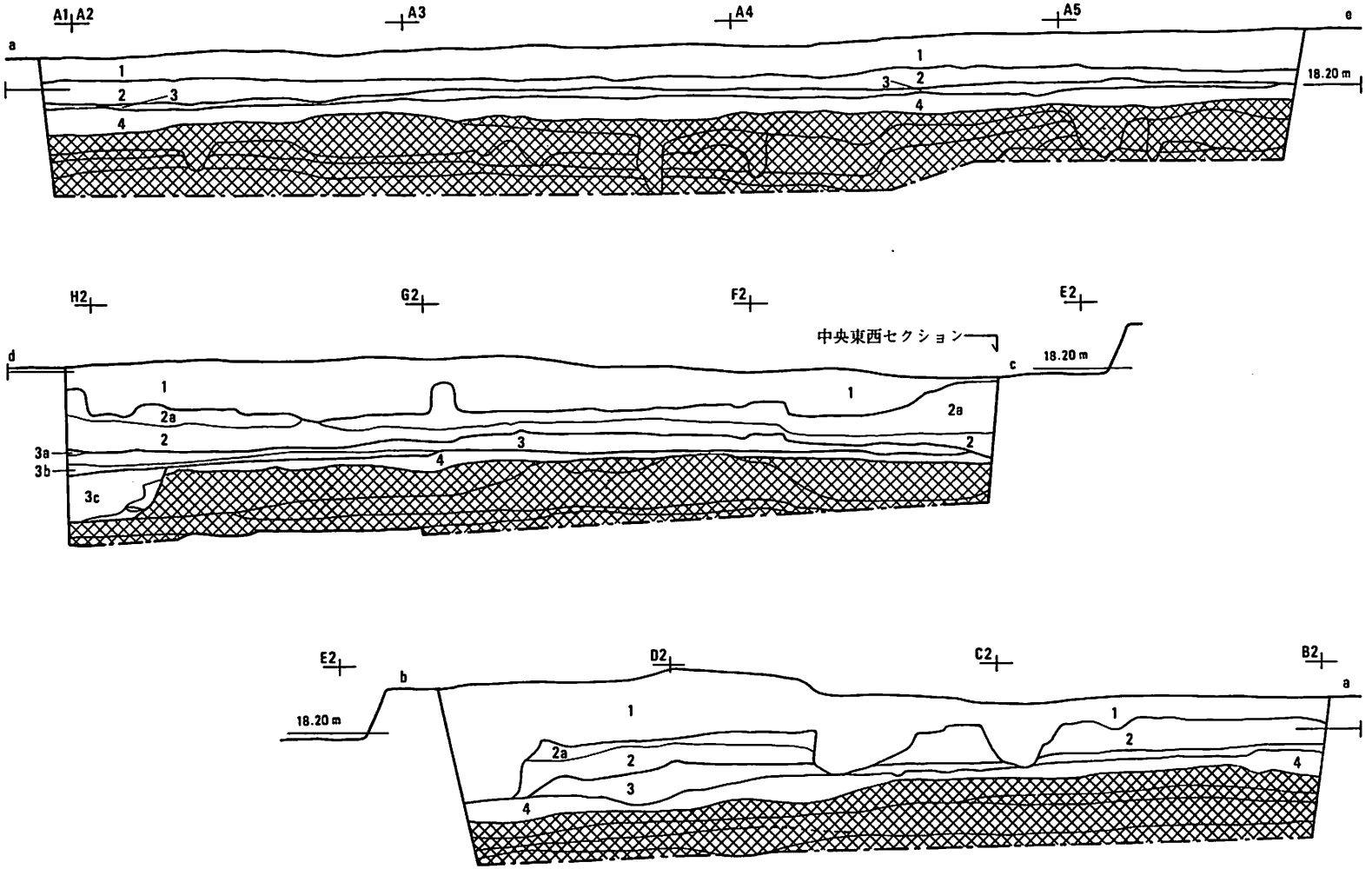
表土層は，北・東に薄く，南・西に厚く堆積しほぼ水平である。厚さ30～70cm。

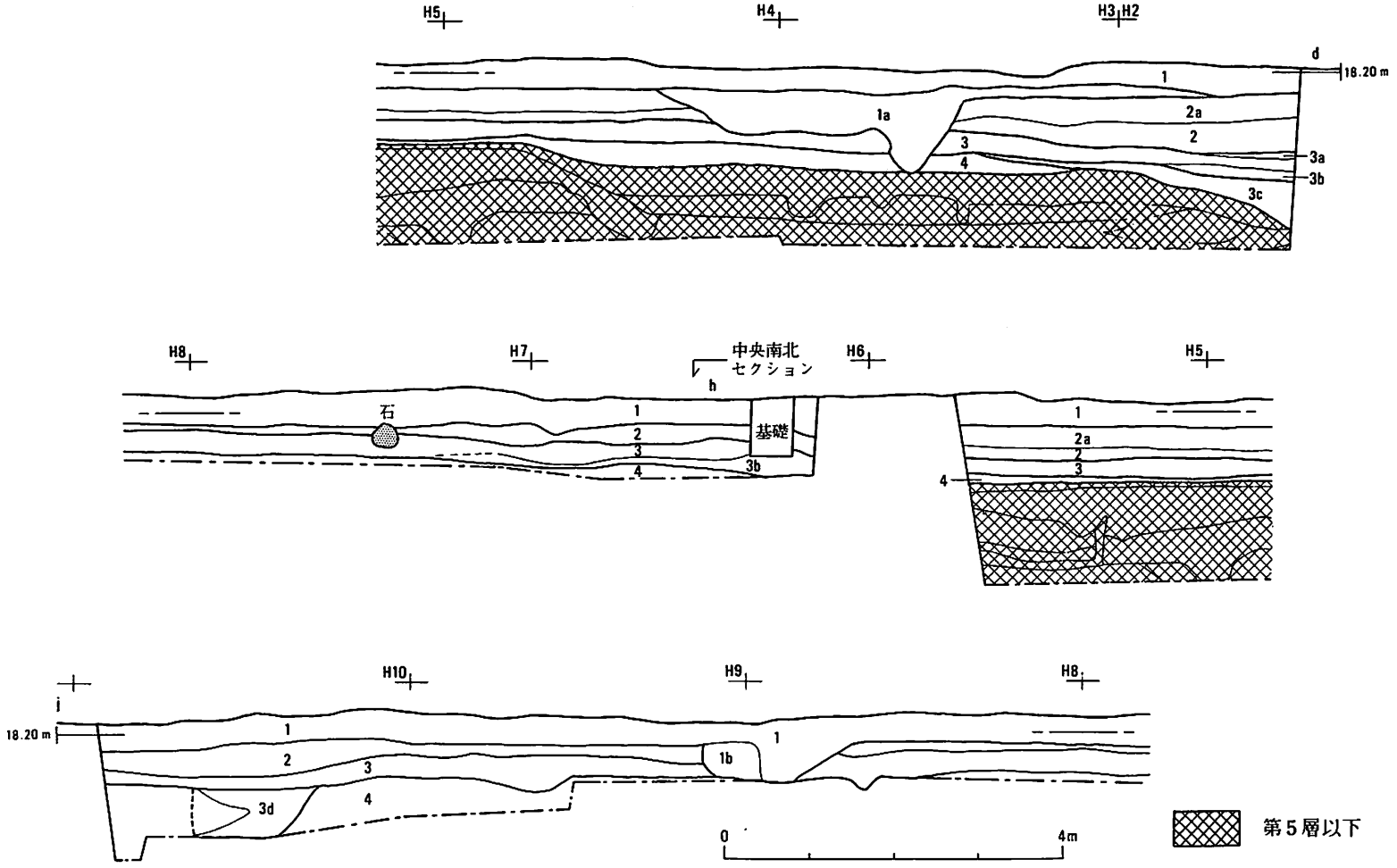
黄褐色砂質土層(第2層)は，表土層と同様に南，西に厚い。厚さ20～60cm。一部その上層に灰色味の強い黄褐色～黄白灰砂質土が認められる。この層は平安時代から近世の遺物を少量含んでおり，近世の耕作等による撹乱層であろう。

茶褐色砂質土層(第3層)は，調査地全体に認められ，20～30cmの厚さで堆積する。上面の高さは，北東側で，18m20cm前後，南西側では17m30cmを測り，約1m近くの比高差がある。そして，北東側では砂質性が顕著であるが，南西に行くにしたがい粘性を増す。この層は7世紀から中世の遺物を含む。とくにG6，H6区およびG2，H2区周辺では，第4層との間に茶灰色砂質土(3b)が認められ，この部分に比較的多くの遺物が見つかっている。また，縄文時代晩期，弥生時代の土器片や石器も少量出土している。

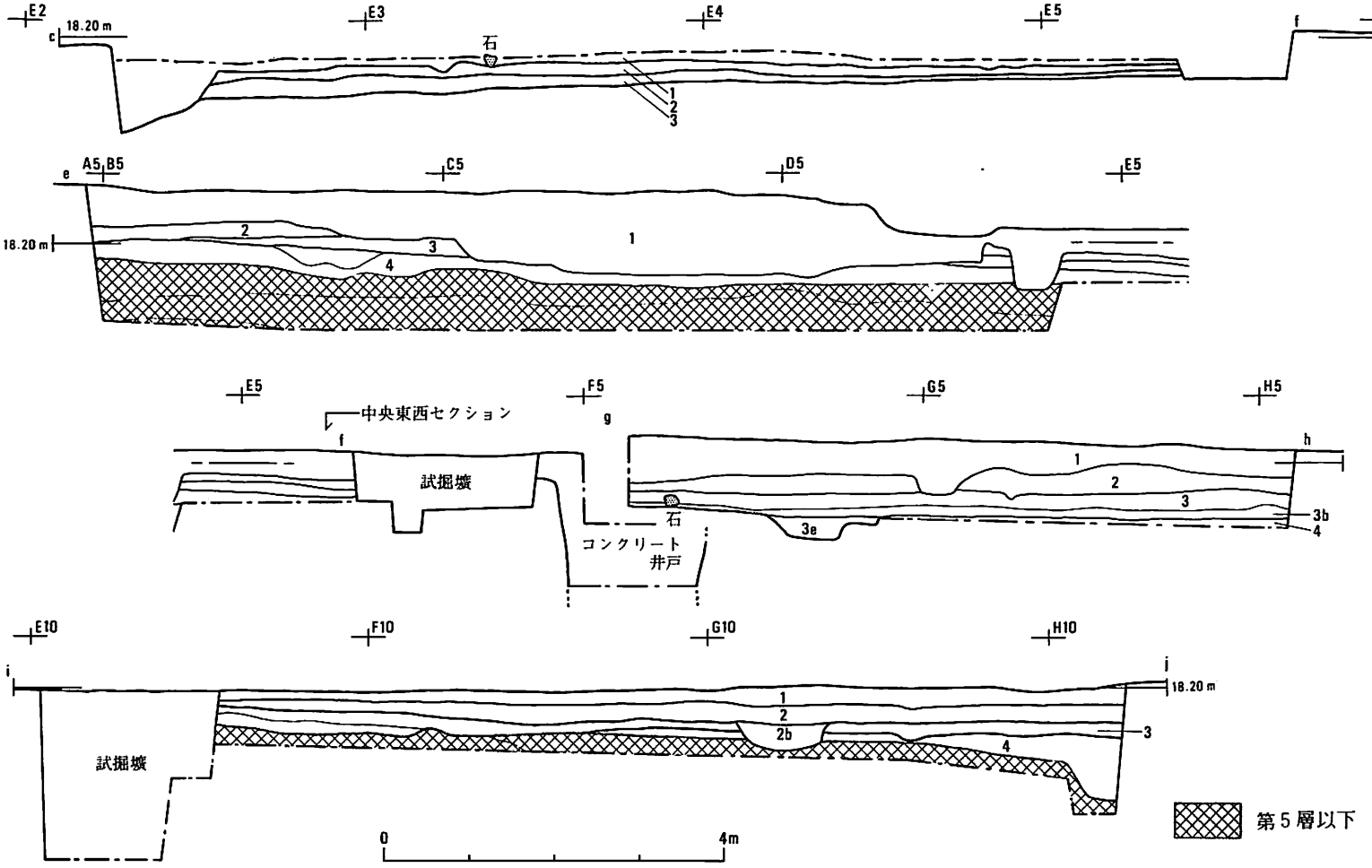
ただし，遺物は全体に細片が多く，また磨耗も顕著である。このことと，時期幅の広い資料が出土していることなど，二次堆積と考えた方がよいであろう。

黒色粘質土(第4層)は，多くの土壙，柱穴などの地山になる。黒色～黒褐色を呈し，赤・黄・白色の風化小礫を一部含む。試掘調査の段階では弥生時代の遺物包含層と考えられた層であるが，本調査の結果，無遺物層と判った。厚さは10～40cmを測るが，上層とはやや堆積の状況が異なる。北東側で薄く，西南側で厚くまた粘質を帯びることは第3層と似るが，E8～10区，F8～10区では，その堆積がほとんど見られない。また，G5・H5区周辺では，下層の凹凸の頂部が位置するためその堆積が薄く，東西両側に向かって厚く堆積する傾向が見られる。つまり，第4層堆積時の地形は，かなり凹凸があったことがわかる。ただし，この黒色粘質土の


A1 A2
A3
A4
A5
a
e
1
2
3
4
18.20 m
H2
G2
F2
E2
d
c
中央東西セクション
2a
3a
3b
3c
E2
D2
C2
B2
b



第5図　層序実測図・1（a～jは第7図に一致する。）



第6図　層序実測図・2（a～jは第7図に一致する。）

生成過程については不明である。

なお，第4層上面の高さは，18m20cmから17m20cmと約1mの比高差がある。

第5層以下の層は，黒色砂礫土，砂層，褐色砂礫土層などで，遺物はまったく出土していない。なお，黒色砂礫土は第4層と似るが，赤・黄・白色の風化小礫を多量に含んでおり全体に砂っぽい。

第2節　遺構の概要(第7図，第1表，図版第2～6)

今回の調査では，266基の土壙，13基の柱穴，溝12条の他，建物跡3棟，柵跡などが検出された。建物跡，柵跡，柱穴などについては後述するが，ここでは各地区の遺構の概要について記す。なお，土壙のうち柱穴である可能性が大きいものもあるが，柱根が残存，ないしは断面に柱痕が認められるもの，また，建物として他の柱穴と連がるもの以外は土壙としてとりあつかった。

1．北区の遺構

北区の第2層上面においては，近世の溝と思われる溝1・2が第C・D列に東西方向で検出された。また，第3層上面においては，ほぼ同様の地点で溝3・4が検出されている。溝3・4については後述する。溝6は，B2・C2区において，南北グリットラインにほぼ併行する位置で検出されたが，詳細は不明である。

第4層上面においては，約85基の土壙，柱穴5基が検出された。

土壙85基のうち，27基からは遺物はまったく出土しなかった。また，36基からは細片のみの出土であり，その時期などは不明である。なお，柱穴1，2，3，4，13には，すべて柱根が残存していた。いずれも後述する。

2．南区の遺構

南区の遺構は，第4層上面に集中する。おもなものには，建物跡2棟，柱穴4基，土壙がある。

建物跡は，D3・4区，E3・4区およびG2・3区に検出された。建物1には柱根が残存していた。また，柱穴5は建物1に，柱穴6，7，8は建物2にからむ形で検出された。いずれも後述する。

土壙は35基検出された。このうち17基からは遺物がまったく出土しなかった。また13基からは細片のみの出土であり，その時期などについては不明である。また，土壙93からは須恵器の甕がある程度復元できる状態で出土した(第21図，図版第33上・34上)。

3．東区の遺構

東区の第3層上面では，溝5，7，9，10のほか，数基の土壙が検出された。溝5はG10・H10区，溝7はF9・G9区，溝9はF8・G8区，溝10はG7区に検出されたが，詳細は不明である。また，第9，10列では，畑のうねと思われる数条の溝が南北方向に検出された。

第4層上面では，北・南区と同様に多くの遺構が検出された。おもなものには，建物跡，柵

第1表　遺構一覧表(建物，柵は除く)

○形は以下のとおりである。
　Ⅰ…円形　Ⅱ…楕円形　Ⅲ正方形　Ⅳ…長方形　Ⅴ…不定形
○(　)は現存値を示す。
○深さの上段は，底部の標高を示し，単位はm。その他の単位はcmである。

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
柱1	B3	Ⅱ	79.5	66.0	17.580 28.0	不明	土師器細片 須恵器甕細片，柱根	
柱2	B3	Ⅰ	50.0	——	17.580 28.0	7C前半	土師器細片 須恵器杯蓋，細片，柱根	20—3
柱3	B3	Ⅰ	99.0	——	17.190 67.0	平安時代	土師器皿，細片 須恵器甕，細片，柱根	20—23
柱4	B4	Ⅱ	90.0	53.5	17.385 47.0	不明	土師器細片 須恵器細片，柱根	
柱5	E3	Ⅱ	98.0	56.0	17.000 38.5	7C後半	土師器細片 須恵器杯蓋，甕細片，柱根	20—7
柱6	F2	Ⅲ	95.0	87.5	16.815 48.0	奈良時代	土師器皿細片 須恵器杯，甕	
柱7	F3	Ⅲ	(50.0)	76.0	16.505 86.5	平安時代	土師器細片 須恵器甕，平瓦	
柱8	F3	Ⅳ	91.5	74.0	16.725 63.0	不明		
柱9	F8	Ⅱ・Ⅳ	94.0	76.0	17.370 26.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
柱10	F9	Ⅳ	32.0	26.0	17.720 8.0	不明		
柱11	G7	Ⅴ	91.0	76.0	17.475 24.5	平安時代 前期～中期	土師器細片 須恵器杯蓋，細片	20—12
柱12	G9	Ⅱ	74.0	60.0	17.370 27.0	奈良時代 平安時代	土師器甕，細片 須恵器杯	20—29
柱13	C2	Ⅱ	105.5	60.0	17.220 33.0	7～8C	土師器細片 須恵器杯，柱根	
土壙1	B2	Ⅱ	31.5	26.5	——	不明	土師器細片	
土壙2	B2	Ⅱ	35.0	30.0	17.775 6.5	不明	土師器甕	
土壙3	B2	Ⅱ	35.0	30.0	17.810 6.0	奈良時代 平安時代	須恵器杯身，壺	
土壙4	B2	Ⅱ	67.5	52.5	17.690 14.0	不明	土師器皿，甕	
土壙5	B2	Ⅰ	31.0	——	17.740 12.0	不明	土師器細片	
土壙6	B2	Ⅴ	89.0	55.0	17.595 8.0	奈良時代 平安時代	土師器甕 須恵器杯身	
土壙7	B2	Ⅱ	97.5	89.5	17.430 32.0	不明	土師器甕．細片	

土壙 8	B 2	V	——	——	——	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙 9	B 3	I	36.0	——	17.750 12.5	不明	土師器細片	
土壙10	B 3	II	52.5	41.0	17.740 17.0	不明	土師器甕細片	
土壙11	B 3	V	145.0	81.0	17.740 (20.5) (21.0)	不明	土師器細片	
土壙12	B 3	II	(131.0)	115.0	17.650 16.5	7 C中頃	土師器細片 須恵器甕・杯蓋	
土壙13	B 3	V	90.0	55.0	17.560 22.0	平安時代	土師器椀，細片 須恵器細片	
土壙14	B 3	II	117.5	85.0	17.650 15.5	奈良時代 前半	土師器細片 須恵器甕，杯蓋	
土壙15	B 3	II	30.0	18.5	17.765 6.0	不明	土師器細片	
土壙16	B 3	IV・II	141.0	111.5	17.260 50.5	奈良時代 平安時代	土師器甕，皿，細片 須恵器甕，皿	
土壙17	B 3	I	32.5	——	17.625 24.0		遺物なし	
土壙18	B 3	I	22.5	——	17.720 12.0		遺物なし	
土壙19	B 4	II	60.0	50.0	17.745 19.5		遺物なし	
土壙20	B 5	I	38.0	——	17.890 11.0		遺物なし	
土壙21	B 5	I	38.0	——	17.795 21.5		遺物なし	
土壙22	B 5	II	36.0	29.0	17.835 18.5		遺物なし	
土壙23	B 5	II	37.5	23.0	17.800 19.0		遺物なし	
土壙24	B 5	I	29.0	——	17.725 28.0		遺物なし	
土壙25	B 5	I	40.0	——	17.740 23.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙26	B 5	I	39.0	——	17.770 23.0		遺物なし	
土壙27	B 5	II	33.0	29.5	17.775 17.5		遺物なし	
土壙28	C 2	I	58.5	——	12.0	不明	土師器甕細片	
土壙29	C 2	V	141.5	63.0	36.0	奈良時代 平安時代	土師器甕 須恵器甕	
土壙30	C 2	I	34.5	——	11.0		遺物なし	
土壙31	欠番							
土壙32	C 2	I	27.0	23.5	17.580 11.0	不明	土師器細片	
土壙33	C 3	I	95.5	——	17.475 30.5	不明	土師器甕，細片 須恵器高杯	
土壙34	C 3	I	33.5	——	17.635 13.5	不明		

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
土壙35	C 3	II	66.5	50.0	17.585 19.5	不明		
土壙36	C 3	I	24.0	——	17.680 6.5		遺物なし	
土壙37	C 3	I	34.5	——	17.595 12.0		遺物なし	
土壙38	C 3	I	25.0	——	17.680 3.0		遺物なし	
土壙39	C 3	II	49.0	35.0	17.605 13.0	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙40	C 3	II	61.5	51.0	17.540 20.5		遺物なし	
土壙41	C 3	II・IV	119.5	91.0	17.430 30.0	7C前半	土師器甕，細片 須恵器杯身，杯蓋，細片	20— 1,2,16
土壙42	C 3	I	28.5	——	17.715 12.0		遺物なし	
土壙43	C 3	I	18.5	——	17.655 12.5		遺物なし	
土壙44	C 3	IV	108.0	44.0	17.440 22.5	7C後半	土師器甕，皿 須恵器甕，杯身，杯蓋	20—5
土壙45	C 3	II	——	——	——	7C	土師器甕，細片 須恵器杯身，甕	
土壙46	C 4	II	57.0	50.0	17.555 27.0	平安時代	土師器甕，皿 須恵器杯身	
土壙47	C 4	I・III	75.5	——	17.560 26.5	不明	土師器細片	
土壙48	C 4	II	28.5	23.5	17.600 30.0	不明	土師器細片	
土壙49	C 4	II	46.0	35.0	17.545 27.0	不明	土師器高杯，細片 須恵器杯身	
土壙50	C 4	I	81.5	——	17.520 33.0	不明	土師器細片	
土壙51	C 4	II	——	——	——	7C	土師器細片 須恵器杯身	20—19
土壙52	C 4	I	25.0	——	17.720 15.0	不明	土師器細片	
土壙53	C 4	I	84.5	——	17.750 16.0	不明		
土壙54	C 4	I	20.0	——	17.690 10.0		遺物なし	
土壙55	C 4	II	74.5	20.0	——		遺物なし	
土壙56	C 5	I	56.0	——	17.555 37.5	7～8C前半 奈良～平安	土師器甕，細片 須恵器杯身	20—15, 20
土壙57	C 5	I	47.0	44.0	17.635 29.5	不明	土師器細片	
土壙58	C5	I	40.0	——	17.700 20.0	不明	須恵器杯身	

土壙59	C 5	I	35.0	——	17.710 21.0	7～8 C	土師器細片 須恵器杯身	
土壙60	C 5	I	39.0	——	17.760 15.5	平安時代	土師器皿，細片 須恵器杯身，細片	
土壙61	D 2	I	23.5	——	17.440 9.0		遺物なし	
土壙62	D 2	I・II	45.0	(25.0)	——	不明	土師器細片	
土壙63	D 2	I	14.0	——	——		遺物なし	
土壙64	D 2	II	29.5	22.0	——	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙65	D 2	I	15.0	——	——	不明	土師器甕，細片	
土壙66	D 2	I	15.0	——	17.525 6.0		遺物なし	
土壙67	D 2	II	34.0	29.0	17.525 6.0		遺物なし	
土壙68	D 2	I	20.5	——	17.625 6.0		遺物なし	
土壙69	D 2		——	——	——		遺物なし	
土壙70	D 3	II	20.0	14.5	17.575 6.5	不明		
土壙71	D 3	II	45.0	35.0	17.480 8.0	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙72	D 3	II	55.0	45.0	17.490 11.5	不明		
土壙73	D 3	I	16.0	——	——	不明	土師器甕細片	
土壙74	D 3	I	25.0	——	——		遺物なし	
土壙75	D 3	I	25.0	——	17.565 9.0	不明	土師器細片	
土壙76	D 3	III	80.0	——	17.385 26.5	奈良時代 6C末～7C初	土師器細片 須恵器杯身，細片	
土壙77	D 3	II	37.0	30.0	17.400 22.5	不明	土師器甕，細片 須恵器細片	
土壙78	D 3	II	152.5	29.0	17.595 9.0	不明	土師器細片	
土壙79	D 3	I	50.0	——	——	7～8 C	土師器細片 須恵器杯身	
土壙80	D 4	II	32.5	26.0	17.595 10.5	7～8 C	土師器甕 須恵器杯身	
土壙81	D 4	II	53.5	40.0	17.455 24.5	不明	土師器細片 弥生	
土壙82	D 4	II	63.5	47.0	17.490 9.5	不明	土師器甕	
土壙83	D 4	II	52.0	38.5	17.515 16.0	不明	土師器甕，細片	
土壙84	E 4	II	104.0	71.5	17.080 48.0	不明	土師器甕，高杯，皿，細片 須恵器甕，細片	
土壙85	E 4	I	22.5	——	17.380 16.5	不明	土師器細片 須恵器甕	

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
土壙86	E 4	III・II	140.0	115.0	17.135 50.5	8C後半 9C前半	土師器高杯，甕，細片 須恵器杯身，杯蓋，壺，細片 弥生，土錘	20— 17，24，28
土壙87	E 5	II	89.0	61.0	17.300 35.0	奈良時代	須恵器杯蓋	20—11
土壙88	E 5	I	27.0	——	17.450 15.0	平安時代	土師器細片 須恵器瓶子	
土壙89	E 5	I	19.0	——	17.440 15.0	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙90	E 5	I	46.5		17.355 22.5	不明	土師器皿，細片 須恵器甕	
土壙91	E 5	I	27.5	——	17.375 17.5		遺物なし	
土壙92	E 5	V	60.0	36.0	——		遺物なし	
土壙93	F 3	I	30.0	——	17.255 10.5	12C中頃	土師器細片 須恵器甕，細片	第21図
土壙94	F 3	I	20.0	——	17.385 15.0		遺物なし	
土壙95	F 3	I	20.0	——	17.220 21.5		遺物なし	
土壙96	F 3	I	20.0	——	17.265 13.0		遺物なし	
土壙97	F 3	I	32.5	——	17.325 10.5		遺物なし	
土壙98	F 3	I	29.5	——	17.350 9.0		遺物なし	
土壙99	F 3	II	36.0	23.0	16.995 31.0		遺物なし	
土壙100	F 4	I	70.0	——	17.310 22.5	奈良時代 前半	土師器細片 須恵器杯蓋	20—10
土壙101	F 4	I	25.5	——	17.335 15.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙102	F 4	II	67.0	54.5	17.330 12.0		遺物なし	
土壙103	F 4	III	75.0	——	17.115 29.5		遺物なし	
土壙104	F 4	I	19.5	——	17.305 15.0	不明		
土壙105	F 4	I	22.5	——	17.360 7.0		遺物なし	
土壙106	F 5	II	44.5	31.0	17.330 19.5	不明	土師器甕細片	
土壙107	F 5	I	51.0	——	17.155 33.0	不明	土師器甕	
土壙108	F 5	II	35.0	(24.0)	17.395 8.0		遺物なし	
土壙109	F 5	——	——	——	——	不明	土師器細片 須恵器甕	

土壙110	F 5	I	17.5	——	——	7C後半	土師器細片 須恵器杯身	20—18
土壙111	F 5	II	55.0	45.5	17.220 34.5	平安時代	土師器皿，細片 須恵器甕，杯身，瓦片	
土壙112	F 5	I	25.0	——	17.405 12.0	不明	土師器細片	
土壙113	G 2	IV	181.0	126.0	16.605 50.5	不明		
土壙114	G 3	II	72.0	40.0	16.940 27.5	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙115	G 3	I	17.0	——	16.945 18.0		遺物なし	
土壙116	G 3	II	23.0	17.5	16.940 27.5		遺物なし	
土壙117	G 3	II	22.0	20.0	16.955 21.5		遺物なし	
土壙118	G 3	II	32.5	28.0	16.980 24.0		遺物なし	
土壙119	G 4	I	27.5	——	17.130 18.5		遺物なし	
土壙120	G 4	II	65.0	26.5	17.090 13.0		遺物なし	
土壙121	E 6	I	40.0	——	17.520 14.5	不明	土師器細片	
土壙122	E 6	I・III	53.0	——	17.500 17.5		遺物なし	
土壙123	E 6	I	45.5	——	17.470 20.0	不明		
土壙124	E 6	V	59.0	44.0	17.535 11.5	不明	土師器細片	
土壙125	E 6	I	29.0	——	17.625 6.5	奈良時代 平安前期	土師器細片 須恵器杯身	
土壙126	E 6	I	30.0	——	17.425 23.0		遺物なし	
土壙127	E 6	II	48.0	41.0	17.370 28.0		遺物なし	
土壙128	E 6	II	39.0	(20.5)	17.510 14.0	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙129	E 6	IV・II	94.5	48.0	17.465 23.5		遺物なし	
土壙130	E 6	II	70.0	56.0	17.500 15.0		遺物なし	
土壙131	E 7	II	64.0	41.0	17.415 25.0	不明	須恵器甕	
土壙132	E 7	IV	70.5	55.5	17.415 24.5	8～9C	須恵器杯身，盤	
土壙133	E 7	I	28.0	——	17.540 12.0	不明	土師器細片	

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
土壙134	E 7	II	61.5	53.0	17.570 9.5	奈良時代 平安時代	土師器細片 須恵器甕	
土壙135	E 7	II	66.5	53.0	17.350 32.5	奈良後期 平安前半	土師器細片 須恵器平瓶，杯蓋，甕	20—22
土壙136	E 7	I	24.5	——	17.510 16.5	不明	土師器椀，甕	
土壙137	E 8	V	121.5	89.5	17.545 9.5	平安時代	土師器皿	
土壙138	E 9	II	41.5	35.5	——	不明	土師器細片 須恵器細片 白磁細片，施釉陶器細片	
土壙139	E 9	I	36.5	——	——		遺物なし	
土壙140	E 9	I	58.5	——	17.505 10.0		遺物なし	
土壙141	E10	V	105.0	37.0	17.580 6.5		遺物なし	
土壙142	F 6	V	103.0	85.5	17.255 39.5	不明	土師器皿，甕 須恵器細片	
土壙143	F 6	IV	58.0	49.5	17.235 31.0	7～9C	土師器椀，細片 須恵器盤，杯蓋，杯身，細片	20—8，21
土壙144	F 6	V	63.0	39.5	17.370 27.5	7 C	土師器細片 須恵器杯身，甕	
土壙145	F 6	I	29.5	——	17.585 18.0	不明		
土壙146	F 6	II	33.5	25.0	——		遺物なし	
土壙147	F 6	II	28.5	19.0	17.465 14.0		遺物なし	
土壙148	F 6	II	55.0	37.0	——	7 C前半	土師器細片 須恵器杯蓋，細片	20—4
土壙149	F 6	II	28.0	21.0	17.475 18.0	不明		
土壙150	F 6	V	99.5	47.5	17.540 23.0	不明	土師器細片	
土壙151	F 6	V	(103.5)	26.0	17.585 17.0		遺物なし	
土壙152	F 6	I	24.0	——	17.635 12.5	7C末～8C	土師器細片 須恵器杯身	
土壙153	F 6	II	38.0	20.0	17.405 33.0	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙154	F 6	V	129.5	51.0	17.260 24.5		遺物なし	
土壙155	F 6	V	58.0	40.0	17.410 24.5	9 C	土師器甕，細片 須恵器瓶子，細片	
土壙156	F 7	I	30.5	——	17.535 21.0		遺物なし	

土壙157	F 7	I	32.5	28.0	17.225 40.0	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙158	F 7	I	19.5	——	17.550 10.0	不明	土師器皿	
土壙159	F 7	II	75.5	46.5	17.410 26.0		遺物なし	
土壙160	F 7	II	23.0	20.0	——	平安時代	土師器皿	
土壙161	F 7	——	——	——	——	8～9C	土師器細片 須恵器杯身	
土壙162	F 7	——	——	——	——	不明	細片	
土壙163	F 7	I	30.5	——	17.520 21.5	不明	土師器皿，細片	
土壙164	F 7	II	40.0	29.0	17.485 25.5	不明	土師器皿	
土壙165	F 7	V	54.5	20.0	17.435 30.5	不明	土師器細片	
土壙166	F 7	II	27.5	24.5	17.490 20.0		遺物なし	
土壙167	F 7	IV	64.0	56.5	17.625 6.0		遺物なし	
土壙168	F 8	I	54.5	——	17.375 37.5	平安時代	土師器皿，細片	
土壙169	F 8	I	33.0	——	17.330 29.0		遺物なし	
土壙170	F 8	I	64.0	——	——	不明		
土壙171	F 8	II	47.5	26.0	17.430 31.5	不明	土師器甕，細片	
土壙172	F 8	I	25.0	——	17.595 15.5		遺物なし	
土壙173	F 8	I	83.5	73.5	17.435 22.0		遺物なし	
土壙174	F 8	I	27.0	——	17.530 11.0		遺物なし	
土壙175	F 8	I	26.0	——	17.540 13.0		遺物なし	
土壙176	F 8	I	28.0	——	17.520 17.0		遺物なし	
土壙177	F 9	II	70.0	28.0	——		遺物なし	
土壙178	F 9	II	63.0	39.5	17.410 21.0		遺物なし	
土壙179	F 9	II	50.5	33.5	17.400 22.0		遺物なし	
土壙180	F 9	I	16.0	——	——		遺物なし	
土壙181	F 9	I	40.0	——	17.370 23.5		遺物なし	
土壙182	F 9	IV	66.5	34.0	17.525 12.0	13～14C	土師器杯身，細片 須恵器細片，瓦器	20—27
土壙183	F 9	I	18.5	——	17.550 7.0		遺物なし	

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
土壙184	F 9	I	18.5	——	17.570 12.0		遺物なし	
土壙185	F 9	I	16.5	——	17.555 13.0		遺物なし	
土壙186	F 9	I	16.0	——	17.535 14.0	奈良時代 前半	土師器細片 須恵器杯蓋	
土壙187	F 9	I	16.0	——	17.460 16.0		遺物なし	
土壙188	F 9	I	20.5	——	17.480 19.5		遺物なし	
土壙189	F 9	V	173.5	56.5	17.430 21.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙190	F 9	II	33.0	28.5	17.430 22.0		遺物なし	
土壙191	F 9	I	64.0	——	17.450 22.0		遺物なし	
土壙192	F 9	I	15.5	——	17.465 6.5		遺物なし	
土壙193	F 9	II	30.5	26.0	17.530 10.5		遺物なし	
土壙194	F 9	I	24.0	——	17.545 10.5		遺物なし	
土壙195	F 9	——	(60.0)	(31.5)	17.470 5.0		遺物なし	
土壙196	F 9	II	47.0	40.0	17.465 20.5		遺物なし	
土壙197	F 9	V	90.0	90.0	17.415 22.5		遺物なし	
土壙198	F10	I	51.0	——	17.495 8.0	不明	土師器細片	
土壙199	F10	I	33.0	——	17.425 10.0	7C後半 9C前半	土師器細片 須恵器杯蓋	
土壙200	F10	V	69.0	41.5	17.565 12.5		遺物なし	
土壙201	F10	II	90.5	64.0	17.330 40.5		遺物なし	
土壙202	G 6	I	26.0	——	17.300 22.5	不明	土師器細片	
土壙203	G 6	II	38.0	29.0	17.130 32.0		遺物なし	
土壙204	G 6	——	——	——	——	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙205	G 7	II	42.0	26.5	17.615 9.5	不明	土師器細片	
土壙206	G 7	I	30.0	——	17.490 19.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙207	G 7	I	14.0	——	17.455 20.5		遺物なし	

土壙208	G 7	I	16.5	——	17.470 13.5		遺物なし	
土壙209	G 7	II	29.0	24.5	17.540 21.0	不明	土師器細片	
土壙210	G 7	I	16.0	——	17.585 12.5	不明	土師器皿，細片	
土壙211	G 7	I	25.0	——	17.515 17.0	不明	土師器細片 瓦片	
土壙212	G 7	II	39.5	30.5	17.405 33.0	奈良後期 平安	土師器甕，細片 須恵器杯身，甕	
土壙213	G 7	I	22.0	——	17.485 23.5	9 C	土師器細片 黒色土器	
土壙214	G 7	I	34.5	——	17.585 15.5	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙215	G 7	I	13.0	——	——	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙216	G 7	I	17.0	——	17.550 19.5	不明	土師器皿	
土壙217	G 7	III・I	80.0	——	17.095 52.5	平安時代 前期~中期	土師器椀，細片 須恵器杯蓋，甕，細片	20—9, 26
土壙218	G 7	I	35.5	——	17.540 10.0	7～8 C	土師器細片 須恵器杯身	
土壙219	G 7	I	40.0	——	17.400 23.0		遺物なし	
土壙220	G 7	I	11.0	——	17.505 21.0		遺物なし	
土壙221	G 8	I	70.5	——	17.610 14.5	不明	土師器細片	
土壙222	G 8	I	32.0	——	——		遺物なし	
土壙223	G 8	I	22.0	——	——		遺物なし	
土壙224	G 8	V	118.0	84.0	17.235 34.5	8～9 C	土師器細片 須恵器杯身	20—14
土壙225	G 8	V	73.0	50.0	——	不明		
土壙226	G 8	II	95.0	63.0	17.430 22.5	不明	土師器細片 須恵器甕	
土壙227	G 8	III	33.0	——	——	奈良後期 平安前期	土師器皿，細片 須恵器杯蓋，杯身	
土壙228	G 8	I	73.0	——	17.610 11.5	不明	土師器細片	
土壙229	G 8	I	22.0	——	——	不明	土師器細片	
土壙230	G 8	V	150.5	111.0	17.295 40.5	不明		
土壙231	G 8	II	44.5	28.0	17.570 13.5	不明		
土壙232	G 8	II	59.5	30.5	17.535 18.0	不明		
土壙233	G 8	I	27.0	——	17.660 6.0	不明		

遺構番号	地区	形	大きさ			時期	出土遺物	挿図番号
			長さ	幅	深さ			
土壙234	G 8	I	33.5	——	——	不明		
土壙235	G 9	II	42.0	33.0	17.555 13.0	9 C	黒色土器 土師器甕，細片	
土壙236	G 9	II	77.5	65.0	17.280 32.5		遺物なし	
土壙237	G 9	IV	79.5	40.0	17.315 34.5	不明	土師器細片	
土壙238	G 9	I	12.0	——	——		遺物なし	
土壙239	G 9	II	30.0	17.0	17.225 3.0	不明	土師器細片	
土壙240	G 9	I	29.0	——	17.515 16.5		遺物なし	
土壙241	G 9	I	16.0	——	17.570 9.0		遺物なし	
土壙242	G 9	I	20.0	——	——		遺物なし	
土壙243	G10	II	48.5	31.5	——	9 C	黒色土器 土師器細片	20—30
土壙244	G10	I	23.0	——	——		遺物なし	
土壙245	G10	II	59.5	51.5	17.180 49.5	9 C	黒色土器 土師器甕，細片	
土壙246	G10	I	70.0	——	17.230 41.0		遺物なし	
土壙247	G10	II	70.0	45.0	17.325 6.5		遺物なし	
土壙248	G10	I	41.0	——	17.400 22.0	不明	土師器細片 須恵器細片	
土壙249	G10	I	41.0	——	17.520 8.0		遺物なし	
土壙250	G10	I	49.0	——	17.410 12.0		遺物なし	
土壙251	G10	I	49.0	——	17.240 32.5		遺物なし	
土壙252	H 7	I	35.0	——	17.470 17.0	7～8C	土師器杯身，細片	
土壙253	H 7	II	30.0	22.0	17.390 20.0		遺物なし	
土壙254	H 7	I	23.5	——	17.430 13.0		遺物なし	
土壙255	H 7	II	53.5	31.5	9.5	不明	土師器皿	
土壙256	H 7	I	24.5	——	17.510 14.0		遺物なし	
土壙257	H 7	I	16.5	——	17.505 20.0		遺物なし	
土壙258	H 7	—	——	——	——	不明		
土壙259	H 8	I	15.0	——	17.405 21.0		遺物なし	

土壙260	H 8	I	22.0	——	17.520 15.5	不明		
土壙261	H 9	I	40.0	——	17.480 17.0	不明	土師器細片	
土壙262	H 9	II	26.5	18.5	17.540 14.0		遺物なし	
土壙263	H10	IV	135.0	(65.0)	16.850 69.0		遺物なし	
土壙264	H10	I	31.5	——	17.540 11.0		遺物なし	
土壙265	D 4	II	——	——	——	不明	須恵器杯身，細片	20—25
溝 1	C2～C5 D2～C5		1540.0	——	——	近世	土師器皿 須恵器こね鉢，杯身，杯蓋，甕，平瓶 緑釉陶磁皿，青磁(龍泉窯)碗，平瓦，近世磁器	
溝 2	C2～C5 D2～D5		1540.0	——	——	近世	土師器細片 須恵器杯身，こね鉢，細片 施釉陶器，近世磁器	
溝 3	C2～C5 D2～D5		1540.0	190.0	13.0	平安～中世	土師器甕，細片 須恵器椀，杯身，杯蓋，甕，高杯，平瓶 瓦器，緑釉陶磁椀，白磁細片，弥生	22—1, 2, 3, 4, 6, 7
溝 4	C2～C5 D2～D5		1540.0	75.0	18.0	平安～中世	土師器高杯，細片 須恵器杯身，甕，細片	22—5, 8
溝 5	G10，H10		475.0	110.0	28.0	中世	土師器細片 須恵器杯蓋	
溝 6	B2, C2		500.0	20.0	——	不明	土師器細片 須恵器杯蓋，杯身 弥生，平瓦	
溝 7	F9, G9		470.0	55.0	6.0	不明	土師器椀，高杯，細片 須恵器杯蓋，甕，壺，高杯	
溝 8	F8, G8 H8		860.0	35.0	8.0	不明	遺物なし	
溝 9	F8, G8		355.0	28.0	——	不明	土師器細片 須恵器杯蓋，杯身	
溝10	G 7		300.0	26.0	——	不明	遺物なし	
溝11	E 8		420.0	25.0	4.0	不明	土師器細片 須恵器細片	
溝12	E 7		200.0	25.0	6.0	不明	土師器細片	

跡，柱穴４基，土壙，溝３条などである。

溝８はＦ８・Ｇ８・Ｈ８区，溝11はＥ８区，溝12はＥ７区で検出された幅20～40cmの小溝である。出土遺物は少なく，その詳細は不明である。土壙は143基が検出された。このうち68基からは遺物は出土しなかった。また50基からは細片のみの出土で，その時期などは不明である。

建物跡は，Ｆ７・８，Ｇ７・８・９，Ｈ７・８・９区より，柵跡はＥ６，Ｇ６，Ｈ６区より検出された。柱穴とともに後述する。

第３節　おもな遺構(第８～12図，図版第10～31)

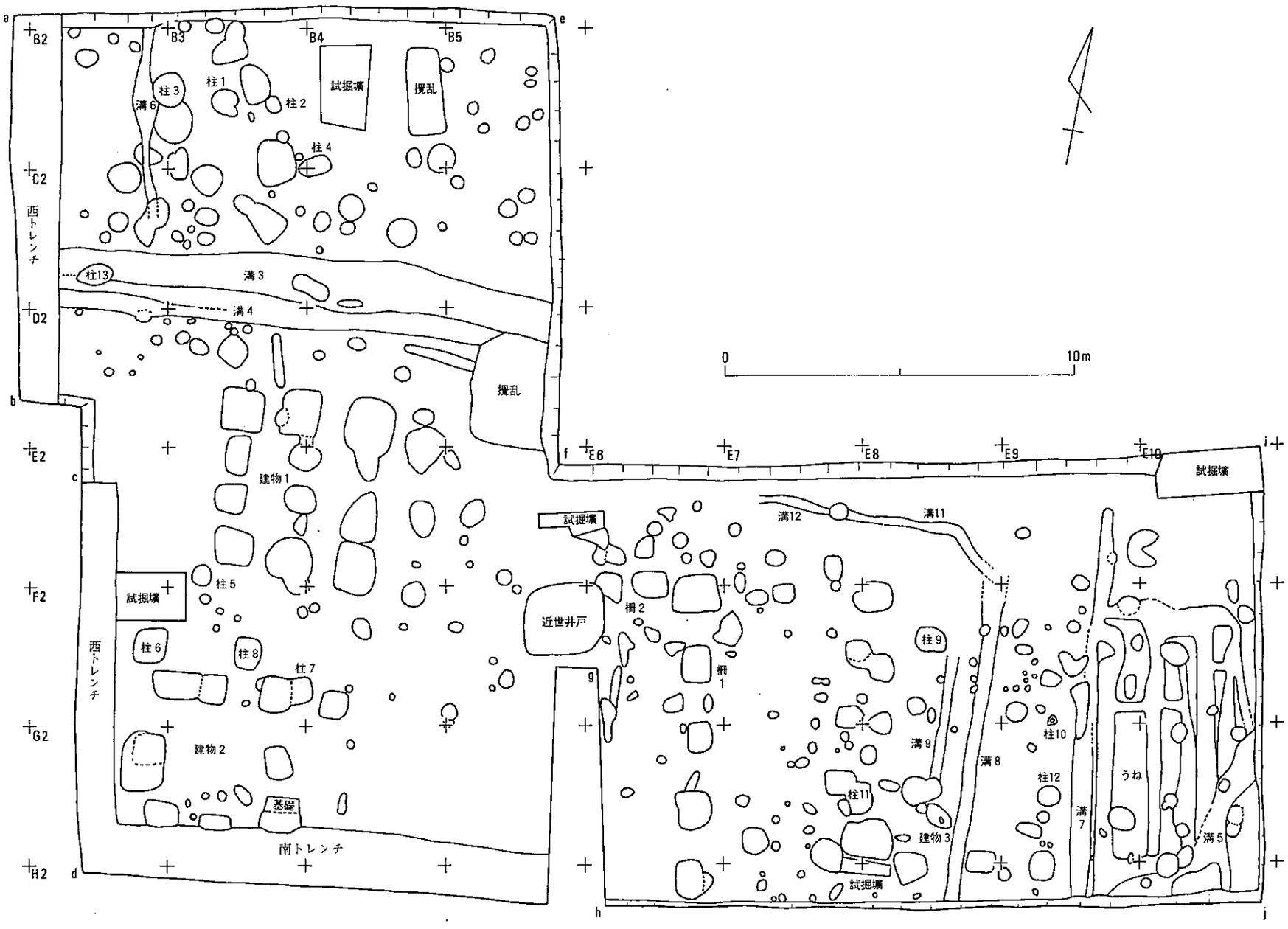
１．建物１(第８図，第２表，図版第13～19)

建物１は，Ｄ３・４区，Ｅ３・４区の第４層上面で検出した。これは３間(420cm)×２間(360cm)の南北棟建物で，総柱，すなわち柱筋にはすべての柱穴がある。柱間寸法は，桁行130～150cm，梁行180～190cmを測る。

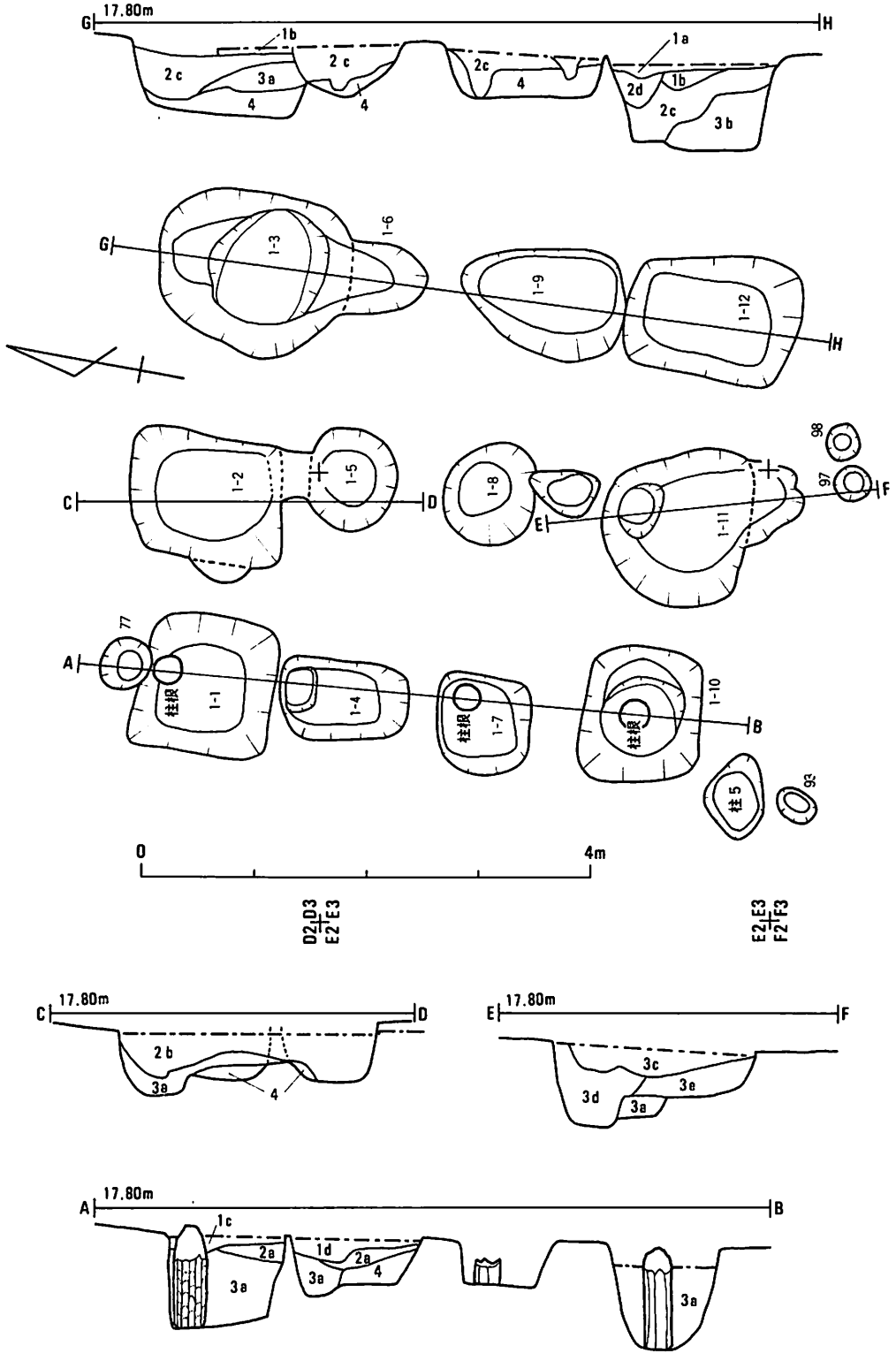
各柱穴は，基本的には平面方形を呈するが，円形や楕円形のものもあり，大きさも一辺64～156cmと不揃いである。これは，柱穴３，６，11のように柱を抜きとるために形が変ったためと考えられる。また，コーナーの柱穴である柱穴１，３，10，12は方形で，一辺103～156cmと大き

第２表　建物１柱穴計測表　○形，単位は第１表と同じ　○〔 〕は推定値を示す。

柱穴番号	地区	形	大きさ			出土遺物	挿図番号
			長さ	巾	深さ		
1－1	D3, D4 E3, E4	III	126.0	126.0	16.745 84.0	土師器椀，杯身，把手付甕 須恵器杯身，杯蓋，盤 弥生，平瓦，土錘	19-3, 4, 6, 10, 14, 18, 20, 21
－2		IV	134.0	110.5	17.050 55.5		
－3		III	〔150.0〕	142.0	16.895 76.0		
－4		IV	114.5	68.0	17.080 49.5		
－5		I	82.0	—	17.125 47.0		
－6		II	〔82.0〕	64.0	17.075 54.0		
－7		III	84.0	86.0	17.085 49.0		
－8		I	82.5	91.0	17.060 49.0		
－9		II	148.0	96.5	17.100 44.5		
－10		IV	103.0	120.0	16.485 97.5		
－11		I	〔126.0〕	140.0	16.915 55.0		
－12		IV	156.0	112.0	16.695 80.0		



第7図　第4層上面遺構実測図


G
17.80m
H
1b
1a
2c
3a
4
2d
3b
1-3
1-6
1-9
1-12
C
D
E
F
1-2
1-5
1-8
1-11
98
97
77
A
B
柱根
1-1
1-4
1-7
1-10
柱5
93
0
4m
D2,D3
E2,E3
E2,E3
F2,F3
3c
3d
3e

第 8 図　建物 1 実測図

く，深さも76～96.5cmと他の柱穴に比べ深い。

なお，各柱穴の埋土は以下のとおりである。

１ａ：灰黒色砂質土

１ｂ：黄褐色砂質土

１ｃ：茶褐色土……黄・赤・白色の風化小礫を含み，固くしまっている。各柱穴の埋土最上層である。

１ｄ：黒茶褐色土……１ｃに比べ，小礫少ない。

２ａ：黒灰色粘質土……１ｃと同様に小礫を含む。

２ｂ：２ａと同じ……柱抜きとり穴か。

２ｃ：黒灰色粘質砂礫土……茶褐色砂質土と小礫を含む。柱抜きとり穴か。

２ｄ：２ｃと同じ……小礫少ない。

３ａ：黒灰色粘質土と灰色砂質土の混じった層……かなり湿めった状態で，粘性も強い。

３ｂ：３ａと同じ……黄褐色砂質土，小礫を含む。

３ｃ：３ａと同じ……褐色味がかる。

３ｄ：３ａと同じ……灰色味がかる。

３ｅ：３ａと同じ……柱抜きとり穴か。

４　：黒色砂質土……赤・黄・白色の風化小礫を含む。第４層に近似するが，軟質である。

そして，柱穴１，７，10には柱根が残存していたが，これは埋土の主体を占める３ａ～３ｄ層が柱を保護するような土であったためと思われる。

なお，この３柱根の方向から，この建物の南北方向は，Ｎ５°Ｗである。

建物１から出土した遺物は，細片が多く不明なものが多いが，７世紀から平安時代の遺物が多い。このことからこの建物は，奈良時代から平安時代にかけてのものと判断される。そして，総柱であることから倉庫として推定できる。

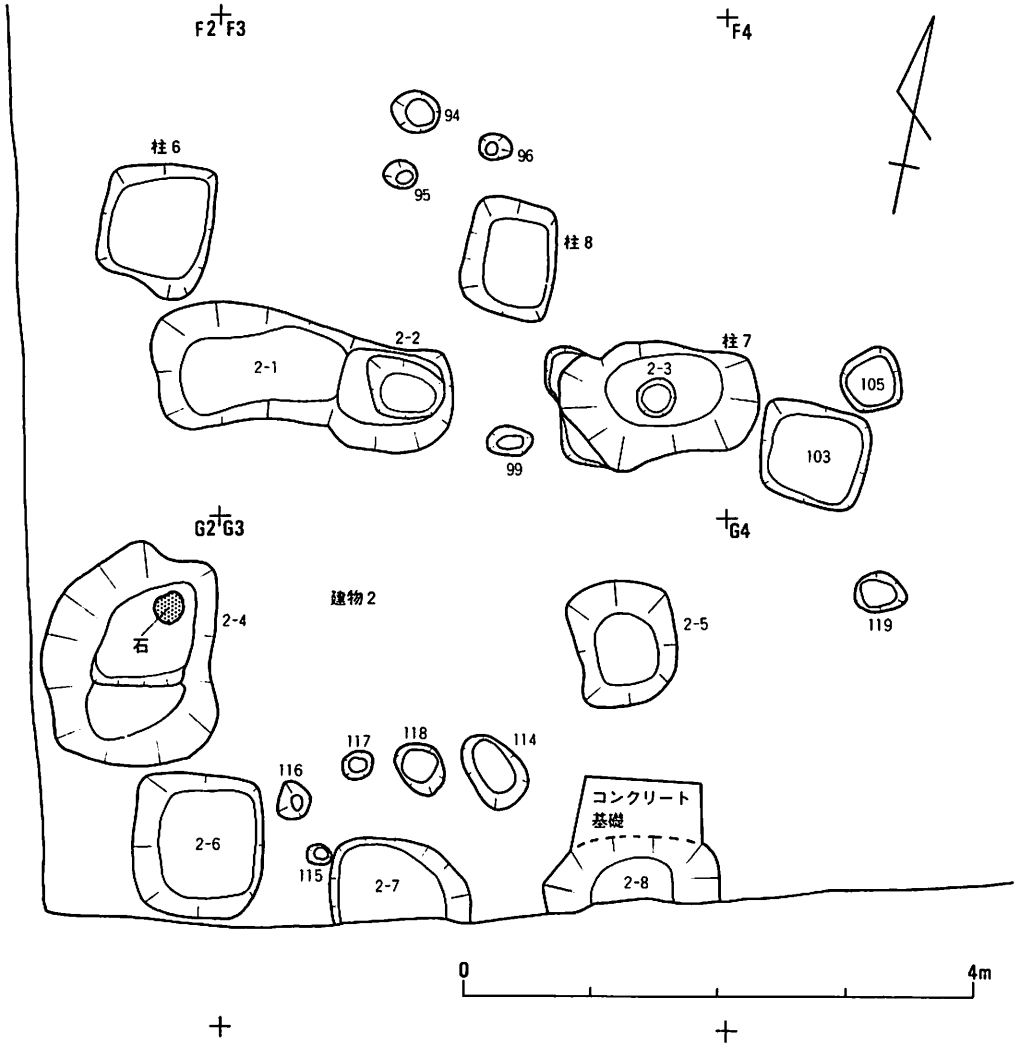
２．建物２（第９図，第３表，図版第20～22）

建物２は第４層上面，Ｆ２・３区，Ｇ２・３区で検出された。これは南北２間(370cm)以上，東西２間(360cm)以上の建物であるが，全体の規模は，調査地外に延びる可能性もあるため不明である。柱間寸法は，南北間，東西間とも170～190cmである。

各柱穴は，平面方形を呈している。大きさは一辺81～147cmを測るが，おおむね一定している。また，深さも69～83cmとほぼ同じである。建物１に比べ，各柱穴が一定した大きさである。なお，柱穴４には根石が残存していた。

埋土は，各柱穴とも一様に黒灰色粘質土と黄褐色砂質土との混じったもので，建物１の埋土と似ている。また，柱根は残っていなかったが，埋土中に柱の一部と思われる木片が含まれている例もあった。なお，この建物の南北方向はＮ６°Ｗで，建物１とほぼ並行する。

出土遺物は細片が多く，確実にこの建物の時期を決める資料はないが，建物１とほぼ並行し



第9図　建物2実測図

第3表　建物2柱穴計測表　○形，単位は第1表と同じ　○〔 〕は推定値，( )は現存値を示す。

柱穴番号	地　区	形	大　き　さ			出　土　遺　物	挿図番号
			長さ	巾	深さ		
2－1	F2, F3, G2, G3	IV	92.0	〔147.0〕	16.550 76.0	土師器椀，皿 須恵器杯蓋，平瓦	19-2, 19
－2		III	83.0	〔89.0〕	16.635 69.0		
－3		IV	86.0	〔104.0〕	16.475 89.0		
－4		III	〔97.0〕	〔99.0〕	16.355 83.0		
－5		IV	98.0	81.0	16.460 80.0		

柱穴番号	地　区	形	大　き　さ			出　土　遺　物	挿図番号
			長さ	巾	深さ		
－6		III	109.0	102.0	16.460 62.5		
－7		III	(68.0)	108.0	16.435 74.0		
－8		III	(52.0)	138.0	16.405 79.5		

ていること，柱穴の形，規模が同様であること，埋土が似ていることなどから，ほぼ同時期の建物と考えてよいであろう。ただし，総柱ではなく建物１と違った性格のものかもしれないが，全体の規模が不明のため，詳細はわからない。

３．建物３（第10図，第４表，図版第23）

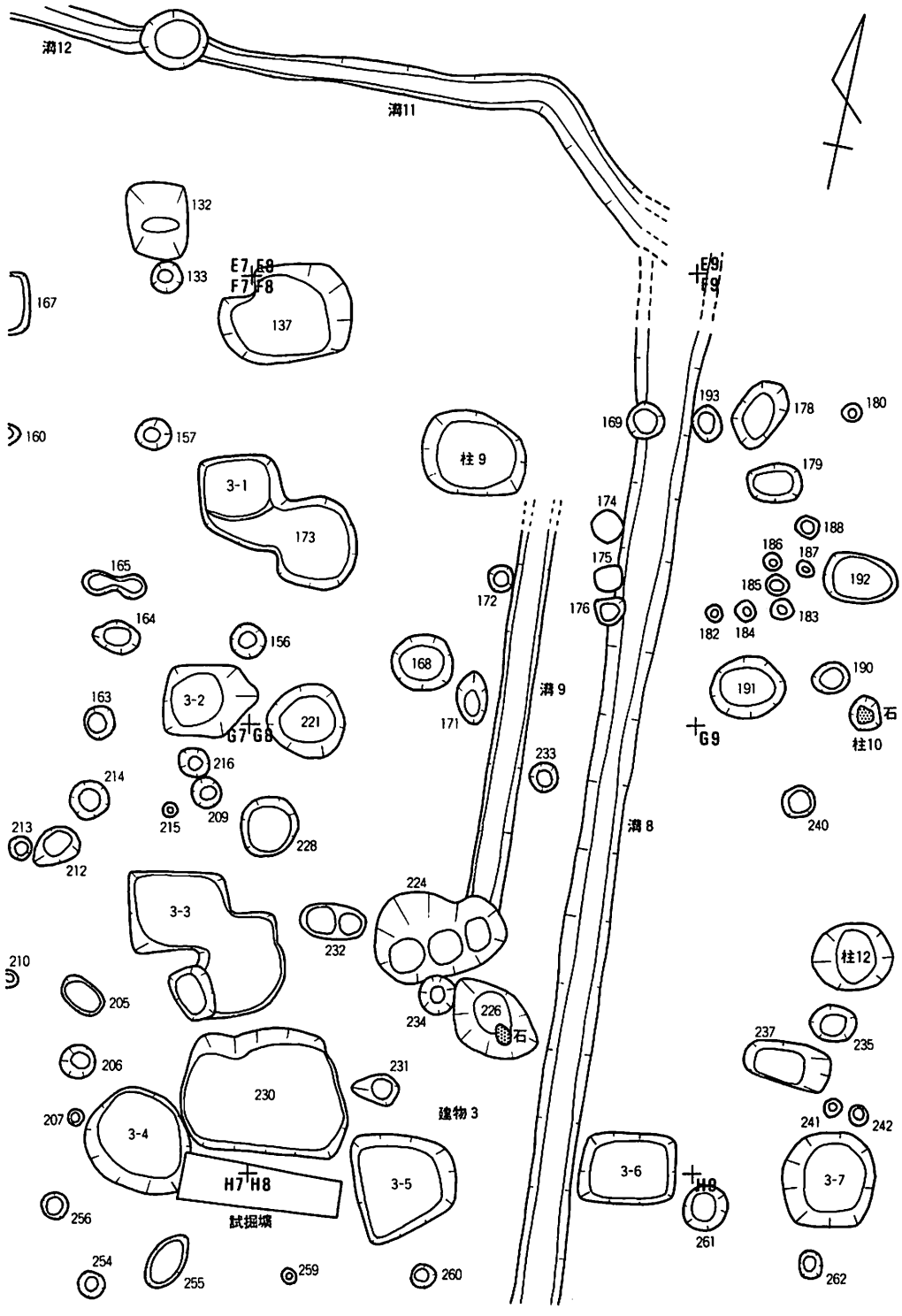
建物３は第４層上面，Ｆ７・８区，Ｇ７・８区，Ｈ７・８・９区で検出された。これは，南北３間(550cm)×東西３間(590cm)を測るＬ字形の建物である。北辺，東辺および内側には，これに対応するような柱穴は検出できなかった。柱間寸法は，南北間180～190cm，東西間180～210cmを測る。なお，建物の南北方向は，Ｎ３°Ｗである。

各柱穴は，基本的には平面方形を呈するが，円形のものもある。しかし，大きさは一辺63～90cmとほぼ一定している。また，深さも36.5～52cmとほぼ同じである。ただし，建物１・２に比べると，柱穴はやや小さい。

各柱穴の埋土は，いずれも黒褐色土でやや粘質を帯る。出土遺物は建物１・２と同様に細片

第４表　建物３柱穴計測表　○形，単位は第１表と同じ。　○〔 〕は推定値を示す。

柱穴番号	地　区	形	大　き　さ			出　土　遺　物	挿図番号
			長さ	巾	深さ		
3－1	F7, F8 G7, G8, G9 H7, H8, H9	III	63.0	〔72.0〕	17.285 36.5	土師器皿 須恵器盤，黒色土器細片	19-16, 17
－2		III	63.0	69.0	17.270 49.0		
－3		IV	69.0	〔88.0〕	17.320 41.5		
－4		I	88.0	90.0	17.200 52.0		
－5		III	90.0	94.0	17.235 47.5		
－6		IV	64.0	86.0	17.235 46.0		
－7		I	85.0	81.0	17.265 42.0		


溝12
溝11
132
133
E7 E8
F7 F8
137
167
160
157
3-1
173
柱 9
169
193
178
180
179
174
175
176
188
186
187
192
185
183
182
184
165
164
156
172
168
171
溝 9
191
190
石
柱10
163
3-2
221
G7 G8
G9
216
214
209
215
213
212
228
233
溝 8
240
3-3
224
232
210
205
234
226
石
柱12
237
235
206
230
231
207
3-4
建物 3
241
242
3-5
3-6
3-7
H7 H8
H9
試掘壙
256
261
254
255
259
260
262
0
4m

第10図　建物 3 実測図

がわずかに出土したのみであるが，柱穴７の埋土下層より和同開珎が３点出土した。そして，３点が貼りついた形で出土したことなどから，地鎮のために埋納されていたのであろうか。したがって建物３の時期は，奈良時代末～平安時代初めにかけてのものと考えられる。

この建物は，柱穴がL字形にのみ位置することなどから，建物１・２のようなものではなく柵とか目隠し塀のような構造物が考えられる。また，南北方向が建物１・２とややずれることや，埋土の違いなどから時期的にも前後するのかもしれない。

４．柵１・２（第11図，第５表，図版第24～27）

柵１はＥ６，Ｆ６，Ｇ６，Ｈ６区の第４層上面で検出した。南北４間（830cm）の柵状の建物跡である。しかし，南側は調査地外へ延びる可能性があり，また，北側へも同様であるので全体の規模などは不明である。柱間寸法は190～220cmを測る。

各柱穴は，いずれも平面が南北に長い方形を呈し，大きさは一辺73～115cmとやや不揃いである。また，深さも31～80cmとばらつきがある。なお，方向はＮ７°Ｗである。

各柱穴の埋土は，以下のとおりである。

１ａ：黒色砂質土……赤・黄・白色の風化小礫を多く含む。

１ｂ：１ａに同じ……粘性やや強く，小礫は少ない。

２　：黒色土

３ａ：灰黒色粘質土

３ｂ：３ａに同じ……黄褐色の砂を多く含む。

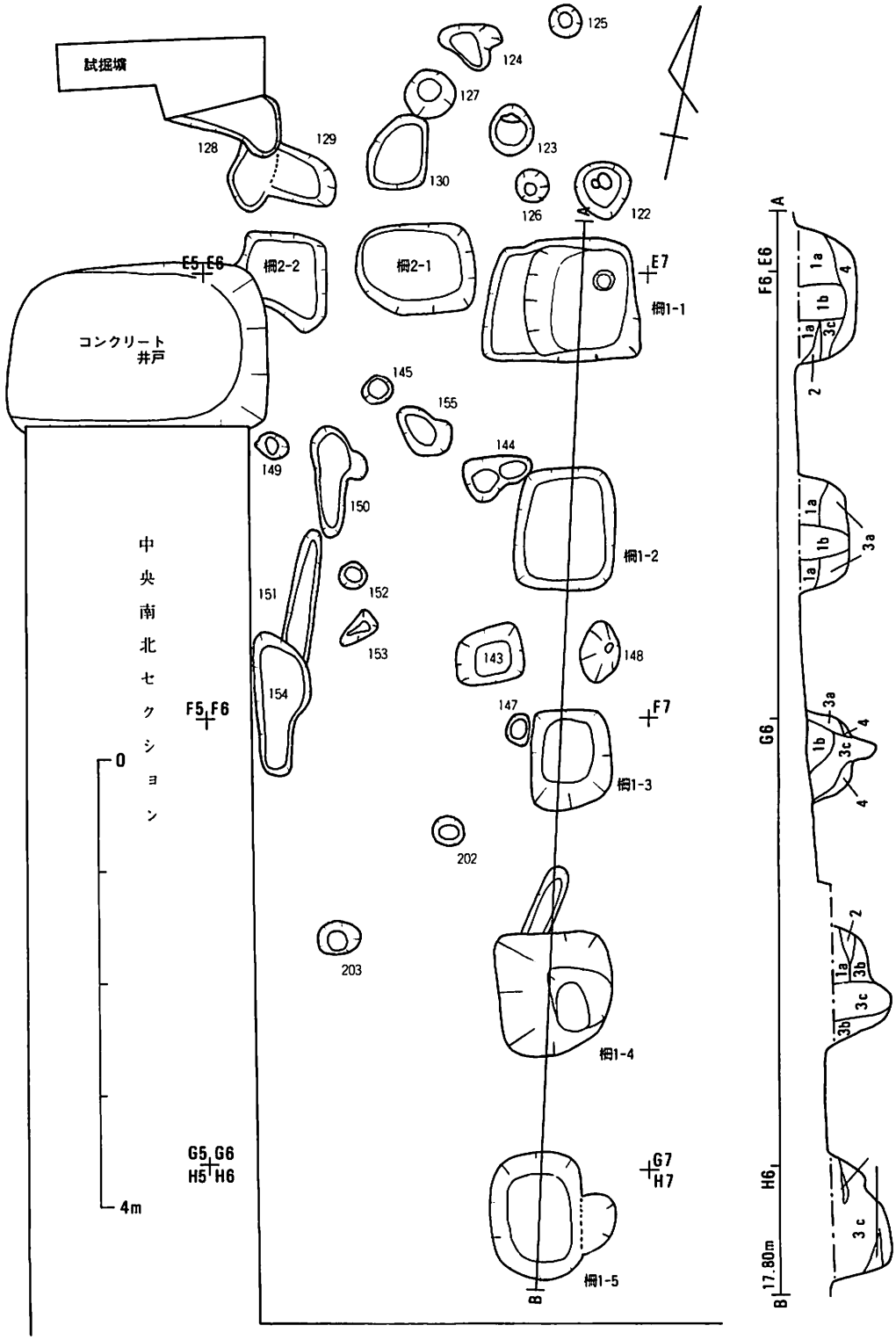
３ｃ：黒灰色粘質土と灰色砂質土との混じった層

４　：黒色土……赤・黄・白色の風化小礫を含む。

出土遺物は細片がほとんどで，この建物の時期を明確に決定できる資料はないが，おそらく

第５表　柵　柱穴計測表　○形，単位は第１表と同じ　○〔 〕は推定値を示す。

柱穴番号	地　区	形	大　き　さ			出　土　遺　物	挿図番号
			長さ	巾	深さ		
柵１－１	E6, F6 G6, H6	III	108.0	102.0	17.085 80.5	須恵器杯身，杯蓋	19-1, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13 15
－２		IV	109.0	91.0	17.235 43.5		
－３		IV	88.0	73.0	17.090 47.0		
－４		III	110.0	100.0	16.805 55.5		
－５		IV	115.0	80.0	16.895 46.0		
柵２－１	E6	IV	81.0	106.0	17.205 46.5		
－２		III	73.0	〔80.0〕	173.55 31.0		


試掘壕
コンクリート
井戸
中央南北セクション
0
4m
E5 E6
F5 F6
G5 G6
H5 H6
E7
F7
G7
H7
柵2-2
柵2-1
柵1-1
柵1-2
柵1-3
柵1-4
柵1-5
122
123
124
125
126
127
128
129
130
143
144
145
147
148
149
150
151
152
153
154
155
202
203
A
B
F6 E6
G6
H6
17.80m
1a
1b
3a
3b
3c
4

第11図　柵実測図

奈良時代末～平安時代にかけての遺構であろう。

また，柵１に直角方向，西へ延びる２柱穴がＥ６区で検出された(柵２)。これは，柵１－１柱穴から西へ２間(280cm)延びるもので，柱間寸法は120・160cmである。この２柱穴は平面が東西に長い方形を呈し，大きさは一辺106・80cm，深さ31・46.5cmと，ほぼ柵１の柱穴と同じ規模のものである。

柵１・２は，建物３と同様に，目隠し塀のような構造物と考える。

５．柱　穴(第12図，図版第28～31)

１)北区の柱穴

Ｂ２・３区より柱穴３，Ｂ３区より柱穴１，２，Ｂ３・４，Ｃ３・４区より柱穴４，Ｃ２区より柱穴13が，いずれも第４層上面で検出された(第12図)。いずれにも柱根が残存する。これらには一定の規則性は認められず，他の土壙と組み合せても明確な建物として択えることはできなかった。ただし，柱穴１，２，３はほぼ同一直線上にならび，柱間寸法は約160cmである。同一建物の柱穴かもしれないが，深さがかなり違うこと，細片であるが出土遺物からみると柱穴２がやや古くなる様相を示しているなど確実ではない。

また，柱穴１，４には柱抜きとり穴が認められ，どちらの柱根も折れ残っていたような状況を呈していた。

２)南区の柱穴

Ｅ３区より柱穴５，Ｆ２区より柱穴６，Ｆ３区より柱穴７，８が第４層上面で検出された。このうち柱５は建物１にからむように検出され，柱根が残存していた(第８図，図版第30下)。柱６，７，８(第９図，図版第31)は，いずれも平面方形を呈し，一辺76～95cmとほぼ同じ大きさであるが，柱穴６が深さ48cmとやや浅い。いずれも建物２の柱穴とよく似ており，これと何らかの関係があるのかもしれない。

出土遺物は，いずれも細片ばかりで，時期を明確にできるものは少ない。

３)東区の柱穴

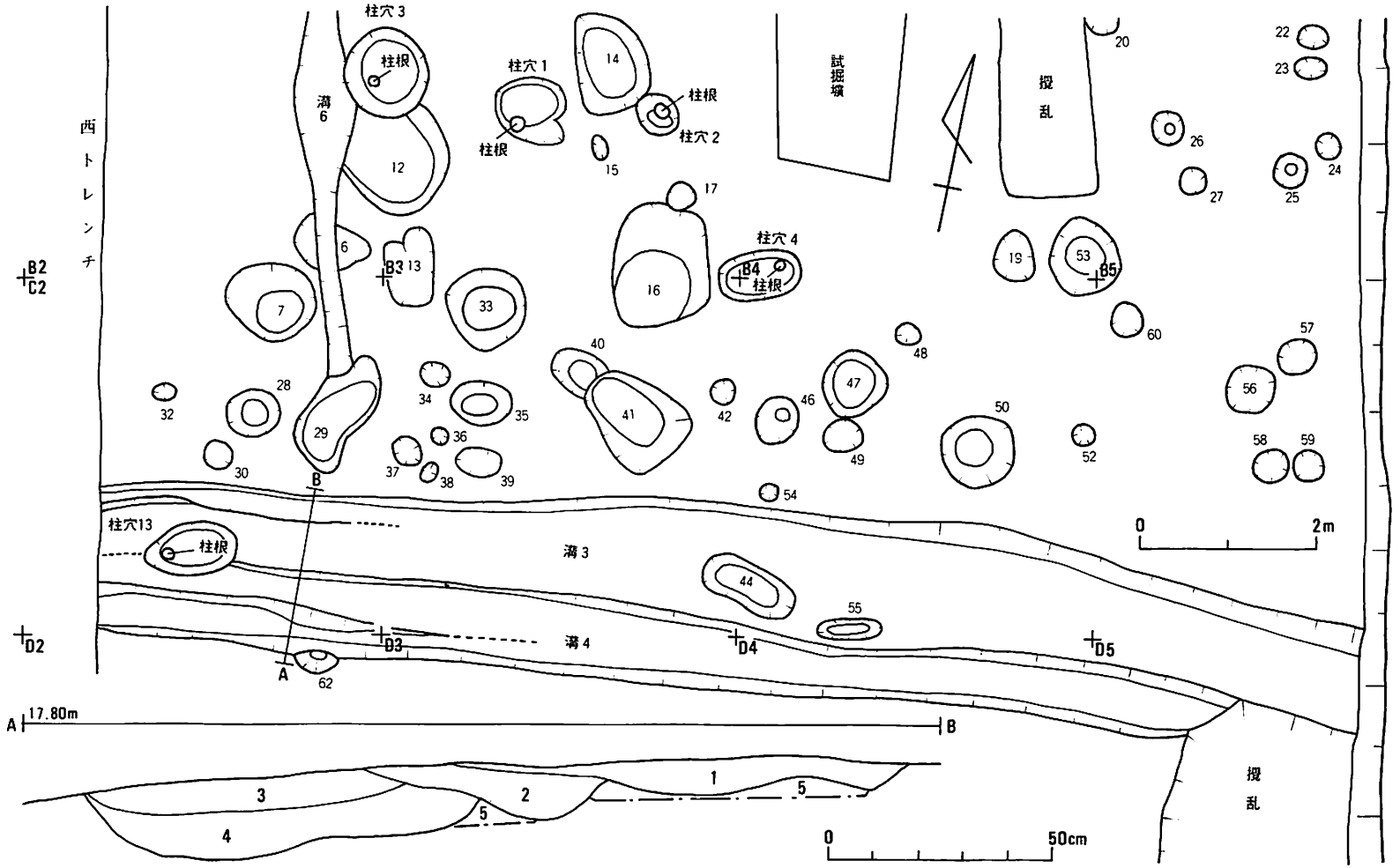
Ｆ８区より柱９，Ｆ９区より柱10，Ｇ７・８区より柱11，Ｇ９区より柱12が，第４層上面で検出された(第10図)。いずれも柱根は残存しないが，柱９からは柱根が完全に腐った状態で認められた。柱10は，深さ８cmと極端に浅いが，直径約28cmの偏平な礎石が検出された。また，柱11は，建物３－柱穴３にからむほぼ同じ大きさで平面方形の柱穴である。

北，南区の柱穴と同様に，出土遺物は少なく，詳細は不明である。

６．溝３・４(第12図，図版第10，11)

溝については詳細の不明な例が多く，ここでは溝３・４についてのみ記す。

溝３・４は，第Ｃ列と第Ｄ列との境に東西方向で検出された(第12図，図版第10，11)。溝の方向はＮ86°Ｅである。



第12図　溝３・４，柱穴実測図

埋土は以下のとおりである。

1：黄褐色砂質土……溝3埋土

2：茶褐色砂質土……溝3埋土

3：黄褐色砂質土……1に近似する。溝4埋土

4：茶褐色砂質土……2に近似する。溝4埋土

5：黒色砂質土……第4層

1，2とは別の溝の埋土とも考えられるが，平面的に見ると東へ行くにしたがいこの区別が不能になる。一応，溝3として同一に及かっているが，いくつかの小溝の集りと考えている。溝4も同様であろう。

溝3の幅は190～150m，深さ13cm前後，溝4の幅は60～75cm，深さは18cm前後を測る。

出土遺物は，大半が細片であるが，白磁の小片や緑釉陶器の小片も含んでいる。層位的観察からも平安時代から中世にかけての溝と思われる。

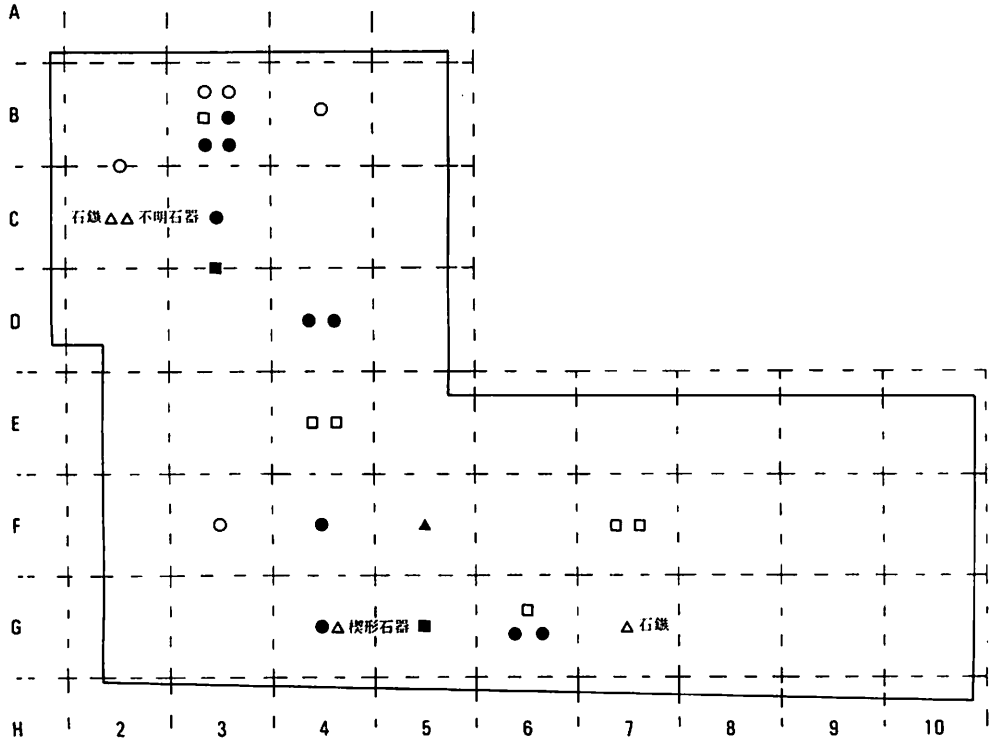
第５章　縄文時代・弥生時代の土器

第１節　縄文時代晩期の土器(第13・14図，図版第34下)

今回の調査では，縄文時代晩期の突帯文土器片が２点出土した(第14図１・２)。いずれも深鉢と推定され，第３層からローリングを受けた状態で検出された。

１は東西セクションベルトのC-D２区で出土した口縁部片である。丸く仕上げた口縁端部より，やや下がって，巾1.4cmの突帯を貼り付け，その上に7.5㎜間隔でヘラによる刻目を施す。全体的にヨコナデが顕著であり，突帯の接合部はナデ消される。また，内面には強いナデによる凹みが巡っている。表面は暗灰褐色，器肉は淡灰褐色を呈す。胎土には0.5～4.0㎜の砂粒を含むが，角セン石はみられない。焼成はやや軟である。器壁が厚く，粗放なつくりを呈しているなど，船橋式の特徴を備えている。

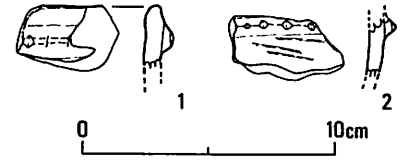
２はＧ５区第３層で検出された胴部片で，巾0.7cmの突帯を付している。接合部はナデ消され，突帯上にはヘラによる細かい刻目が施される。突帯より下方にはヨコ方向の条痕が認められる。外面は全面黒斑で，内面は淡茶褐色を呈す。胎土には１～３㎜の砂粒と，細かい角セン石，雲



第13図　縄文・弥生時代土器，石器出土分布図

■…縄文時代晩期　○…弥生時代前期　▲…弥生時代中期
□…弥生時代後期　●…弥生時代不明

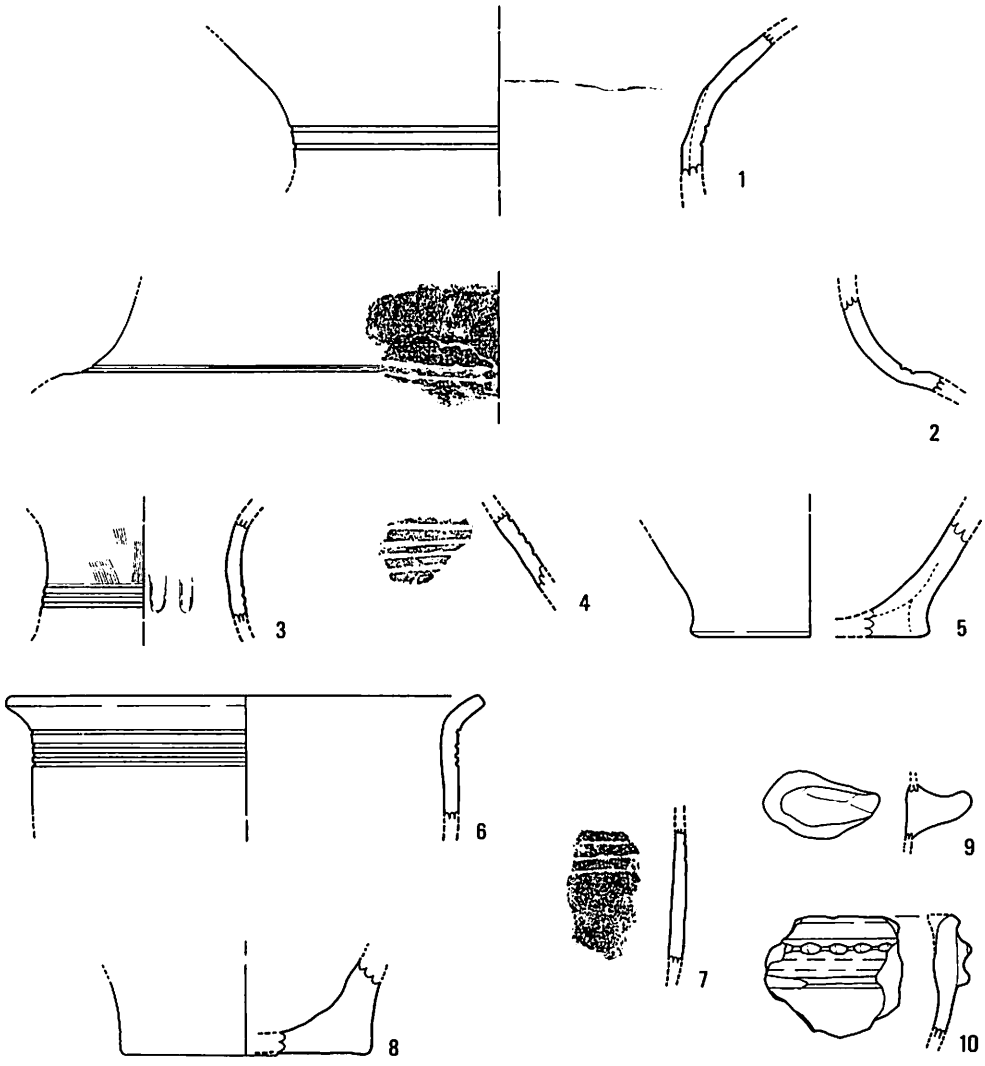
母片を多く含む。器形は胴部から口縁部まで，屈曲せず直立気味に立ち上がる形態である。器壁が非常に薄く，繊細なつくりを呈しており，長原式に属するものと推量できる。



第14図　縄文時代晩期の土器実測図

第２節　弥生時代の土器(第13・15図，図版第34下)

第３層中より，畿内第Ⅰ様式，第Ⅲ～Ⅳ様式，第Ⅴ様式の土器が出土した。数量はそれぞれ８点・１点・６点に，時期不明のもの11点を含めて，計26点である。このうち，第Ⅰ様式土器が数量も多く，また，Ｂ２～４区にまとまって出土していることは注目される。以下時期別に



第15図　弥生時代の土器実測図

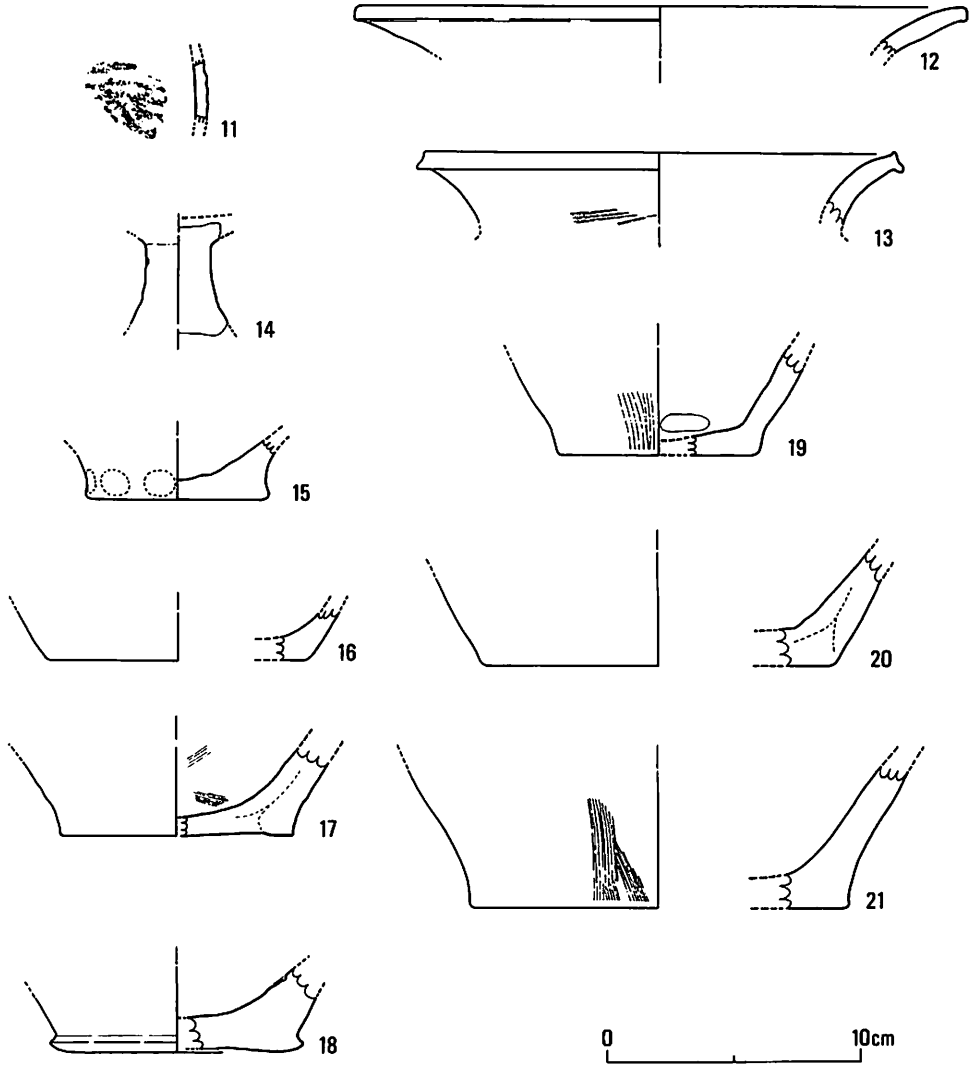
土器の説明を述べる。

1．第Ⅰ様式土器(第15図1～7・9)

1～5は壺，6・7は甕，9は鉢である。多条沈線をもつ新しい段階の土器が主体を占める。この時期の土器の胎土は，淡赤褐色を基調とするもの(第15図1・2・4・5～7)と，淡灰色を基調とするもの(同3・9)に大別でき，前者は石英・長石等の粗い石粒を多く含んでおり，後者は細かな砂粒を含んでいるという傾向がある。

1はB3区出土の壺の頸部片である。2＋α条の浅いヘラ描沈線を施す。表面が磨滅し，調整は不明であるが，断面及び内面に粘土紐の外傾接合が観察できる。

2はF3区出土の大形の壺である。球形の胴部上端と，直立気味に立ち上がる頸部下半の部



位が残存しており，その境目の屈曲が著しい。そこには半載竹管による２条の沈線が，押し引き手法で施されているが，器形から推量すれば第Ⅰ様式の古い段階に属する可能性もあろう。頸部はヘラ磨きを行なう。

３は溝６出土の小形の壺の頸部片である。復原頸部内径は6.4cmを測る。２＋α条沈線をもった削出し突帯を施す。外面はタテ方向の細かい刷毛目調整を行い，内面には指頭圧痕が残る。

４は溝３出土のヘラ描多条沈線もつ破片で，壺の胴上部に位置するものと推量できる。４条認められる沈線は太くしっかりしたものである。

５はＢ４区出土の壺の底部片であるが，胎土・色調等が１・６に酷似しており，出土地点も近いことから，第Ⅰ様式土器と判断した。復原底径9.4cmを測る。

６はＢ３区出土の甕である。復原口頸は18.4cmを測る。やや内傾する胴部から如意状に口縁部が外反し，端部に面をもつ。口縁下には，しっかりした４条のヘラ描沈線を施している。調整は外面がヨコナデ，内面は口縁下２cmまでヨコ方向の板ナデで以下左上りの板ナデである。

７は出土地不明の土器片で，３条の平行沈線が走ることから第Ⅰ様式の甕と判断した。沈線は非常に細く，調整は磨滅のために不明である。

９はＣ３区出土の把手である。新しい時代の遺物の可能性もあるが，第Ⅰ様式の把手付鉢形土器と判断した。厚さ約0.9cmの台形状の粘土を貼りつけ，その上面に指で押圧を加え，端部を上向きにしている。磨滅が著しく，調整は不明。

２．第Ⅲ～Ⅳ様式土器(第15図10)

前期・後期の土器に較べて中期の土器は極端に少ない。中期と推定できる底部片もあるが，明確に時期を判別し得るものは，10の土器のみであった。

10はＦ５区出土の鉢である。内弯しながら直口し，口縁端部付近で極端に肥厚する。端部内面が削られているが，端部は面をもっていたと思われる。また外方向にも面取りを行っている。口縁下に２条の貼付突帯を巡らし，指による大きめの刻目を施す。下の突帯は磨滅のために，刻目の有無は不明である。淡灰色を呈し，胎土には0.5～3.0㎜の石英・長石等の石粒を含む。焼成は良好。

３．第Ⅴ様式土器(第15図11～14)

この時期の土器は，調査区の南半に主にみられる。甕(第15図11～13)，高杯(同14)がある。第３層出土の土器の中に，高杯は多く含まれるが，中世土器までの包含層であるため，新しい時代のそれとの判別が困難であり，ここでは，確実に弥生時代と思われる１点をあげるに止めた。

11はＧ６区出土の甕の胴部片で，粗い叩き目が残る。器壁は0.5～0.6cmと薄く仕上げている，内面の調整は磨滅のため不明。灰白色を呈し，細かな砂粒を多く含んでいる。焼成は良好。

12・13は，土壙86より，他の時代の遺物に混在して出土した。いずれも甕の口縁部で，灰白

色を呈し，細かな砂粒を多く含んでいる。焼成は良好。12は復原口径24cmを測る。口縁部が強く外反し，端部に面を持つ。内外面をヨコナデで調整し，そのために端面下部に凹みが生じている。13は復原口径18.5cmを測る。口縁部が外弯しながら外反し，その端部が上下両方向に拡張して，真中がやや凹んだ面を持つ形態を有す。内外面ともヨコナデで調整するが，外面下部に叩き目の痕跡が認められる。

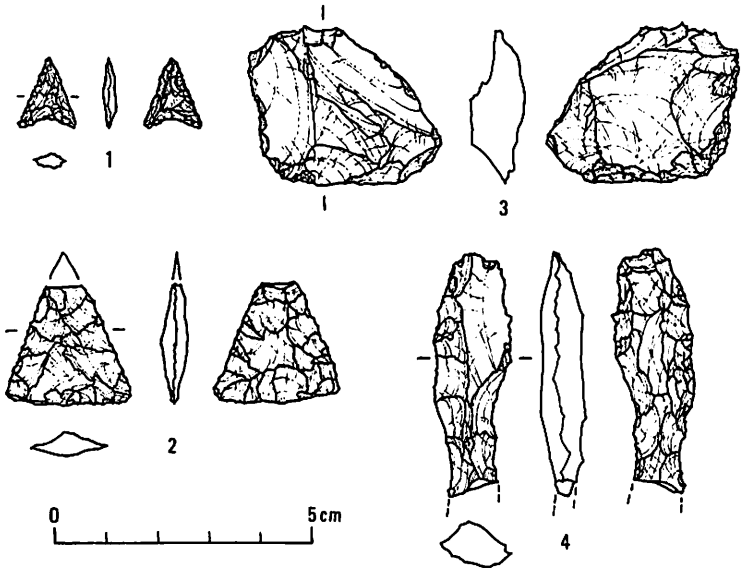
14はＢ３区より出土した高杯の脚部片である。中実の柱状部分のみ残在しており，裾広がりを呈す。表面は激しくローリングを受けており，詳細な調整は不明であるが，タテ方向の強いヘラ磨きによって，３～４㎜巾の面の痕跡が認められる。淡赤褐色を呈し，胎土に１㎜程度の砂粒を多く含んでいる。焼成はやや軟。

４．その他の土器((第15図８・15～21)

他の土器は時期不明の底部片である。復原底径により，７～８cmの小型のもの(15・19)，９～10cmの中型のもの(８・16・17・18)，13～15cmの大型のもの(20・21)に大別できる。８・15・17・19・21は，灰色を基調とした胎土をもち比較的細かな砂粒を含んでいる。16・18は赤褐色，20は黄褐色を呈し，１～３㎜大の石粒を多く含んでいる。

第３節　石　器(第13・16図，図版第35上)

石器は，５点出土したのみである。その内訳は，石鏃２点，楔形石器１点，不明石器１点，砥石１点である。この他に，サヌカイトの剝片が２点みられた。砥石については，時期が新しいと思われるので後述する。



第16図　石器実測図

石鏃

１は，小型の凹基無茎式石鏃である。完形。サヌカイトを素材とする。風化が著しく，灰白色を呈し，詳細な観察は困難である。両面とも全体に丁寧な調整を施している。抉りはやや浅い。長さ1.3cm，幅1.1cm，厚さ0.2cm，重さ0.25gである。Ｃ２区，第３層出土(図版第32上)。

２は，やや大型の平基無茎式石鏃である。先端

部を折損する。1と同じくサヌカイトを素材とするが，風化はあまり進行しておらず，灰黒色を呈する。やや粗い平坦な調整が，両面の全体に施される。側縁は，ほぼ直線である。断面は凸レンズ状を呈する。残存長2.3cm，幅2.4cm，厚さ0.5cm，重さ2.6gである。G7区，第3層出土。

楔形石器

1点のみ出土している。良質のサヌカイトを素材とする。図の右側の面は，大きく平坦な数回の剝離によって形成され，下辺には著しい階段状剝離が認められる。左側の面は，幅広でやや浅い剝離による調整を各側縁から行なっている。截断面は認められない。素材はやや部厚く，石核素材かとも思われる。長さ3.1cm，幅3.6cm、厚さ1.0cm，重さ12.3g。G4区，第3層出土。

不明石器

サヌカイトを素材とする。残存長4.7cm，幅1.6cmの細長い形態を呈する。幅が狭まりつつある側を折損する。急角度のやや粗い剝離によって周縁を調整しており，片面の一部に素材剝片の剝離面を残す。残存部分をつまみ部，欠失部分を錐部とする石錐か。厚さ0.9cm，重さ6.7g。C2区，第3層出土。

以上の石器は，いずれも包含層中から単独に出土したものであり，所続時期等は，確定し難いが，石鏃については，その形態的特徴や風化の進行度の差から，1が縄文時代，2が弥生時代のものと考えられよう。

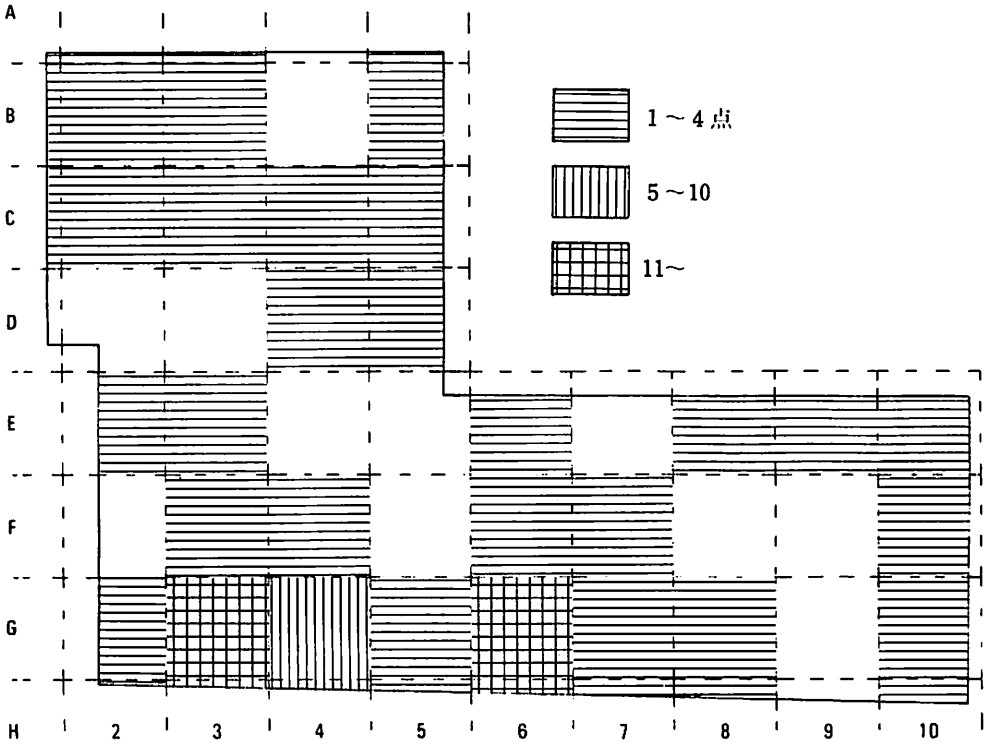
第6章　遺　物

第1節　瓦　類(第17・18図)

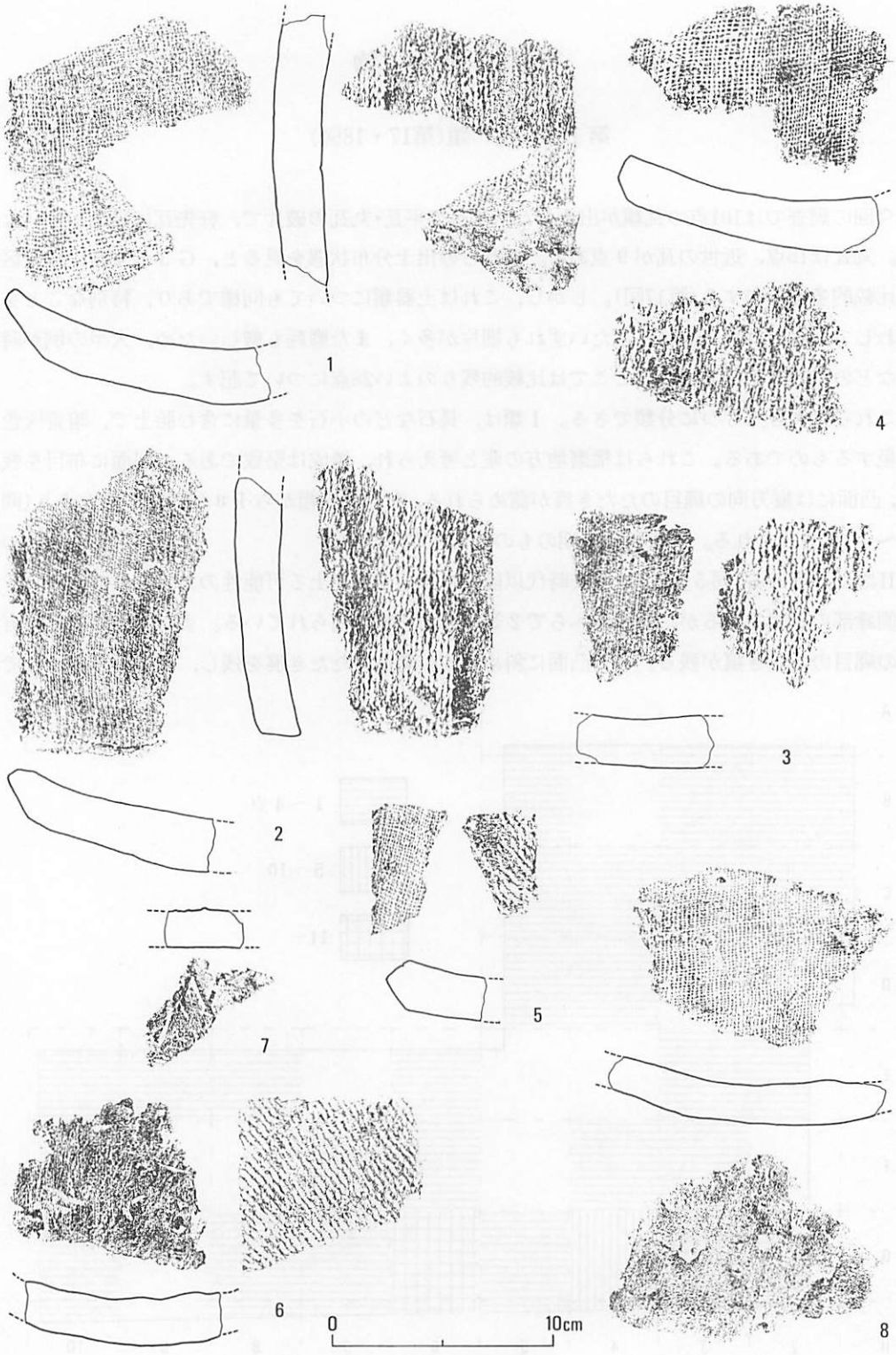
今回の調査では101点の瓦類が出土した。すべて平瓦・丸瓦の破片で，軒先瓦は出土していない。丸瓦は15点，近世の瓦が9点ある。これらの出土分布状態を見ると，G3・4区，G6区に比較的多く分布する(第17図)。しかし，これは土器類についても同様であり，特別なことを表わしているとは思えない。またいずれも細片が多く，また磨耗も厳しいため，大半の例が時期などの詳細は不明である。ここでは比較的残りのよい28点について記す。

これらは大きく3つに分類できる。I類は，長石などの小石を多量に含む胎土で，暗青灰色を呈するものである。これらは播磨地方の産と考えられ，焼成は堅致である。凹面に布目を残し，凸面には縦方向の縄目のたたき痕が認められる。布目の精粗からIa(第18図4)とIb(同1～3)に分けられる。平安時代前期のものであろう。

II類は3点ある(同5，6)。平安時代以前，白鳳期にまで上る可能性のあるものである。5は側縁部の破片であるが，側縁がへらで2等辺三角形状に削られている。また凸面には斜め方向の縄目のたたき痕が残る。6も凸面に斜め方向の縄目のたたき痕を残し，凹面の布目はなで



第17図　瓦類出土分布図



第18図　瓦類実測図

消されている。どちらも胎土は良好で，焼成も堅致である。

Ⅲ類は５点ある(同７，８)。７は凸面に格子のたたき痕が残る。８は凹面に布目，凸面はへら削りで調整する。どちらも焼成は軟質である。いずれも比較的時期幅の広い特徴をもつ一群である。

以上，瓦類について記したが，大半が細片であること，磨耗が著しいこと，調査地全体に分布することなどから，後世の整地の時に動いてきたことを思わせる。ただし，白鳳期の瓦片が少量であれ出土していることは，これらが芦屋廃寺に用いられていただろうことは容易に推測できる。

第２節　土器類(第19～22図)

１．建物１・２・３，柵出土土器

須恵器

杯蓋は三種に分類できる。ひとつは椀形のもの(第19図１)で，６世紀末葉から７世紀前葉に比定できる。次にあげられるのは，内面にかえりをもつもの(同２・３)で，７世紀後半の製品である。４はこの種類の杯蓋のつまみであろう。さらに，内面にかえりをもたないもの(同５・６・７)がある。６は擬宝珠形のつまみをもつ。口径19.6cm，高さ2.6cmを測る。内面には墨が付着しており，硯として転用されていたことがわかる。８世紀中葉のものであろう。７はやや新しく，８世紀後葉から９世紀前葉に比定される。

杯身は二種に分類できる。ひとつは，たちあがりと受部をもつもの(同８)で，６世紀末葉に比定できる。もうひとつは，高台をもつもの(同９・10・11・12)である。いずれも８世紀から９世紀前葉のものである。10は底部に回転糸切りの痕跡がのこる。杯身口縁部の破片(同13・14・15)も存するが，高台をもつかどうかはわからない。

盤(同16)は，口径17.2cm，高さ1.6cmを測る。８世紀代のものであろう。

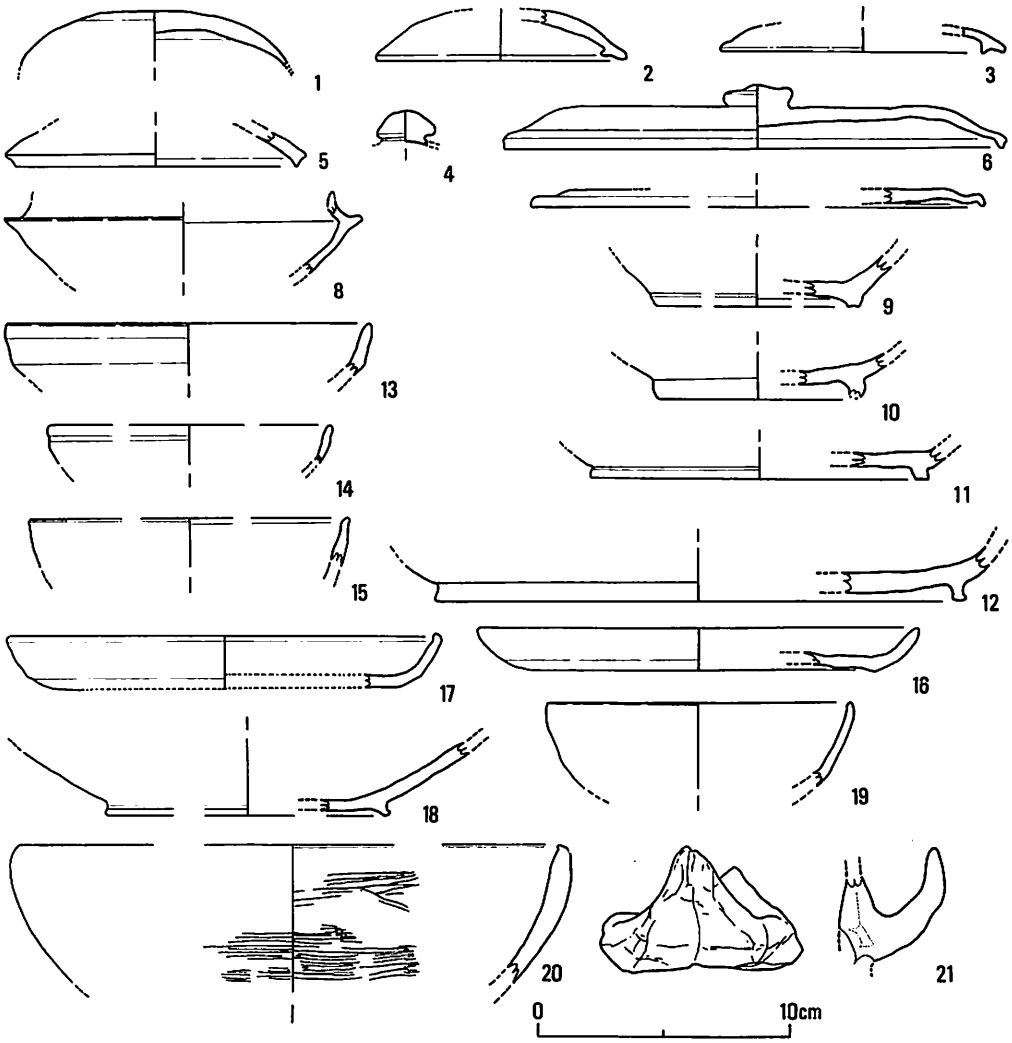
土師器

皿(同17)，杯(同18)，椀(同19)，鉢(同20)，甕把手(同21)がある。18の内面には煤が付着する。20は内外面ともにハケ目によって調整する。

２．柱穴・土壙出土土器

須恵器

杯蓋は三種に分類できる。それぞれ椀形のもの，内面にかえりをもつもの，かえりをもたないものである。椀状の杯蓋(第20図１・２)は，７世紀初頭に比定しうる。天井部は回転ヘラキリ不調整である。内面にかえりをもつ杯蓋(同３・４・５・６・７)は，７世紀前葉から同後葉にかけてのものである。いずれも宝珠つまみをもつものであろう。なかでも，３・４はやや古い型式的特徴を備えている。７はやや新しい特徴をもつ。内面にかえりをもたない杯蓋(同８・９・10・11・12)は，８世紀前葉から９世紀代にかけての時期に比定しうる。

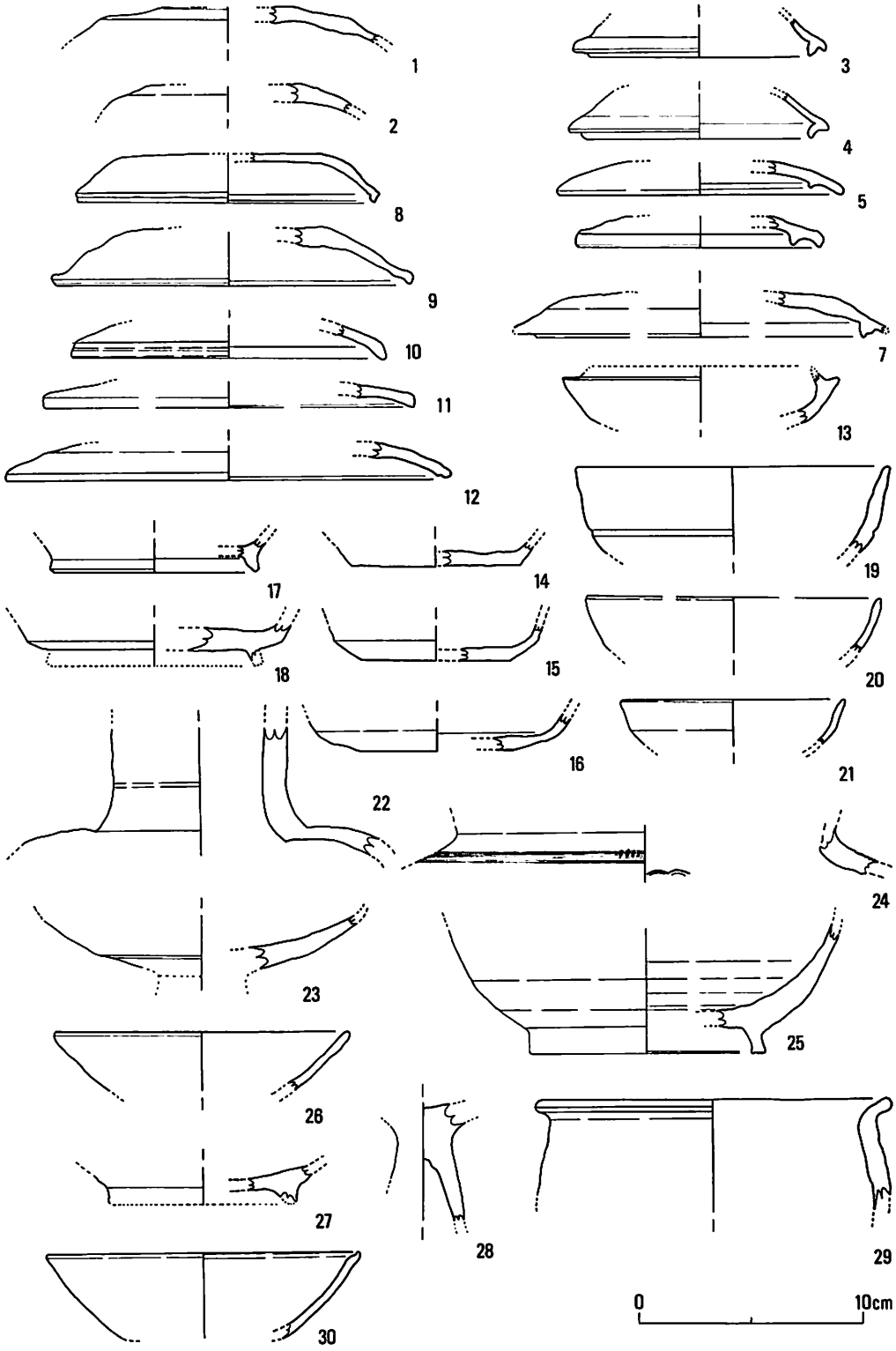


第19図　建物１・２・３，柵出土土器実測図
（出土地点は第２～５表参照）

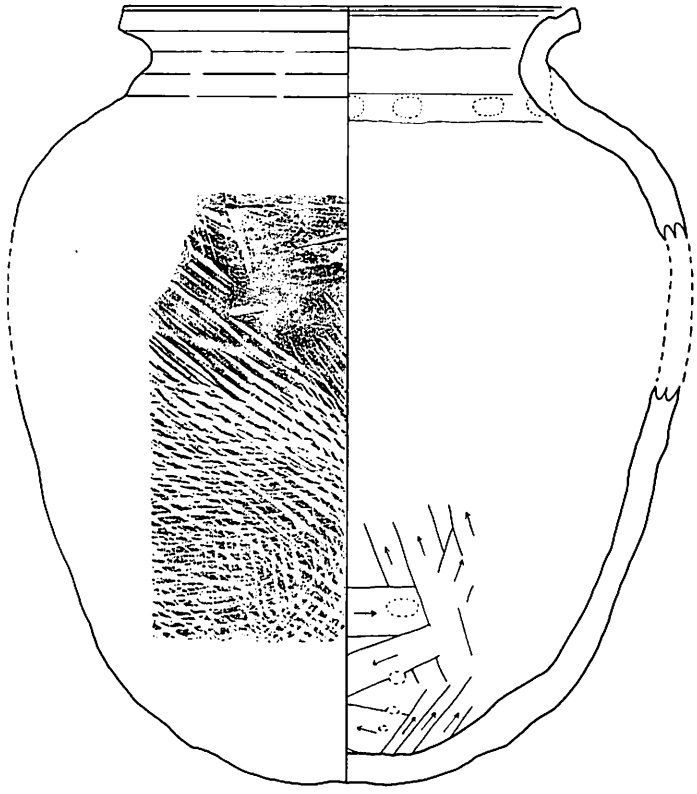
杯身にも三種がある。たちあがりと受部をもつもの，椀形のもの，高台をもつものである。たちあがりと受部をもつ杯身(同13)は，７世紀初頭のものである。椀形の杯身(同14・15・16)と高台をもつ杯身(同17・18)は，７世紀から９世紀にかけて製作される。口縁部のみ残存するもの(同19・20・21)はどちらに属するか不明である。これらの杯身のうち，15・18・19は７世紀代のものであろう。

他の器種としては，高杯(同23)，壺(同24・25)，平瓶(同22)がある。

なお，土壙93より甕(第21図)が出土した。復原高30.8cm，口径18.0cm，胴径26.9cmを測る。口頸部は外反し，口縁部内面には浅い凹線がめぐる。胴部には粗い平行叩き痕が残る。胴部内面は不定方向の削りを施す。胴部上半から口頸部にかけては，タタキによって成形した後，ヨコナデを施す。魚住窯の産と考えられる。時期は12世紀中頃であろう。



第20図　柱穴・土壙出土土器実測図
(出土地点は第1表参照)



第21図　土壙93出土甕実測図

土師器

椀(第20図26)，高台付き杯(同27)，高杯(同28)，甕(同29)などがある。

黒色土器

椀(同30)である。土師質で，内面をいぶしている。

3．溝3・4出土土器

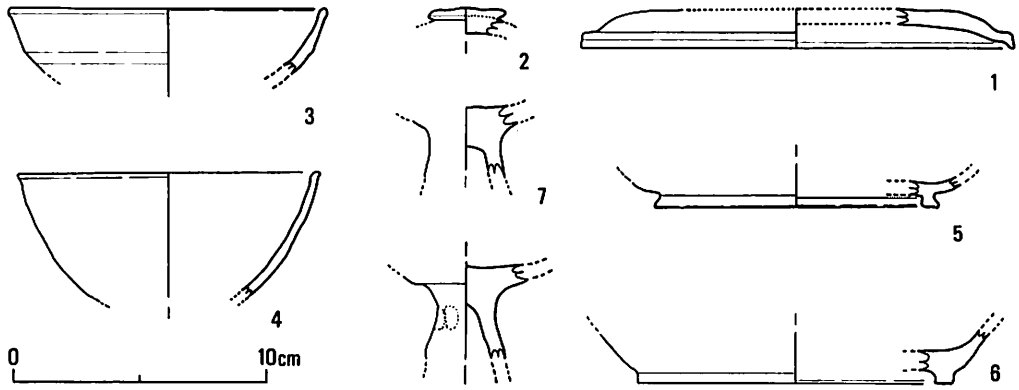
須恵器

杯蓋(第22図1・2)は，口縁部が屈曲し，扁平な擬宝珠形つまみをもつ。8世紀後半から9世紀前葉のものである。杯身(同3・4・5・6)は，高台部のみ残るものと，口縁部のみ残るものがある。5は7世紀末から8世紀前葉，6は8世紀後葉から9世紀前葉のものであろう。

他の器種としては，高杯(同7)がある。

土師器

高杯(同8)がある。



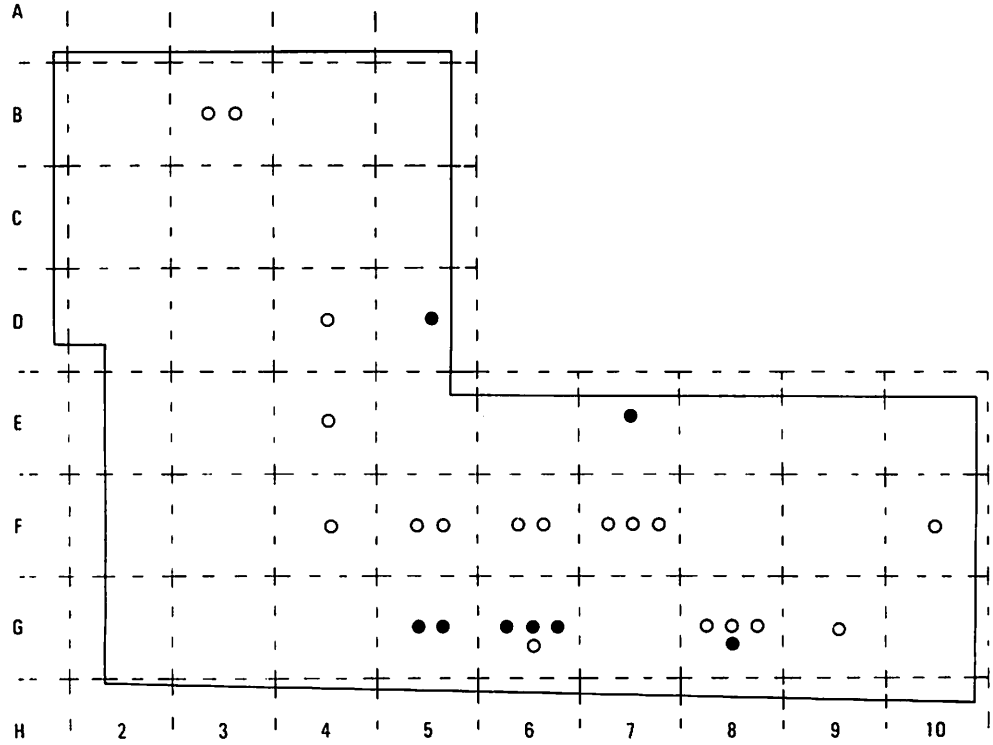
第22図　溝３・４出土土器実測図

第３節　その他の遺物

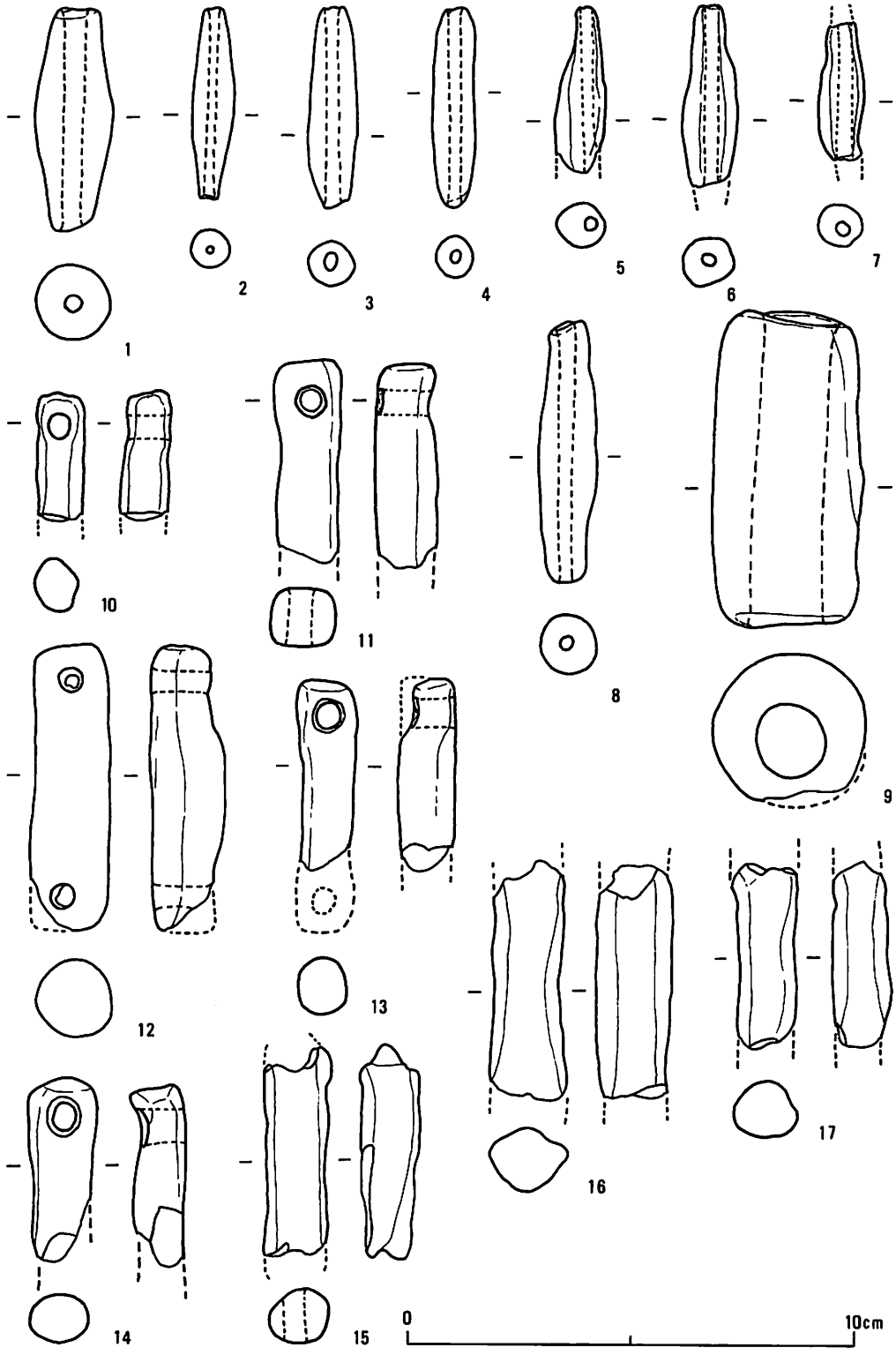
その他の遺物としては，土錘，和同開珎，柱根，砥石，近世土人形などが出土した。

１．土錘(第23・24図，第６表，図版第35下)

土錘は26点出土した(第24図，第６表)。これらは，管状土錘(Ⅰ類)と瀬戸内型土錘[5](Ⅱ類)とに分けられ，それぞれ９点，17点である。完形のものが少なく，重量分布を示すことはできないが，Ⅰ類3.2～11.7ｇであるのに比べ，Ⅱ類の方が20ｇ前後とやや重いように思われる。ただし，第24図９は大形の管状土錘で，重さは64.8ｇを測る。



第23図　土錘出土分布図
(○…瀬戸内型土錘　●…管状土錘)



第24図　土錘実測図

第6表　土錘一覧表　○Ⅰ…管状土錘　Ⅱ…瀬戸内型土錘　○単位はcm, g

遺物番号	層　位	遺存状態	型	大きさ			挿図番号
				長　さ	直　径	重　さ	
D5-B1	2層	完形	Ⅰ	4.5	1.1	5.1	第24図 3
柵1.2-B1	埋土	¼欠	Ⅱ	(4.5)	1.4	(10.3)	11
土壙86-B1	埋土	一部欠	Ⅱ	6.3	1.7	19.8	12
溝4-B1	埋土	⅓片	Ⅱ	(2.3)	1.2	(3.8)	13
うね-B1	埋土	両端欠	Ⅱ	(5.4)	1.5	(17.7)	16
F5-B1	3層	⅓欠	Ⅱ	(4.3)	1.3	(6.5)	
G6-B4	2層	½欠	Ⅱ	(2.8)	1.1	(4.2)	10
F4-B1	3層	⅔片	Ⅱ	(4.0)	1.3	(8.6)	17
E7-B1	2層	完形	Ⅰ	4.5	1.0	3.8	4
全体-B3	2層	⅓欠	Ⅱ	(4.7)	1.3	(9.2)	15
F5-B2	3層	½欠	Ⅱ	(4.0)	(1.3)	(5.9)	14
G5-B1•2	3層	完形	Ⅰ	5.7	1.3	9.2	8
G5-B1•1	3層	一部欠	Ⅰ	5.0	1.8	11.7	1
G8-B1•1	2層	一部欠	Ⅰ	6.9	3.5	64.8	9
G8-B2	3層	一部欠	Ⅱ	3.1	1.1	2.4	7
G6-B2	3層	完形	Ⅰ	4.3	1.0	3.2	2
G6-B3.2	3層下	⅓欠	Ⅰ	(4.1)	1.1	(4.2)	6
G6-B3•1	3層下	⅓欠	Ⅰ	(3.7)	1.0	(3.4)	5
B3-B1	3層	一部片	Ⅱ	(2.7)	1.4	(4.8)	
F7-B2	3層下	½片	Ⅱ	(3.9)	1.4	(7.8)	
B3-B2	3層	一部片	Ⅱ	(2.2)	1.3	(4.5)	
F7-B1•1	3層	一部片	Ⅱ	(2.5)	1.5	(6.3)	
F7-B1•2	3層	一部片	Ⅱ	(2.8)	1.0	(3.8)	
G8-B1•2	2層	一部片	Ⅰ	(2.8)	2.0	(8.6)	
G9-B1	3層	⅓欠	Ⅱ	(4.0)	3.0	(3.2)	
F6-B1	3層下	一部片	Ⅱ	(2.9)	1.3	(4.8)	

2．和同開珎(第25図，図版第35上)

建物3一柱穴7より和同開珎が3点出土した(図版第32下)。この3点は，貼りついた形で出土したが，表•裏の2点は一部を欠損，中の一点はほぼ完形である。各部分の大きさは下記のとおりである。

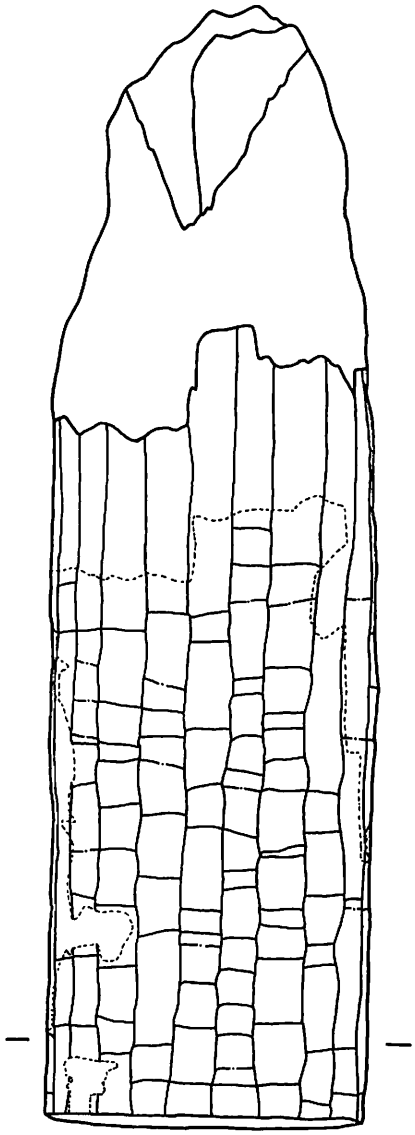
外縁外径……2.45～2.46cm

内郭内径……0.60～0.62cm

外 縁 幅……0.13～0.21cm

0　3cm

第25図　和同開珎拓影図



第26図　柱根実測図

3．柱　根(第26図，第7表，
図版第36～38)

柱穴1，2，3，4，5，13，建物1—柱穴1'，7，10より9点の柱根[6]が出土した。うち，柱穴1の柱根は細片である。

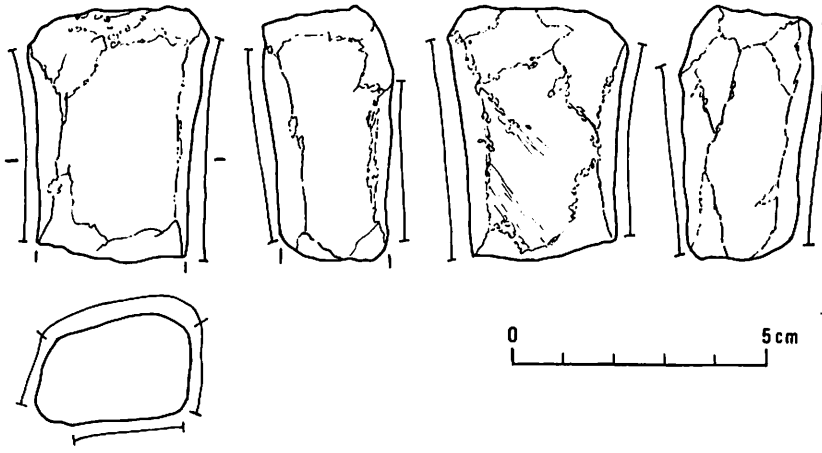
これらのうち，建物1—柱穴1および10の柱根は長さ87・97cmとかなり長く残存していた。とくに建物1—柱穴1の柱根は，直径29cmで，表面は，縦方向のちょうな整形痕が明瞭に残っている。これをみるとちょうなの整形は，基部方向から，時計まわりに幅3～4cmで施されている(第26図)。

4．砥　石(第27図，図版第35上)

小形の砥石片である。約2分の1を欠損する。手持ち砥石と考えられるが，やや粗い砂岩を素材としており，荒砥用かと思われる。作業面は4面みられ，いずれもよく使用されている。一部に使用痕と考えられる線状痕が若干認められる。残存長4.9cm，幅3.6cm，厚さ2.6cm，重さ58.9gである。溝3埋土より出土。

第7表　柱根一覧表(単位はcm)

柱番号	遺構番号	材　質	大きさ		図版番号
			長さ	直径	
1	柱　5	コウヤマキ	54.0	33.0	37—1
2	柱　3	ヒノキ	34.0	23.0	38—4
3	建1—7	コウヤマキ	25.0	26.0	38—1
4	柱　13	ヒノキ	28.0	15.0	38—3
5	柱　4	ヒノキ	52.0	17.0	37—2
6	柱　2	ヒノキ	20.0	16.0	38—2
7	建1—1	カヤ	87.0	29.0	36—1
8	建1—10	コウヤマキ	97.0	25.0	36—2



第27図　砥石実測図

おわりに

最後に今回の調査の要点を記してむすびとしたい。

まず注目されるのは，縄文時代晩期から弥生時代の資料が，少量ながらも出土したことである。とくに，縄文時代晩期，船橋・長原式から弥生時代前期の資料は，最近，縄文から弥生への移り変わりの時期が注目されているだけに重要であるとともに，周辺にこの時期の遺跡が位置しているだろうことは推測できる。また，弥生時代は中期・後期の資料もあり同様である[7]。

次に，奈良時代から平安時代にかけての遺構が多数検出されたことである。詳細の不明の遺構が多いが，その中でとくに建物１・２・３，柵列は，ほぼ同時期のものと考えてよい。建物１・２が倉庫と考えられるので，柵列，建物３は，倉庫群を区切る塀などの建物と考えてよいであろう。このことは，出土遺物が少なく，あまり直接生活の場ではなかったように思われることからも推定できる。ただ，建物１・２をはじめ各遺構ともかなりしっかりした柱穴をもっており，またその中に残る柱根も非常にしっかりしたものである。このことから，これらの倉庫群の性格を公的な施設と考えたい。また，建物３の柱穴より地鎮のために埋納したと思われる和同開珎が出土したことは，建物群の時期を決める資料であるとともに，重要な遺物として注目される。

出土遺物については，何度も記したように全体に細片が多く磨耗も激しい。これは，すべての資料についていえることであり，整地などの二次推積中に遺物が含まれていたと考えた方がよいであろう。その中で少量であるが，白鳳期にまでさか上る可能性のある瓦片が出土したことは，芦屋廃寺との関係を考える上で重要である。

今回，芦屋廃寺の遺構は検出できなかったが，先の調査[8]の結果とあわせて考えると，その範囲は，今回の調査地の北東側と考えてよいであろう。

以上のように，今回の調査地は，この建物群の一部にあたっていると思われ，これらの遺構はその状況から，北，西，南へのびている可能性は十分にあり，周辺の調査では注意する必要がある。また，先に記したように縄文時代から弥生時代の遺跡が位置する可能性もあり，今後十分に配慮されることを期待するとともに，調査研究を続けて行きたい。

本報告の作成については，下記の調査補助員，整理員の方々にお世話になった，心より謝意を表する。

緒方泉，山田邦和，岩元雅毅，木下　明，森下英治，中村健二，澤山孝之，柴田潮音，船戸裕子，飯田美佐子，岸本伸子，牧岡和佳奈，山口あずさ，松村由美(敬称略)

また，最後になったが，調査から報告に至るまでには多くの先生方，諸先輩，調査地近隣，芦の芽グループの方々，また平安博物館調査部，事務局の諸氏から多大の助言を得た。記して

謝意を表する。

渡辺誠，江谷寛，藤川祐作，森田稔，鋤柄俊夫，内田俊秀，松田隆嗣，山本徹男，天野英男（敬称略）

註

1）周辺の遺跡については，下記の文献に詳しい。
- 森岡秀人『三条岡山遺跡』（『芦屋市文化財調査報告』第10集，芦屋，昭和54年）。
- 下條信行・南博史『神戸市東灘区本山遺跡発掘調査報告書』（京都，昭和59年）。
- 片岡肇ほか『神戸市東灘区本庄町遺跡発掘調査報告書』（京都，昭和60年）。

2）村川行弘ほか『会下山遺跡』（『芦屋市文化財調査報告』第3集，芦屋，昭和39年）。

3）森岡秀人前掲報告書。

4）村川行弘ほか『芦屋市廃寺址』（『芦屋市文化財調査報告』第7集，芦屋，昭和45年）。

5）渡辺誠・南博史『平安京土御門烏丸内裏跡』（『平安京跡研究調査報告』第10輯，京都，昭和58年）。

6）なお，材質の同定については，㈱元興寺文化財研究所保存科学研究室の松田隆嗣氏にお願いした。

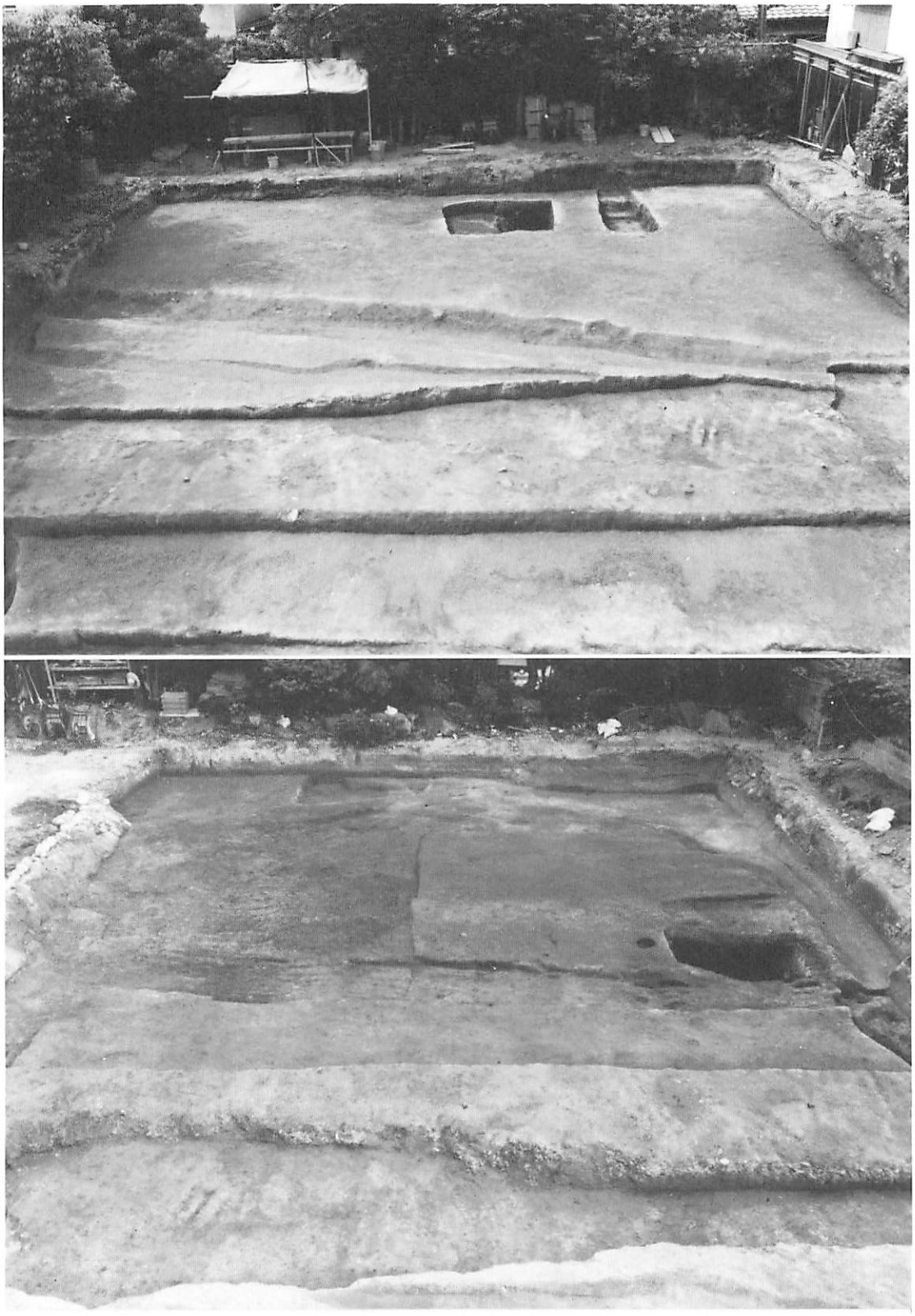
7）調査地より約50m北側において，弥生時代の太形蛤刃磨製石斧が1点採集されている（『芦屋市遺跡地図』より）。

8）村川『芦屋廃寺址』（前掲）。

図　版

調査地全景(上：南東より　下：南西より)

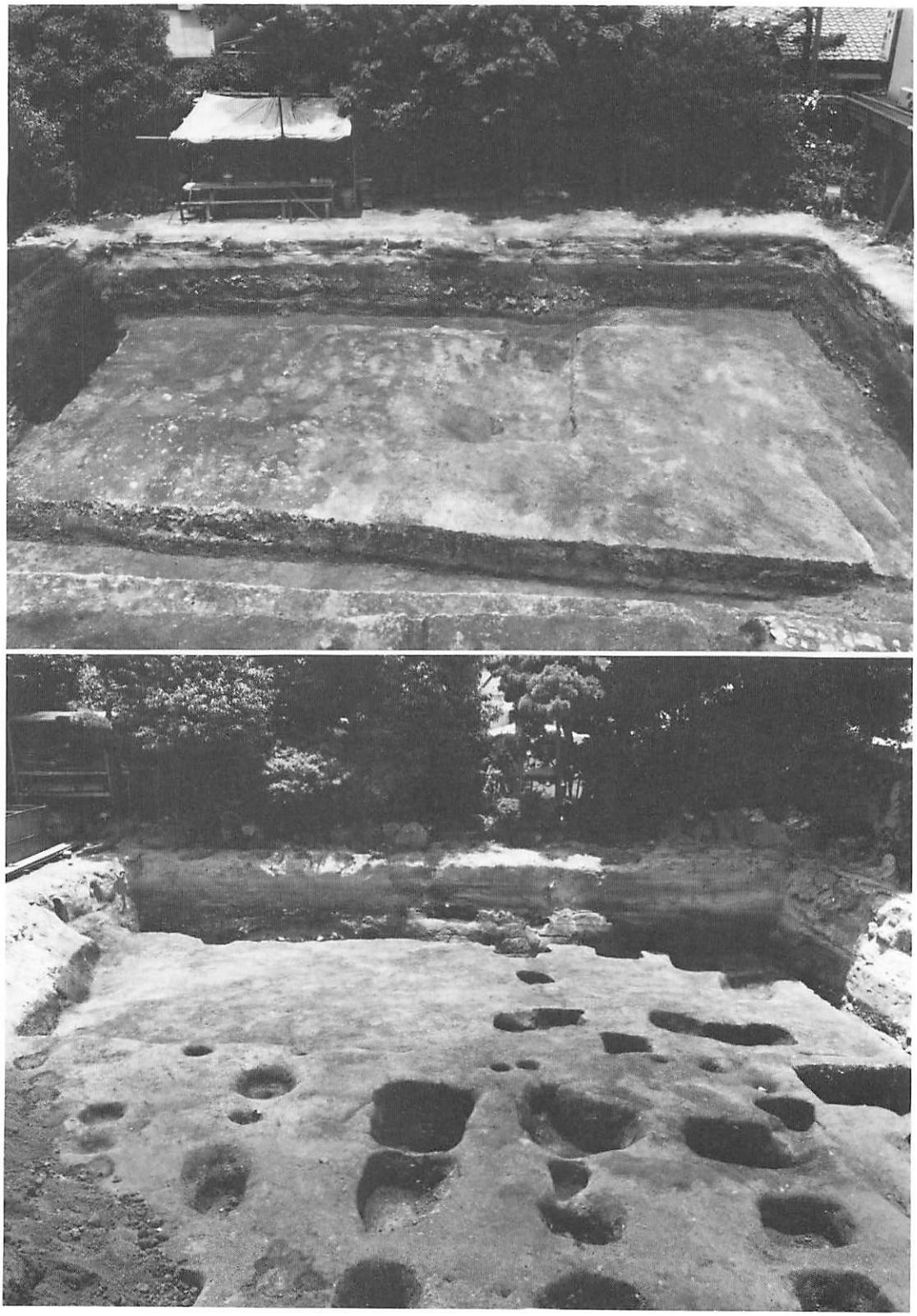
図版第 2



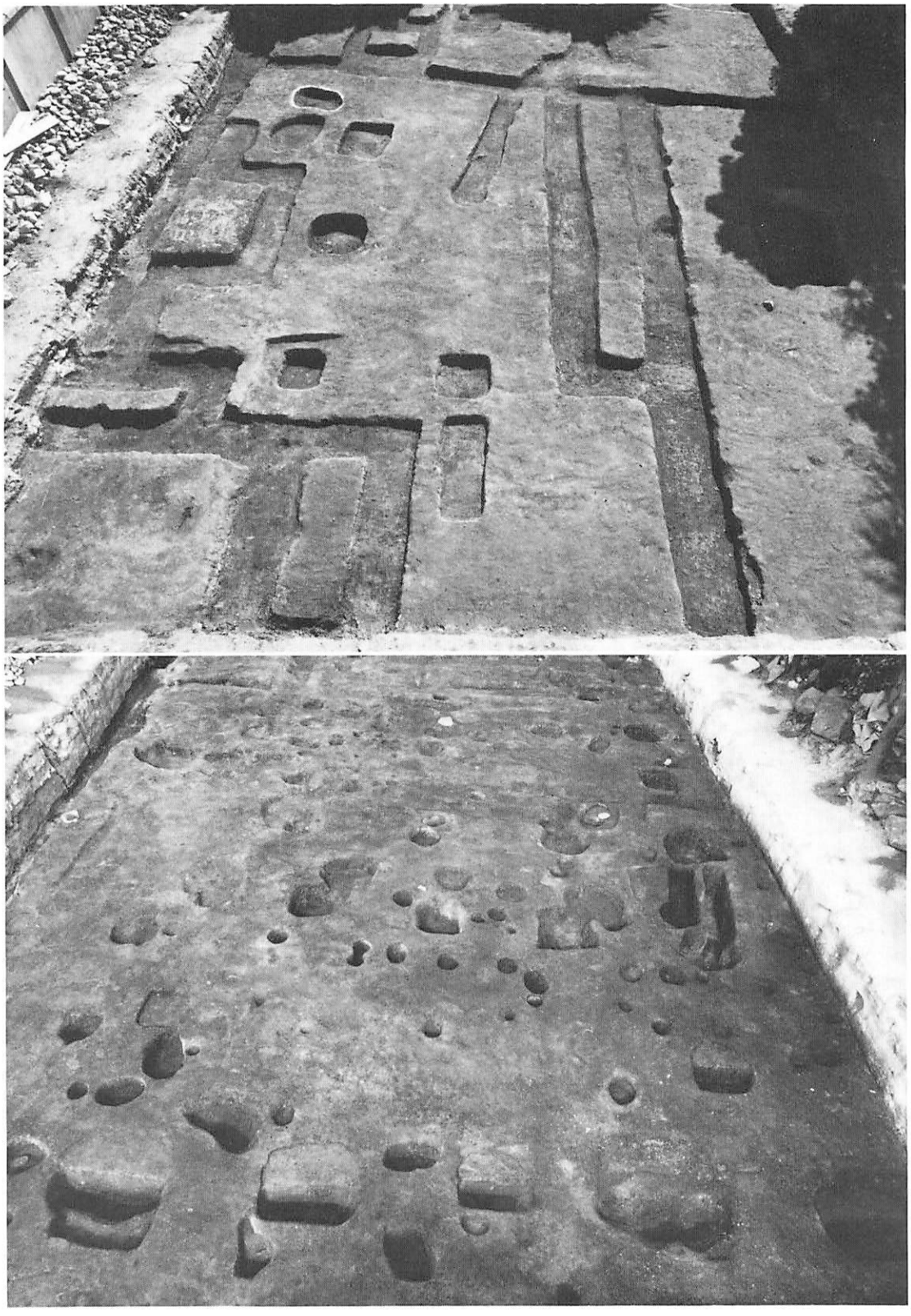
北・南区第３層上面全景(上：北区，南より　下：南区，北より)

北・南区第 4 層上面全景(上：北区，南より　下：南区，北より)

図版第 4

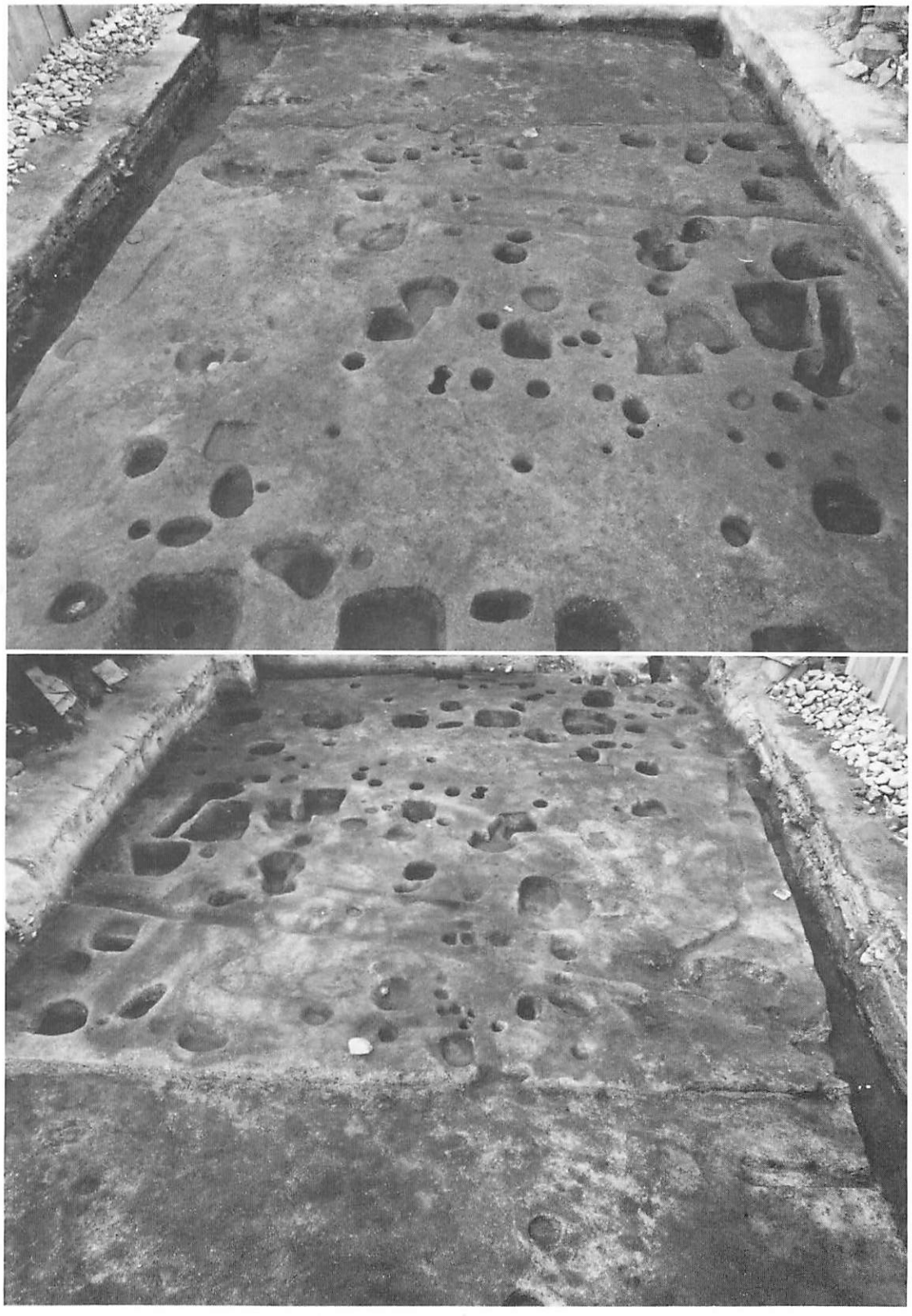


北・南区調査終了全景(上：北区，南より　下：南区，北より)

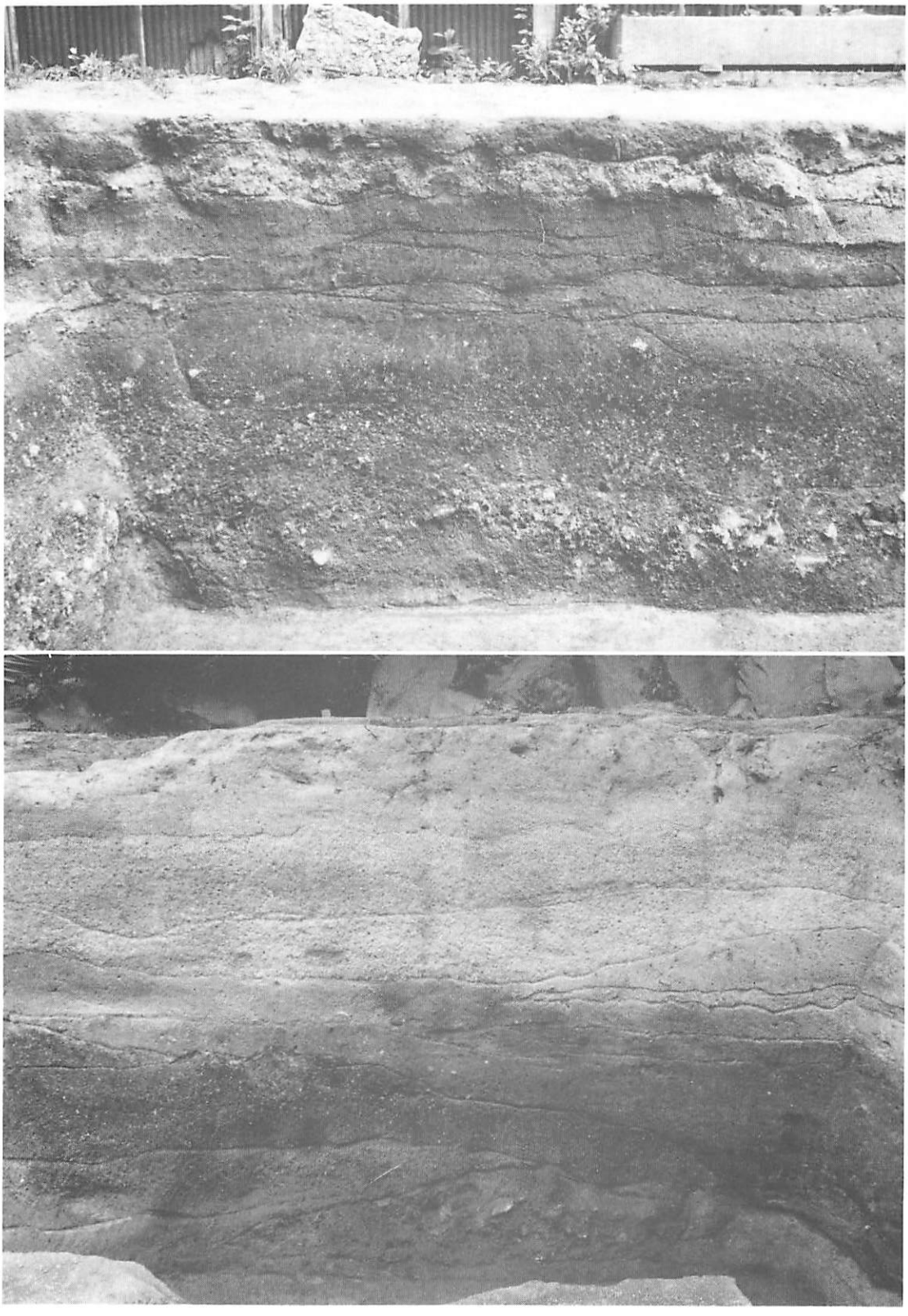


上：東区第 3 層上面全景(西より)
下：東区第 4 層上面全景(西より)

図版第 6

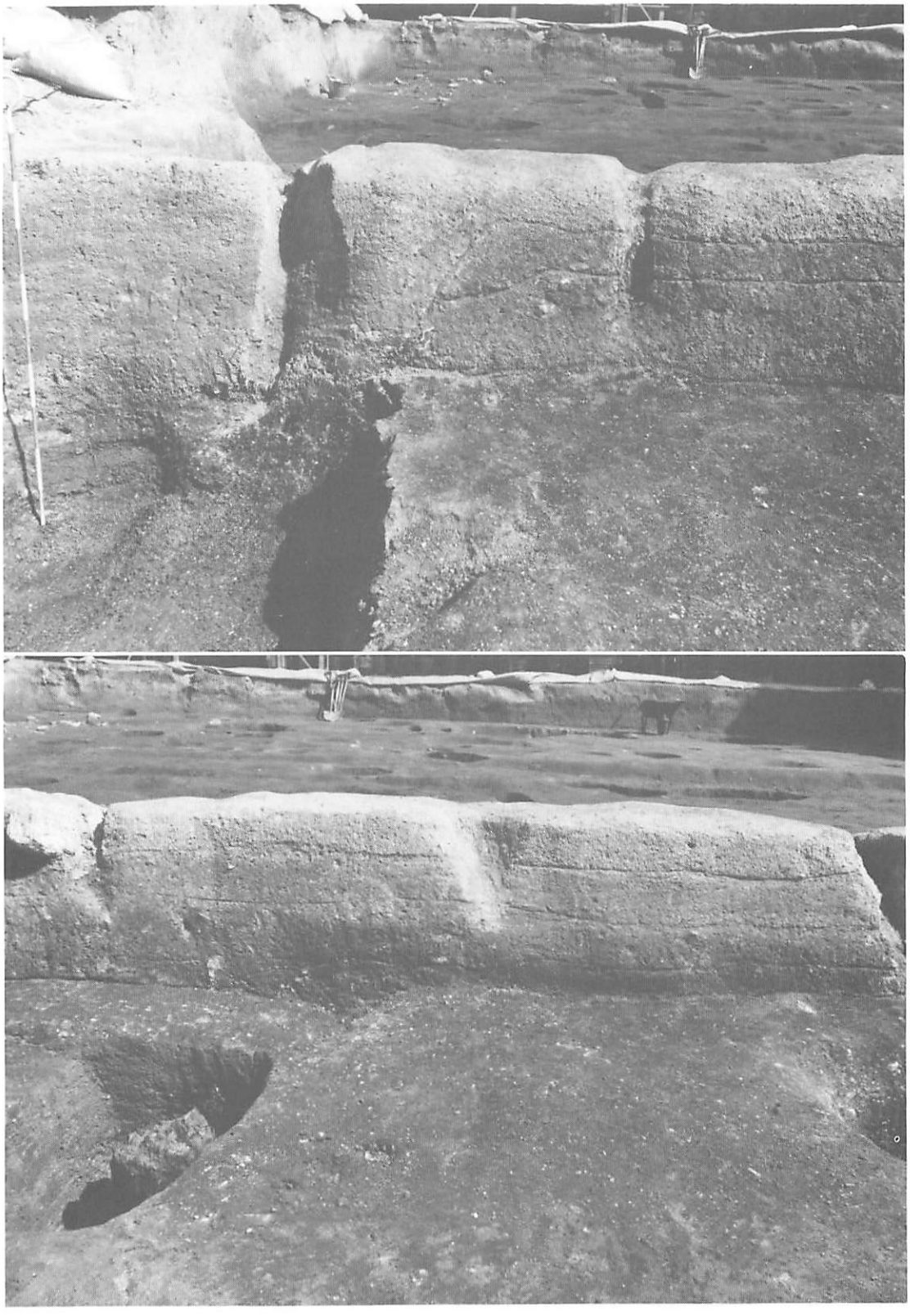


調査終了全景(上：西より　下：東より)



上：北区東壁断面（Ｂ５区）
下：南区南壁断面（Ｈ２，３区）

図版第 8

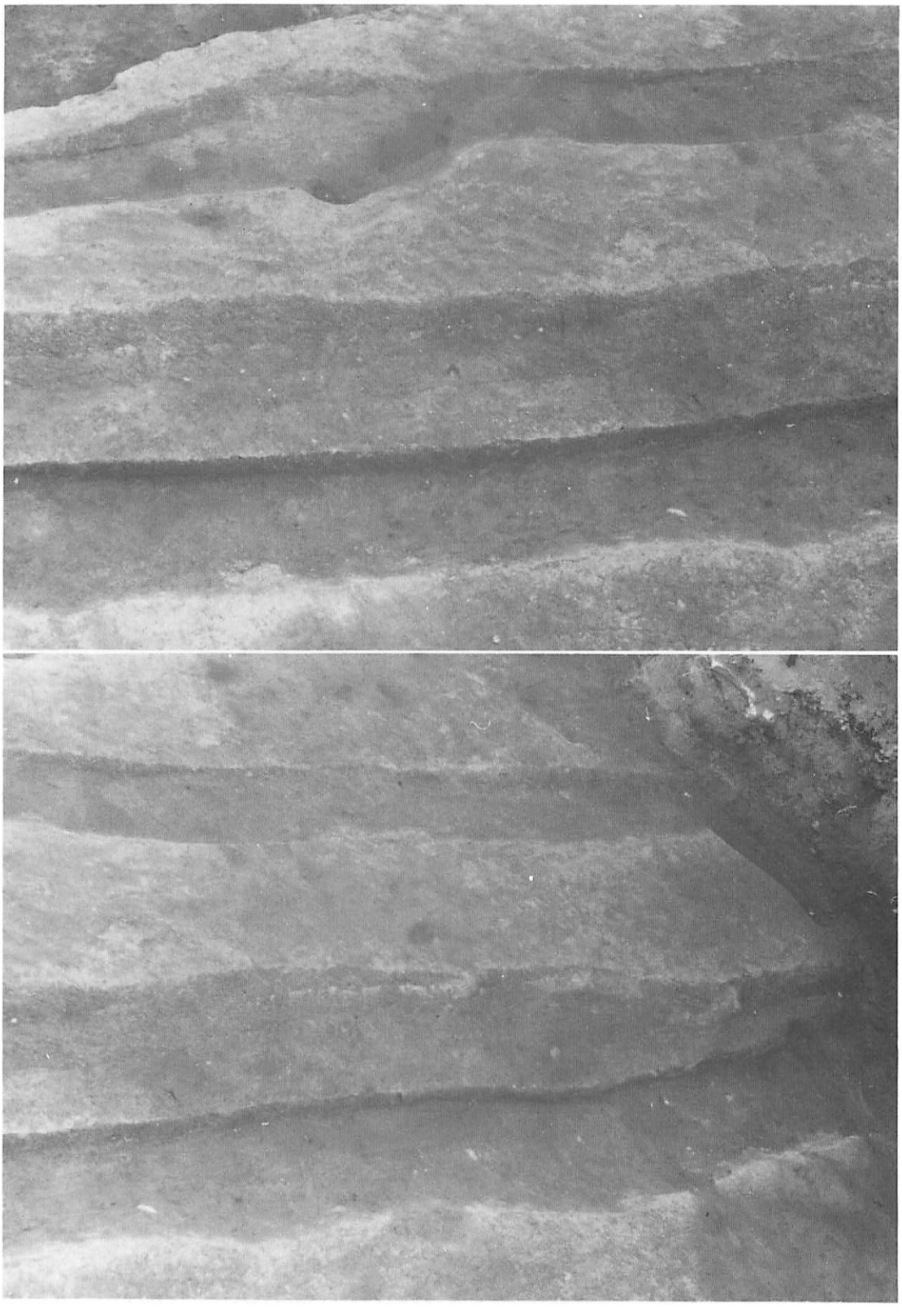


中央東西セクション（上：Ｅ２区　下：Ｅ３区）

東区東壁断面(上：G10，H10区　下：F10，E10区)

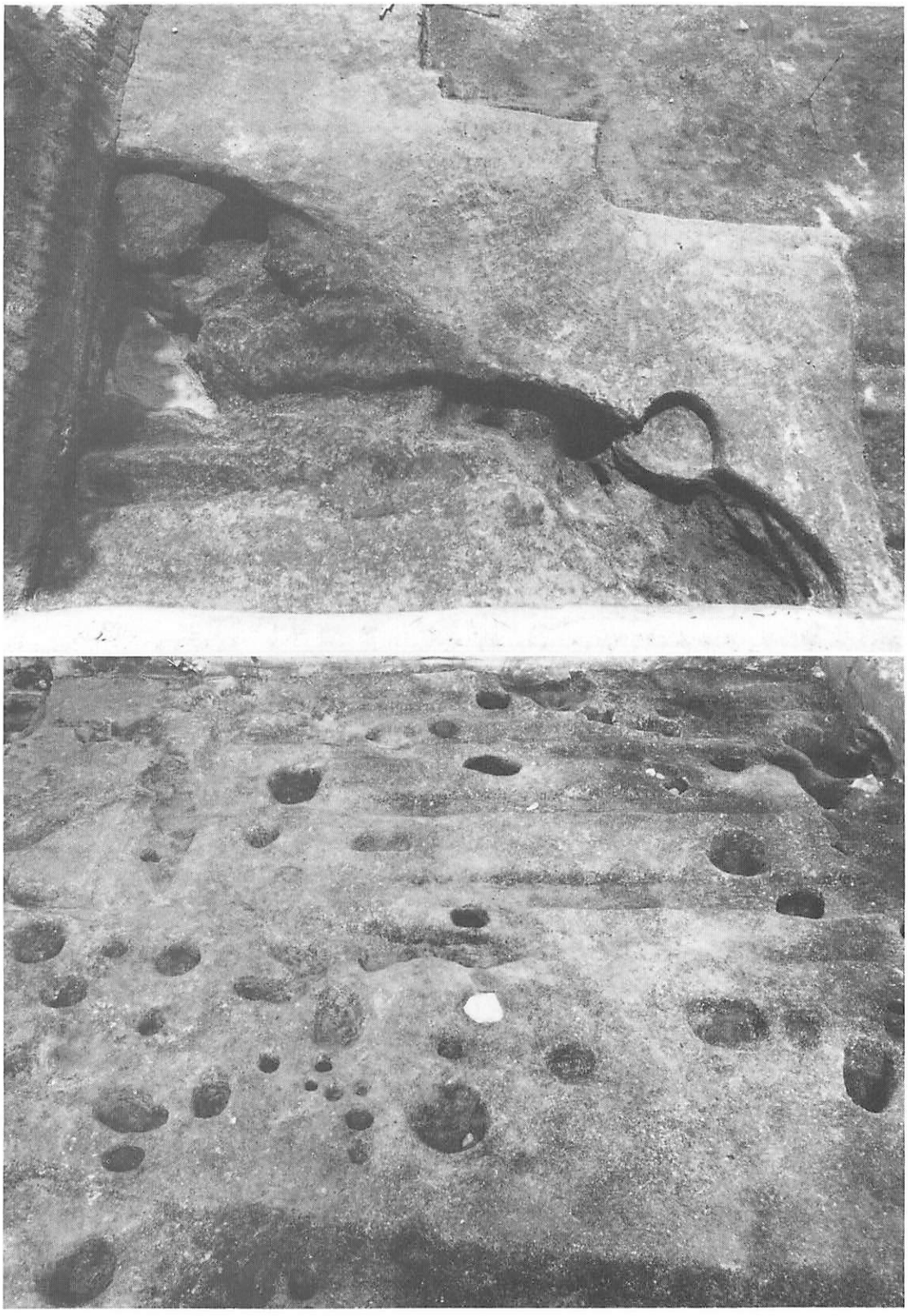
図版第10

溝3，4部分・1(上：B・C5区　下：B・C4区，北より)

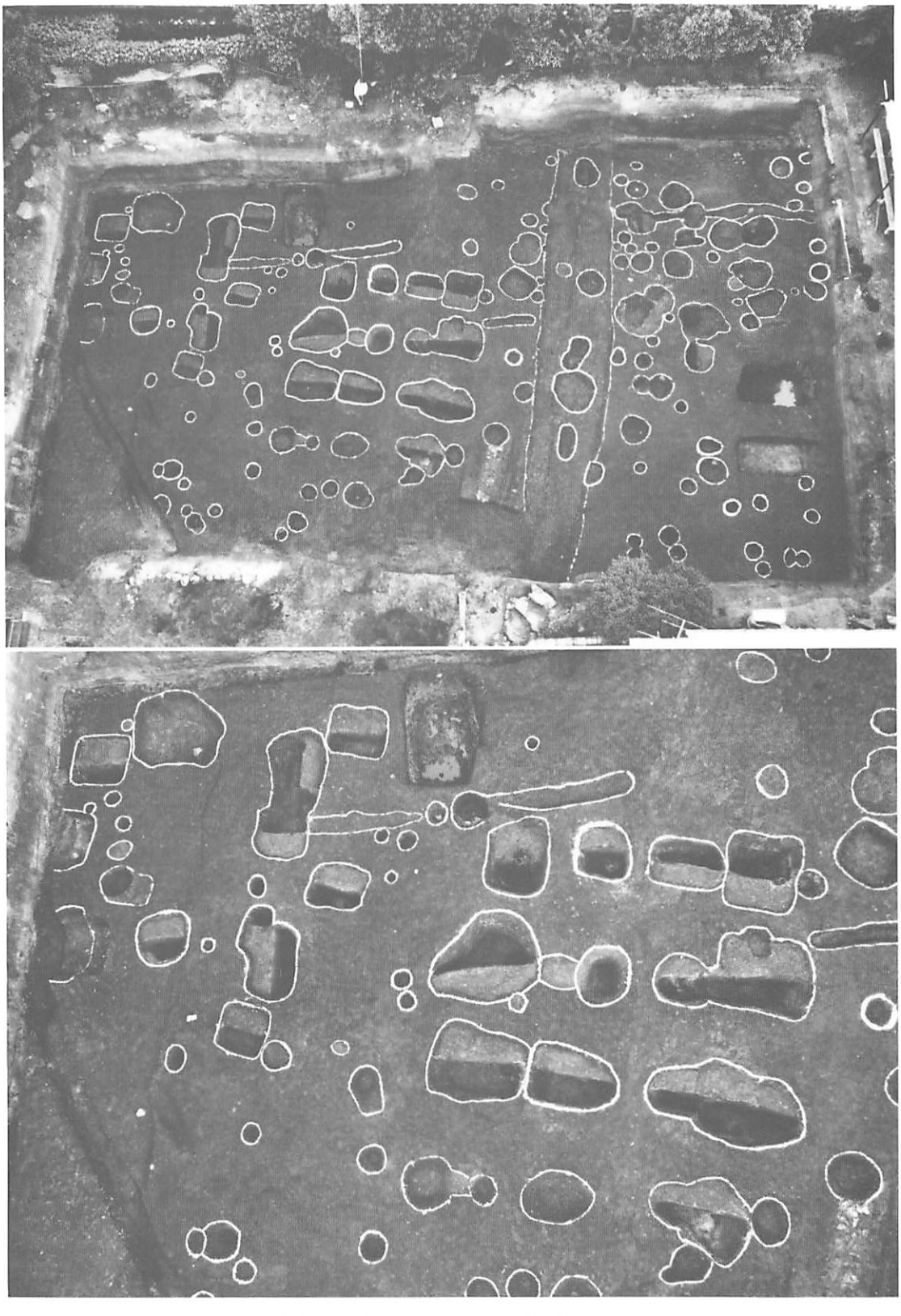


溝3，4部分・2（上：C・D3区　下：C・D4区，北より）

図版第12

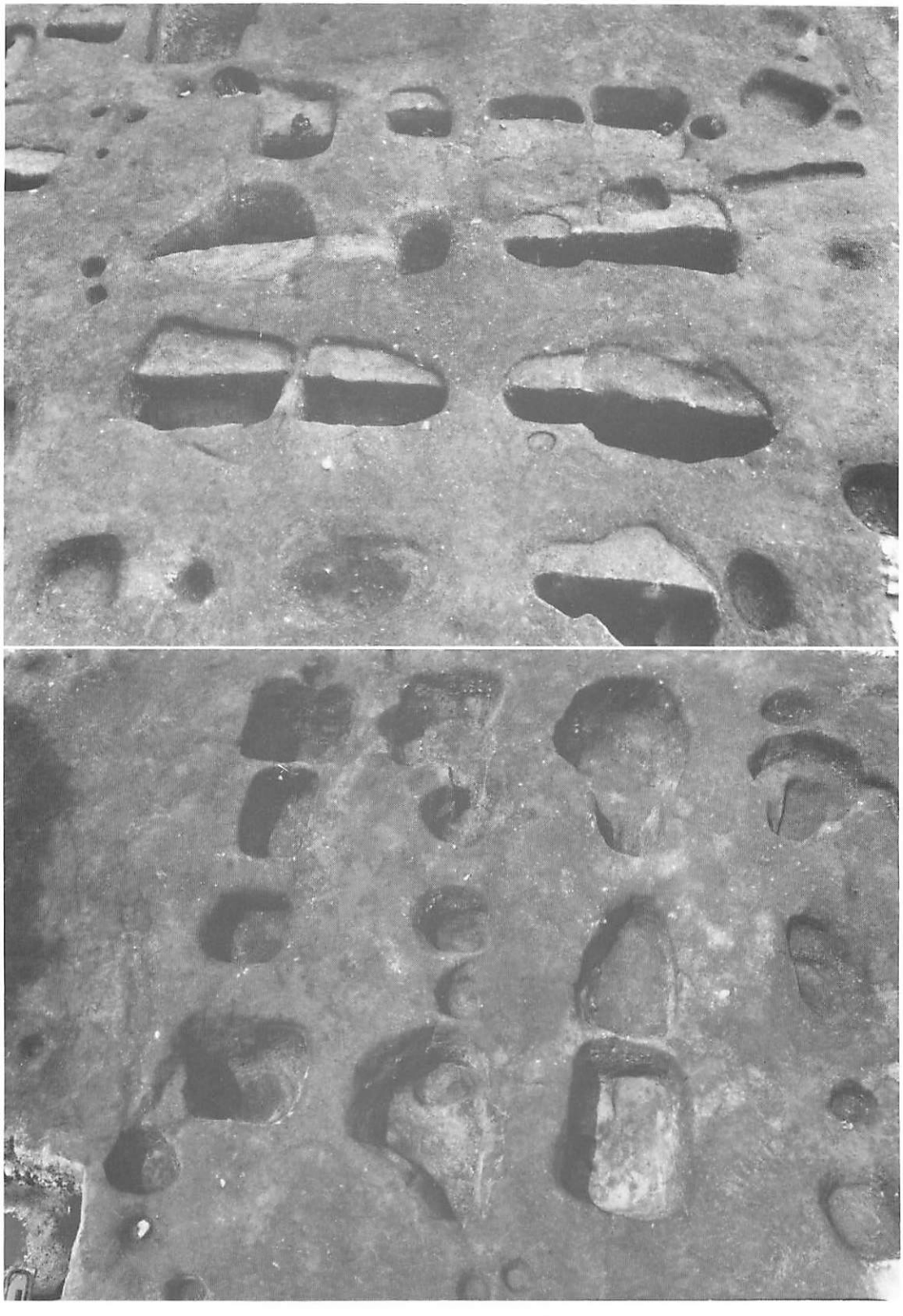


上：溝５全景(東より)
下：うね全景(西より)



上：北・南区第４層上面全景(気球による空中撮影)
下：建物１・２全景(同)

図版第14



建物１全景(上：東より　下：南より)

建物１－柱穴１全景(上：西より　下：西南より)

上：建物１－柱穴３・６全景(東より)
下：建物１－柱穴４全景(西より)

上：建物１－柱穴７全景(東より)
下：建物１－柱穴９全景(東より)

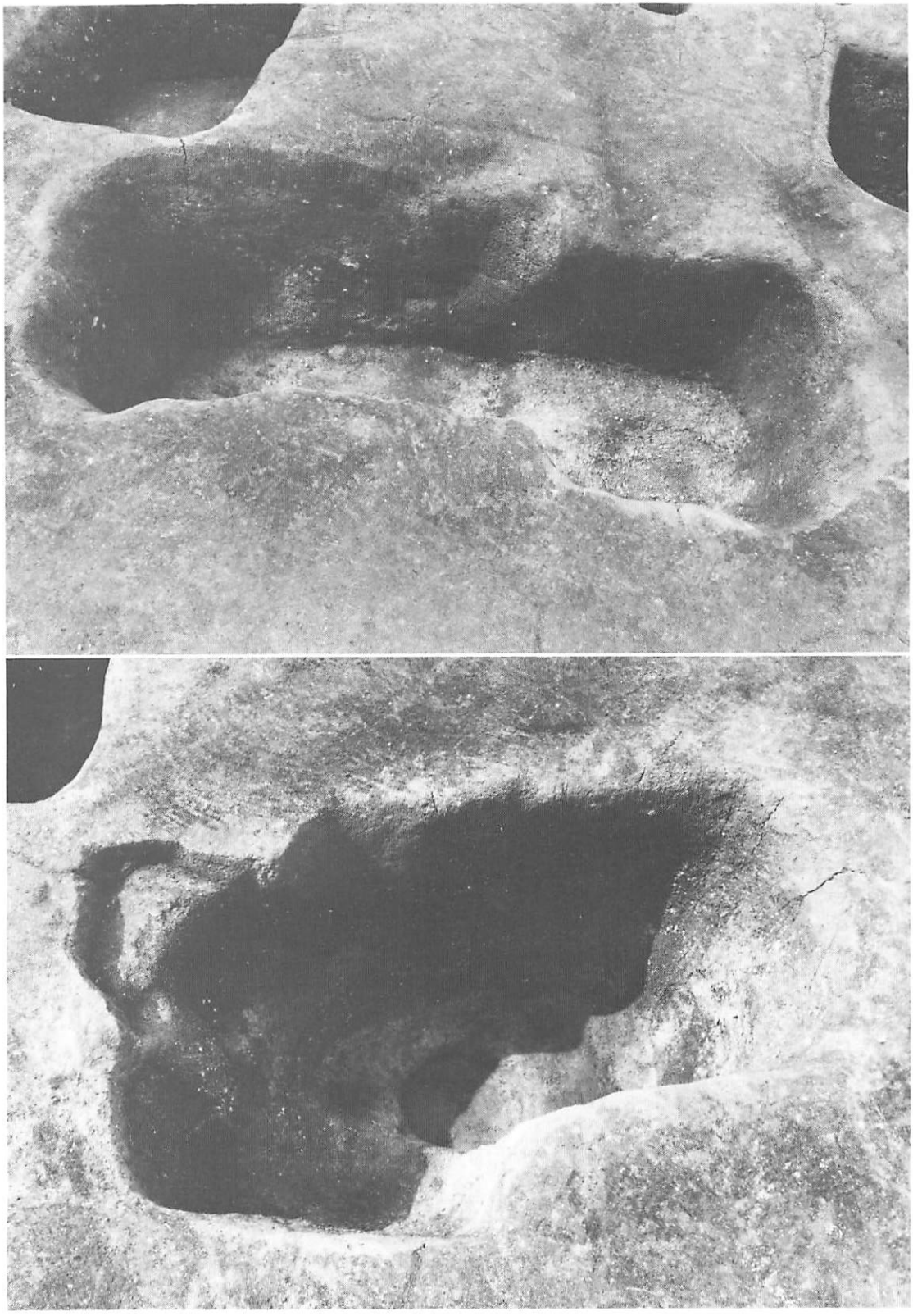
図版第18

建物１－柱穴10全景(上：東より　下：西より)

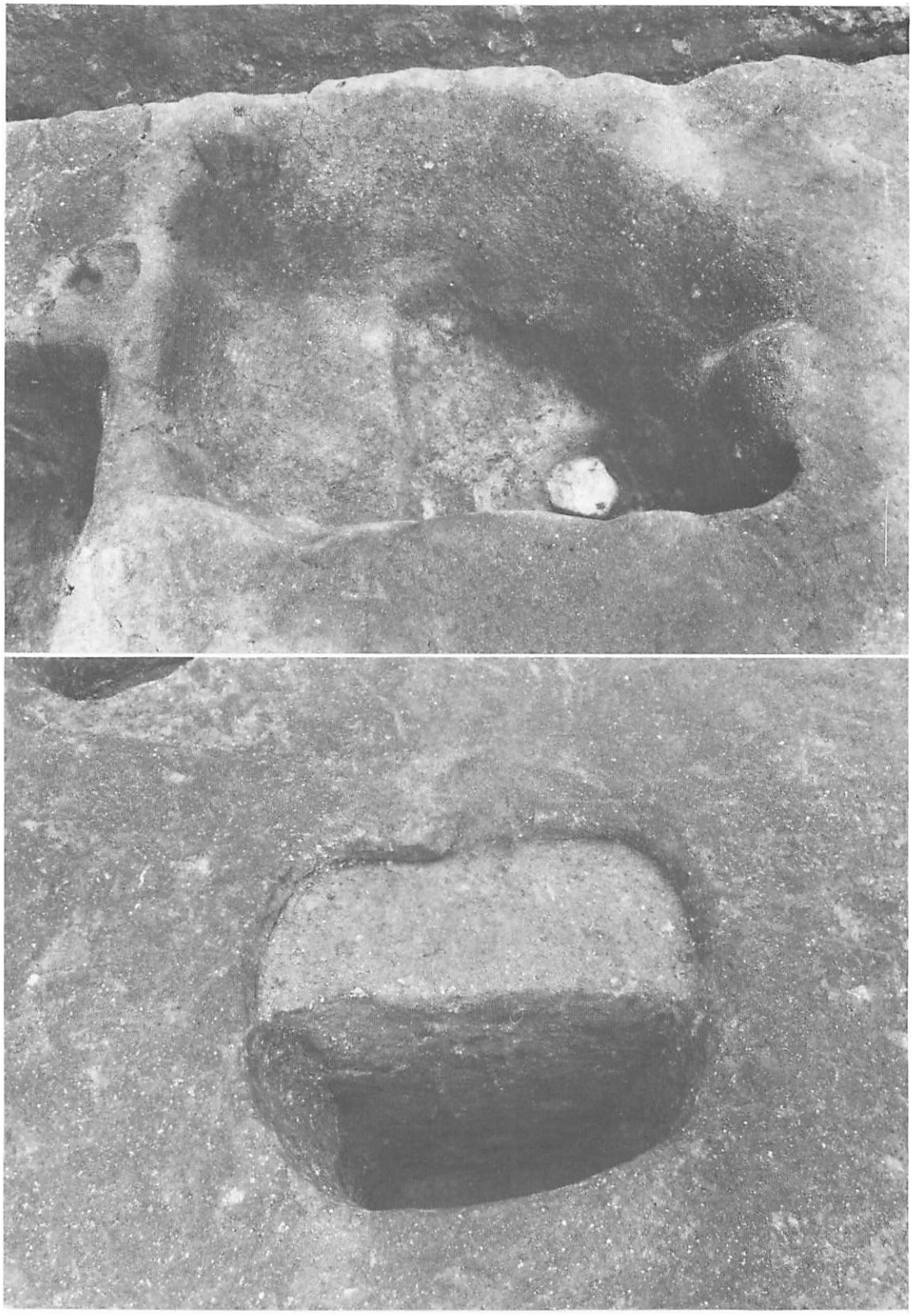
上：建物１－柱穴11全景(西より)
下：建物１－柱穴12全景(東より)

図版第20

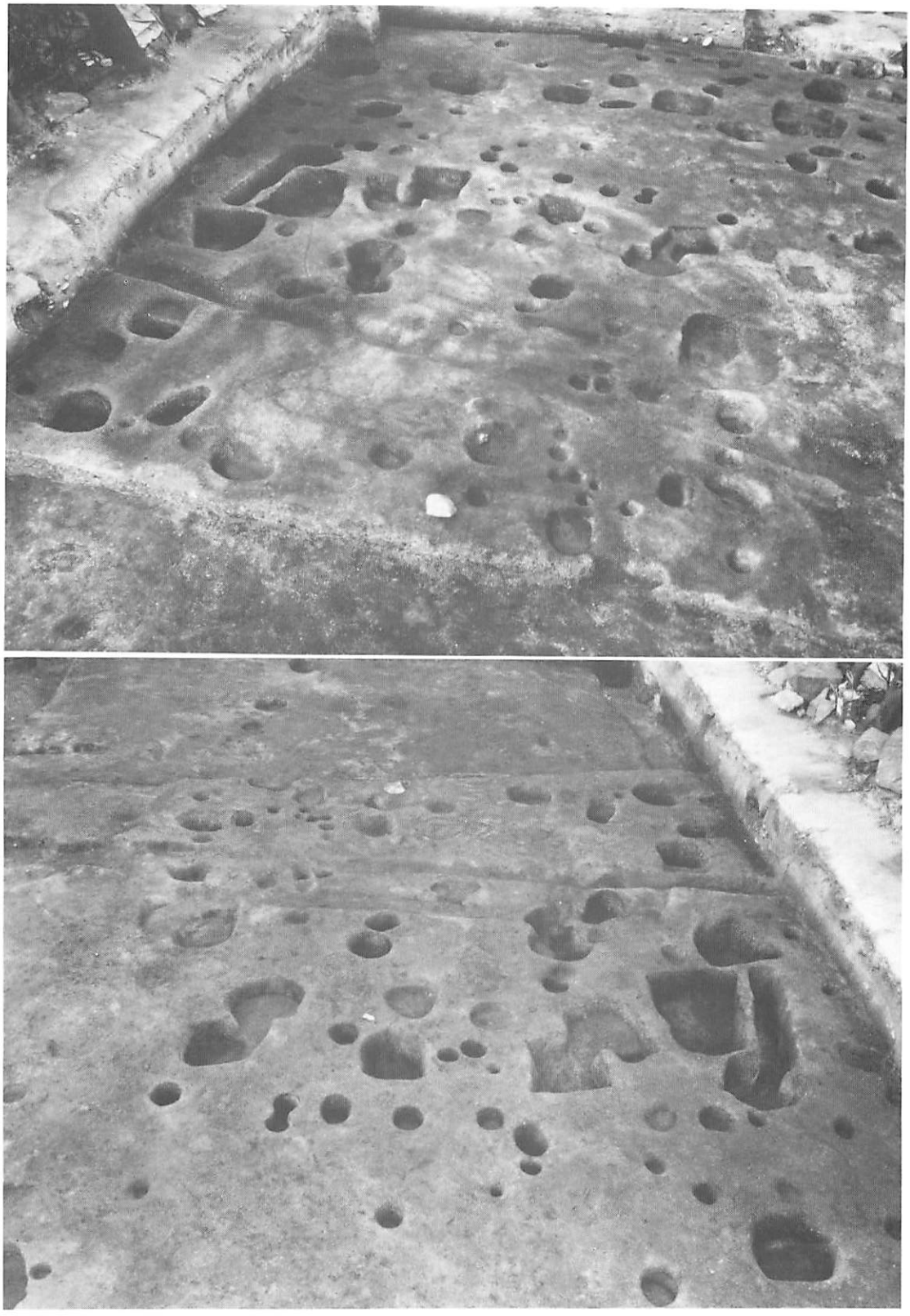
建物２全景(東より)



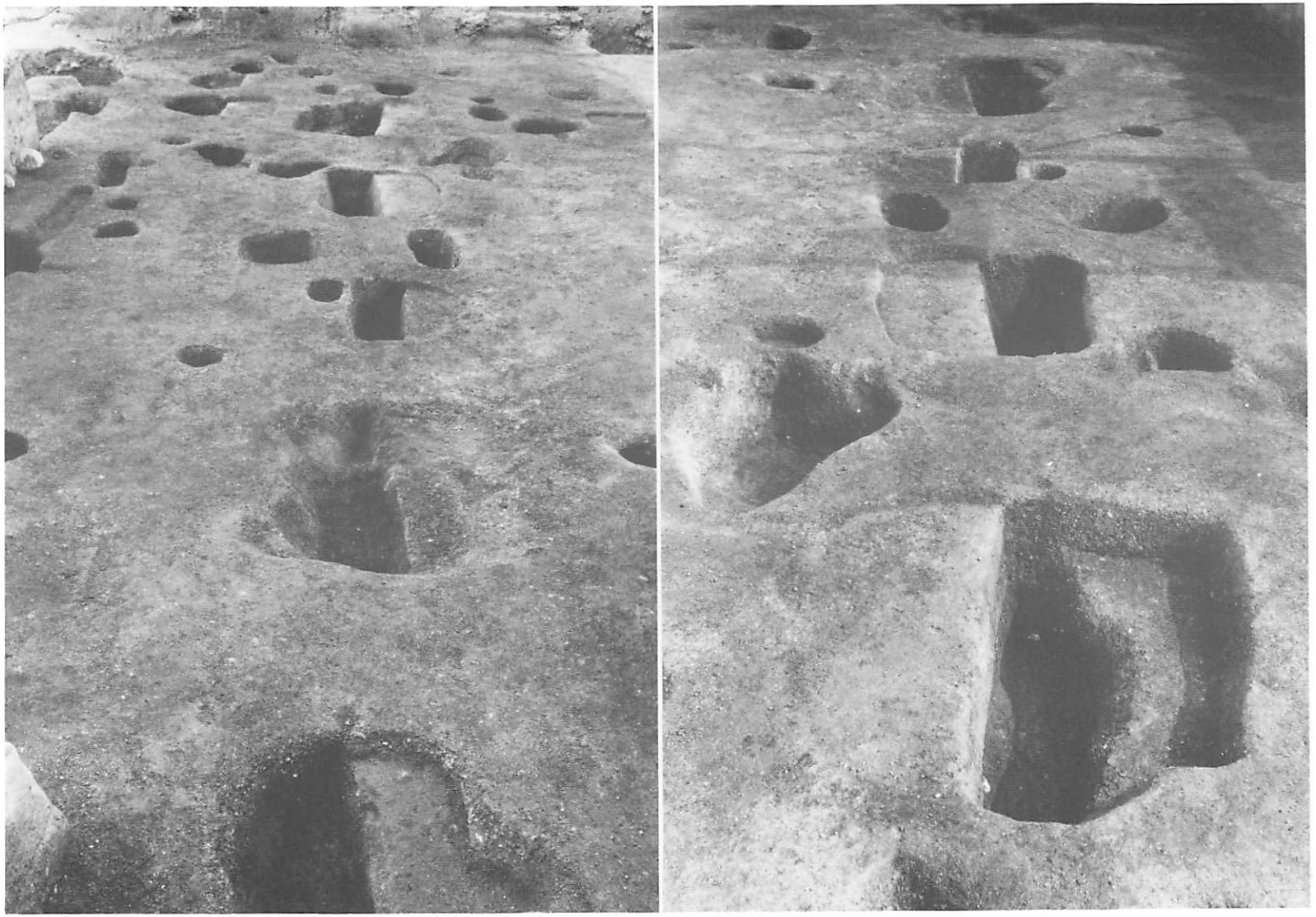
上：建物２－柱穴１・２全景(南より)
下：建物２－柱穴３，柱穴７全景(南より)



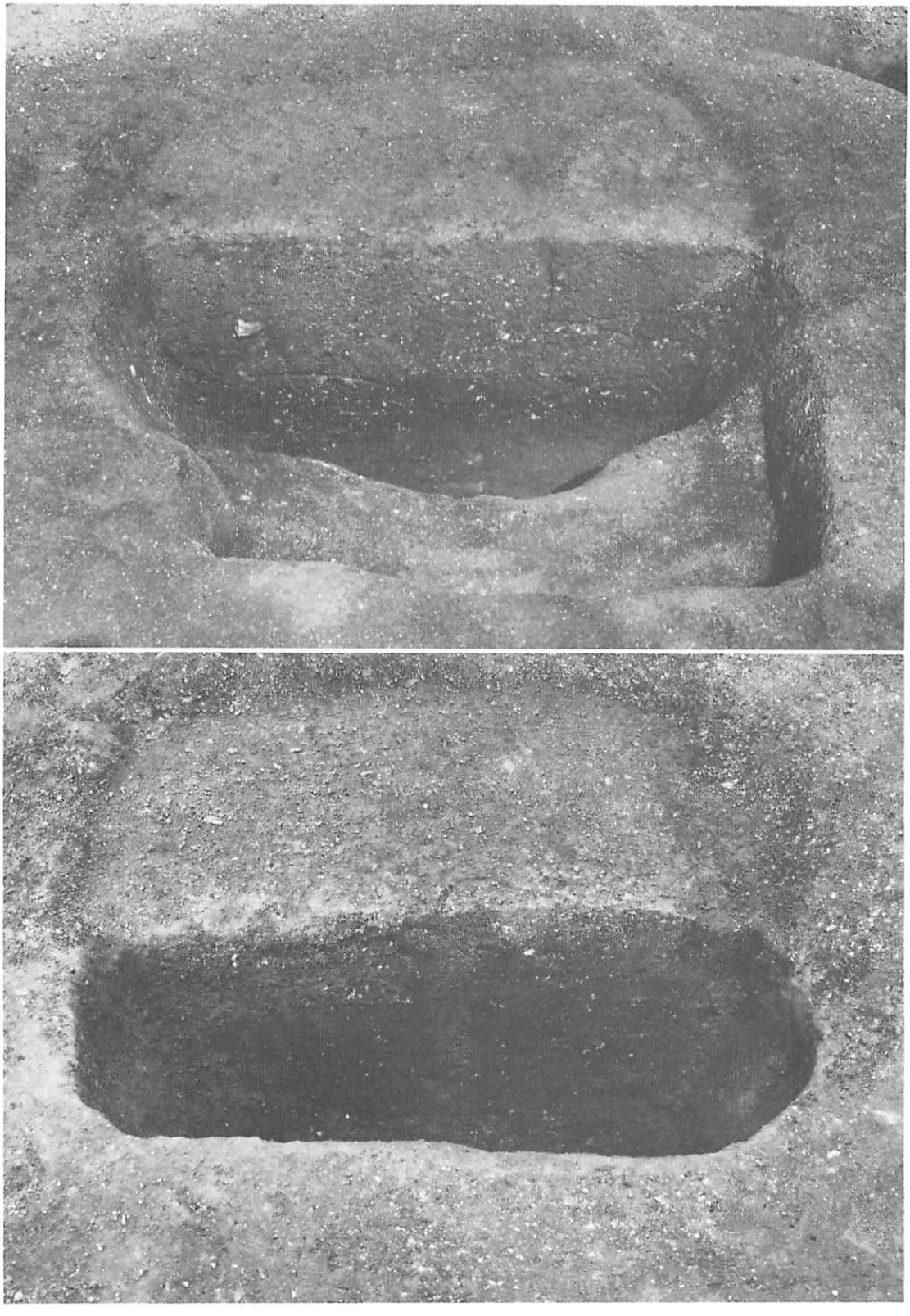
上：建物２－柱穴４全景(東より)
下：建物２－柱穴５全景(東より)



建物３全景(上：東北より　下：西より)

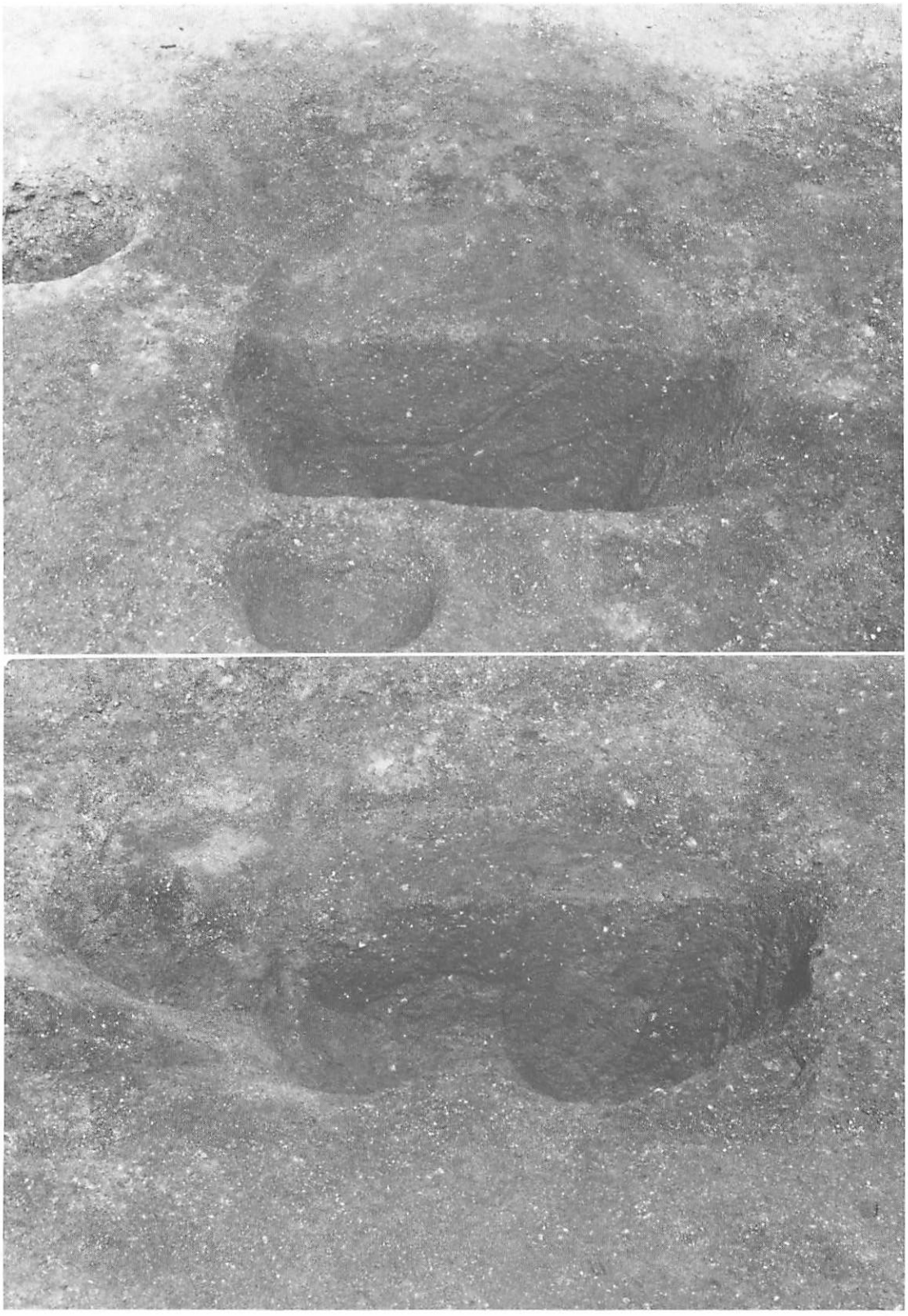


柵1全景(右：北より　左：南より)

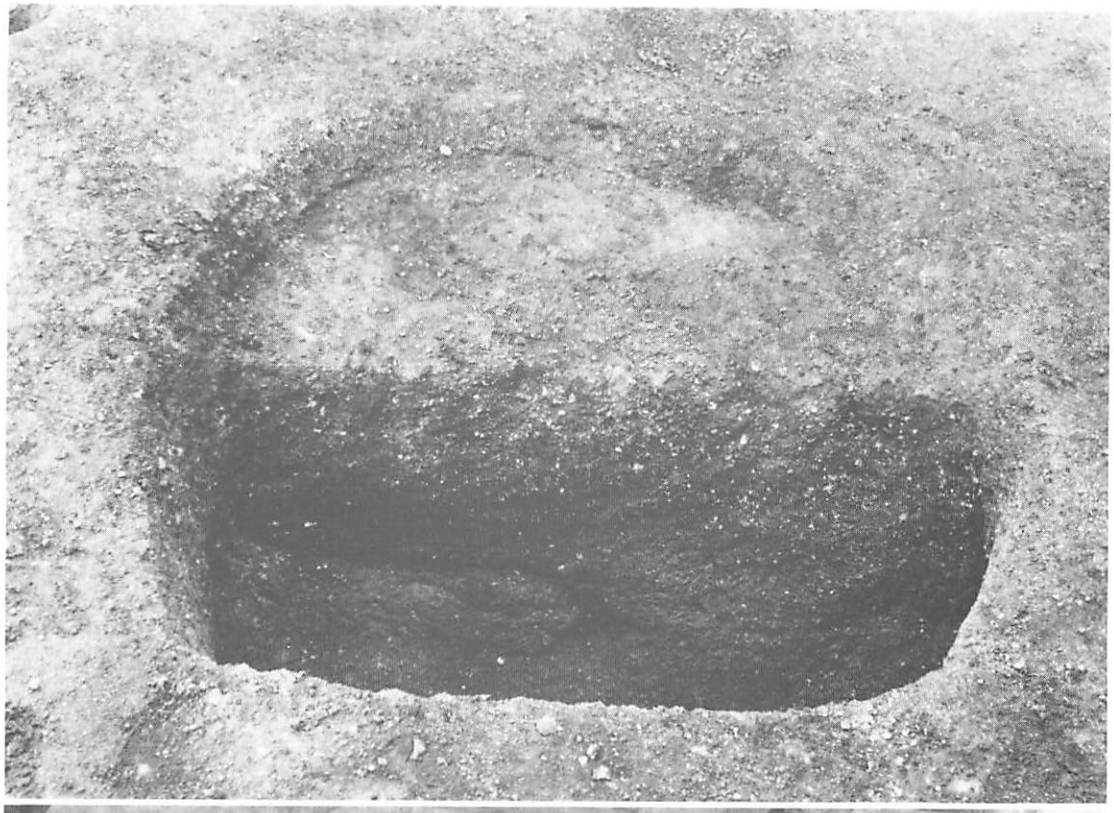


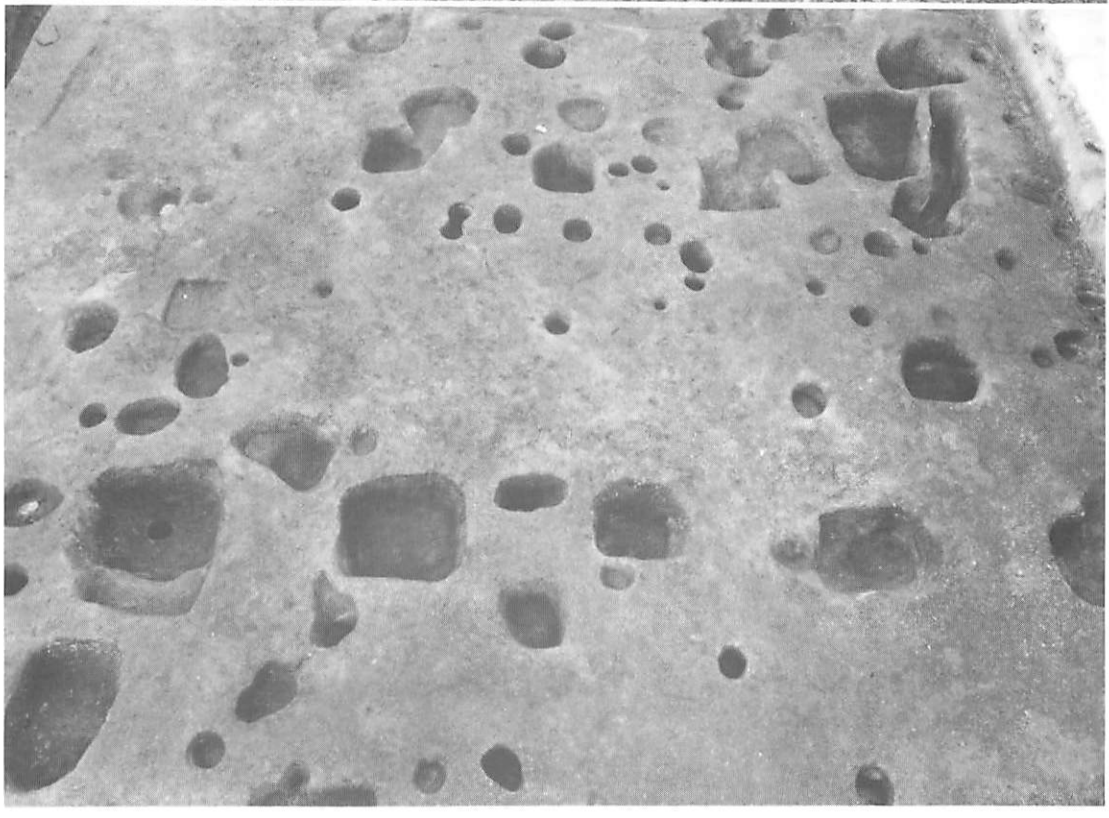
上：柵１－柱穴１全景(西より)
下：柵１－柱穴２全景(西より)

図版第26



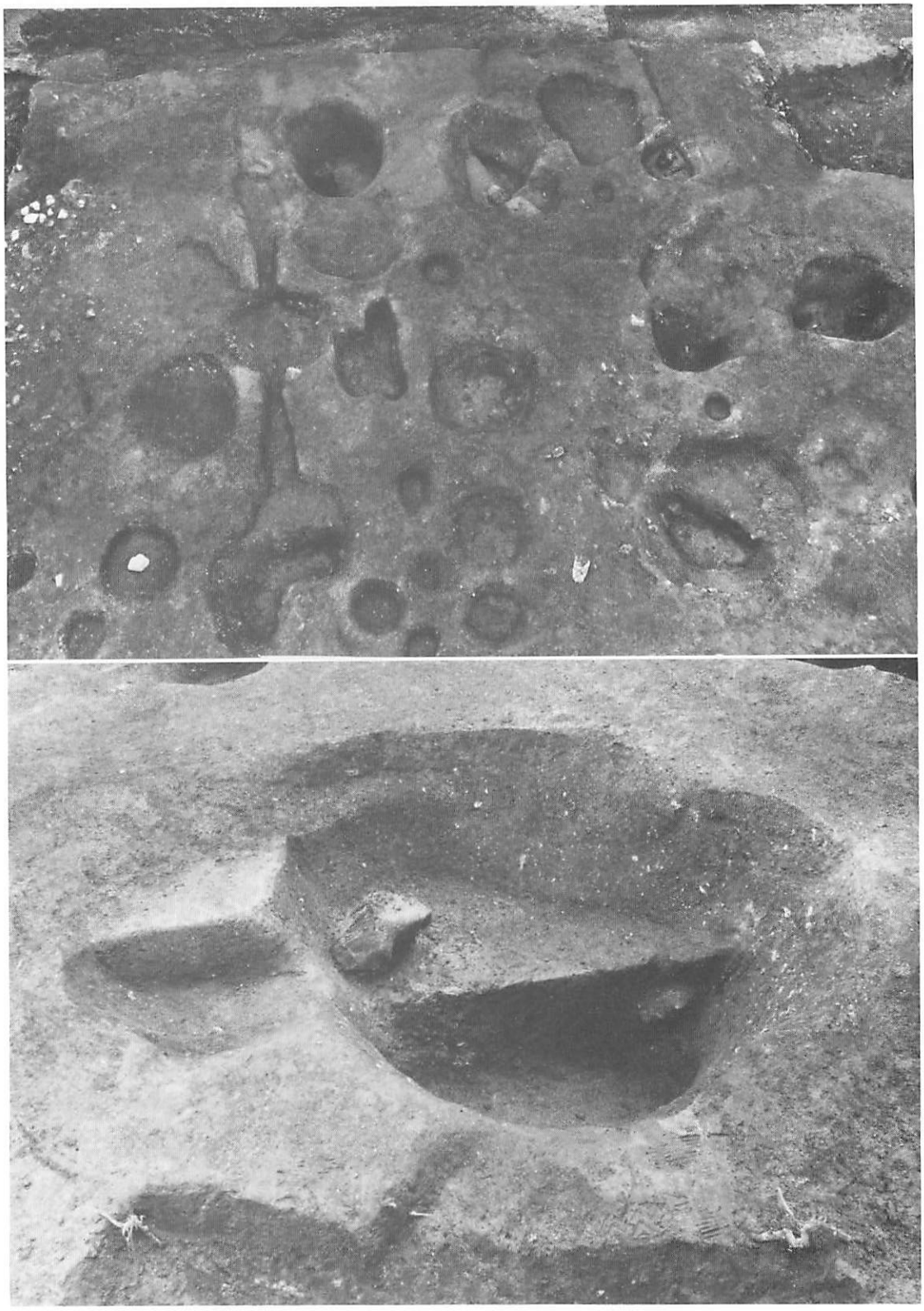
上：柵１－柱穴３全景(西より)
下：柵１－柱穴４全景(西より)



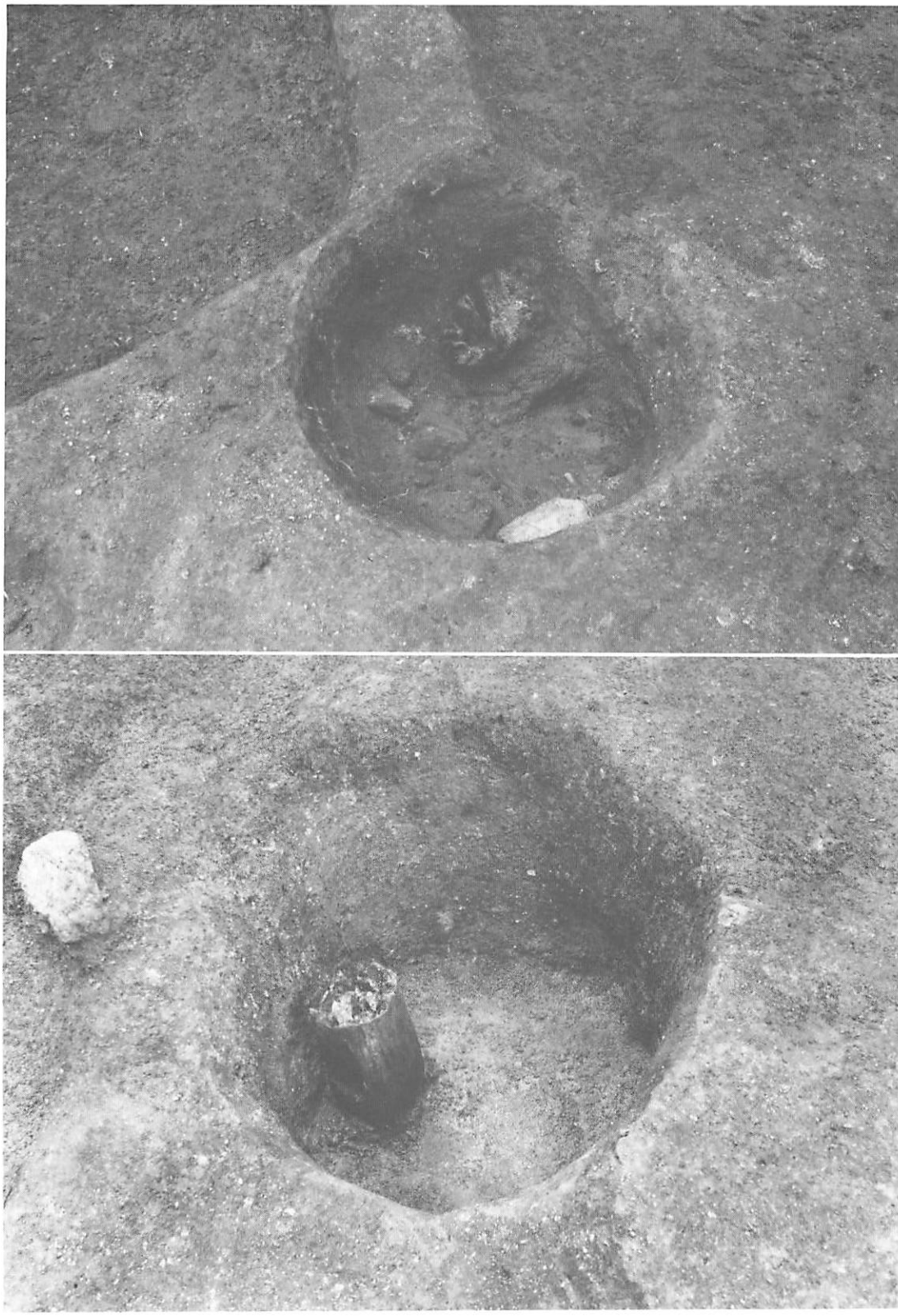


上：柵１－柱穴５全景(西より)
下：柵および建物３全景(西より)

図版第28



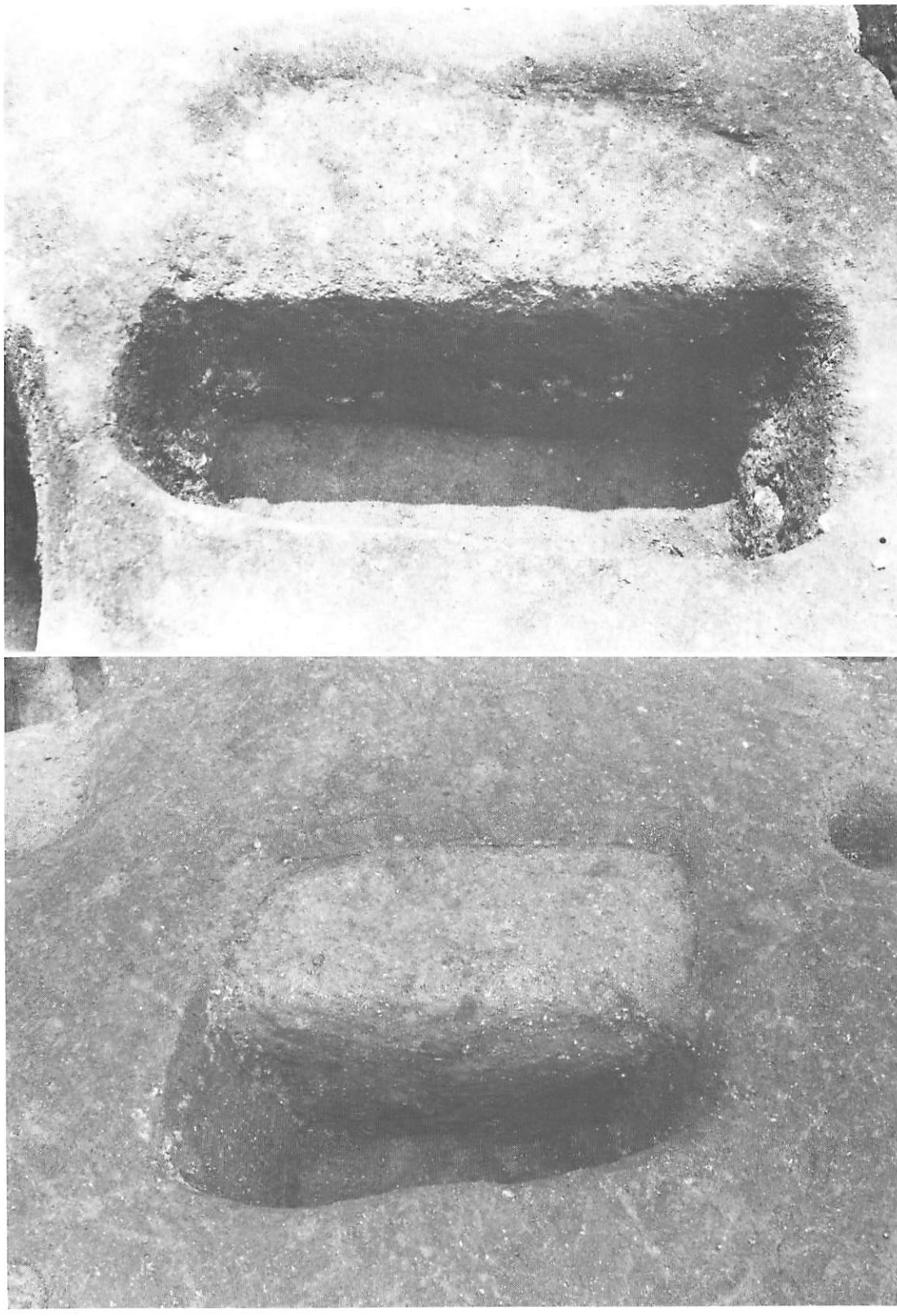
上：柱穴１・２・３・４全景(南より)
下：柱穴１全景(北東より)



上：柱穴２全景(南より)
下：柱穴３全景(南より)

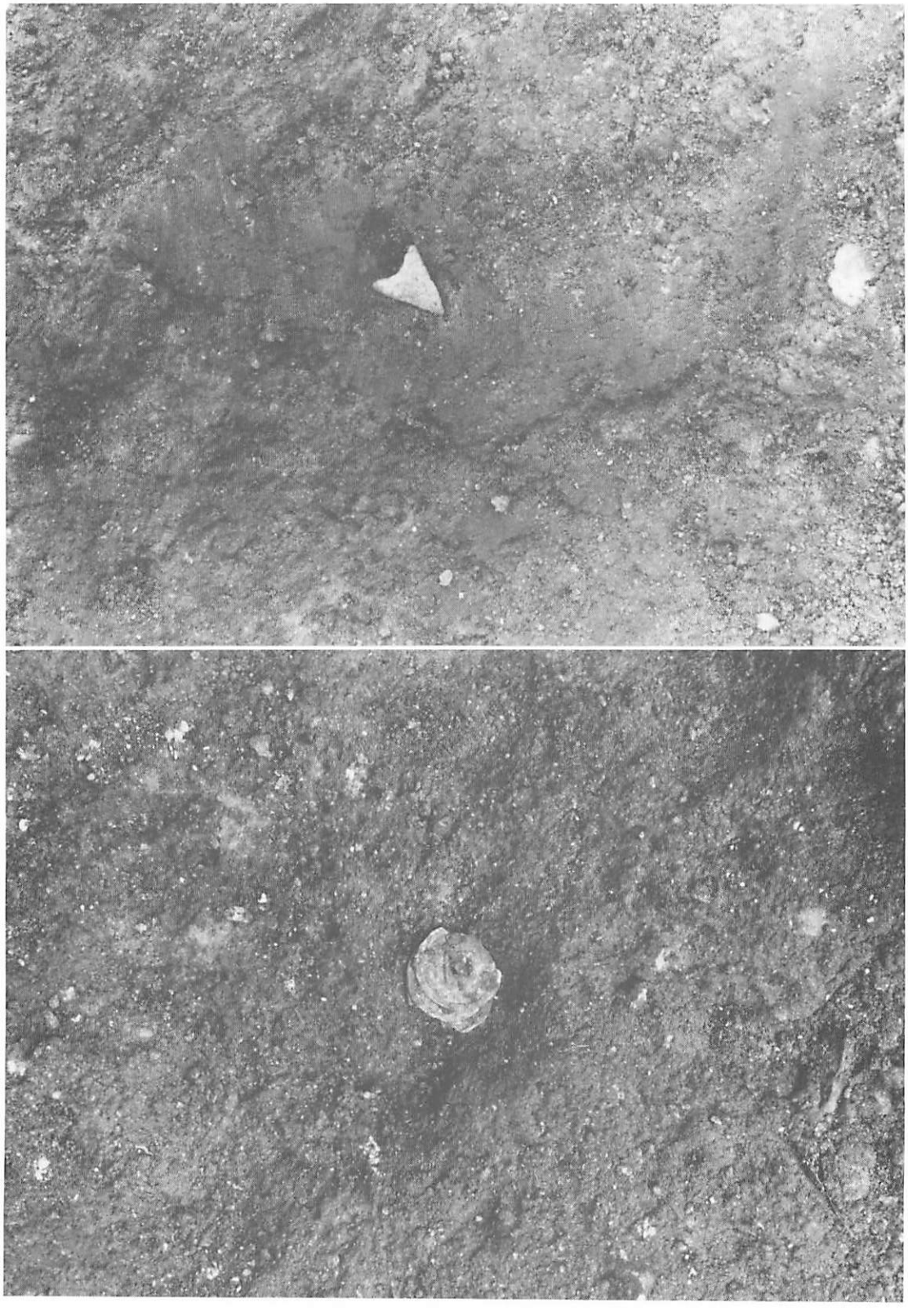
図版第30

上：柱穴４全景(南より)
下：柱穴５全景(北西より)

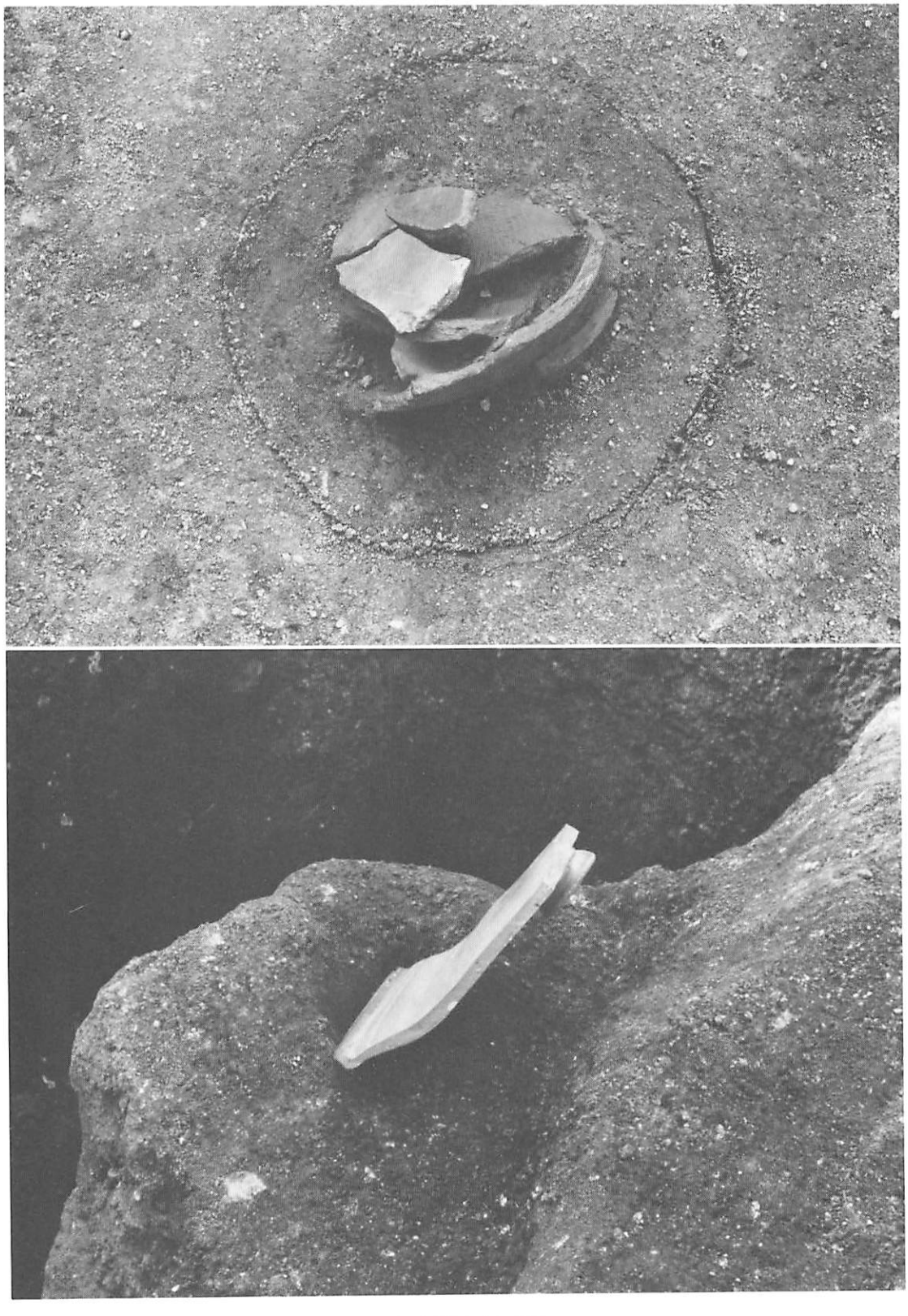


上：柱穴６全景(東より)
下：柱穴８全景(東より)

図版第32

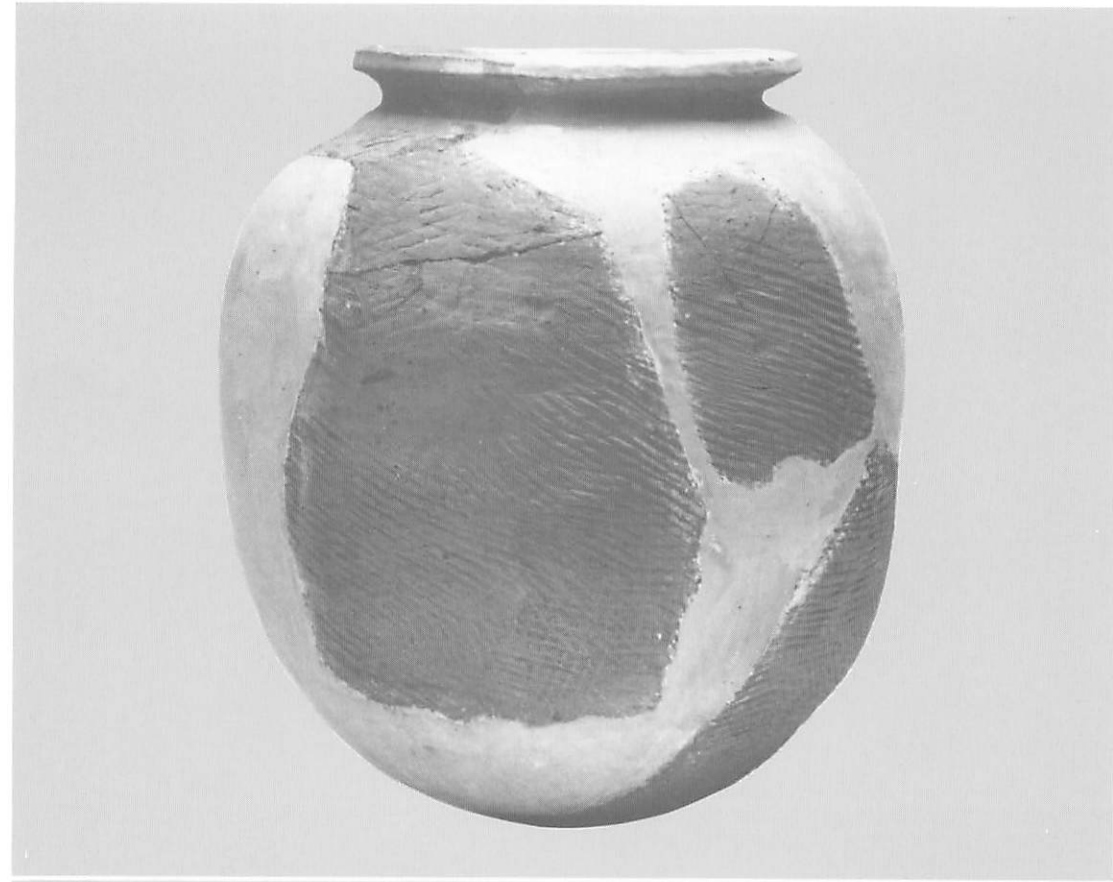


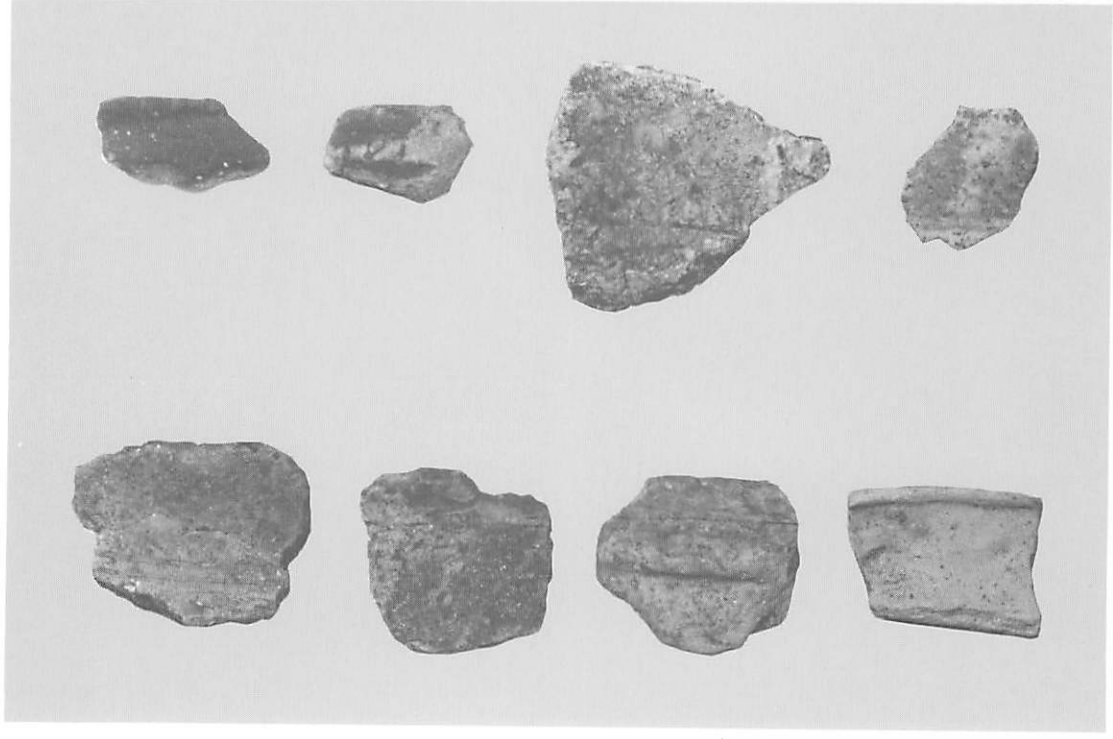
上：石鏃出土状態
下：和同開珎出土状態



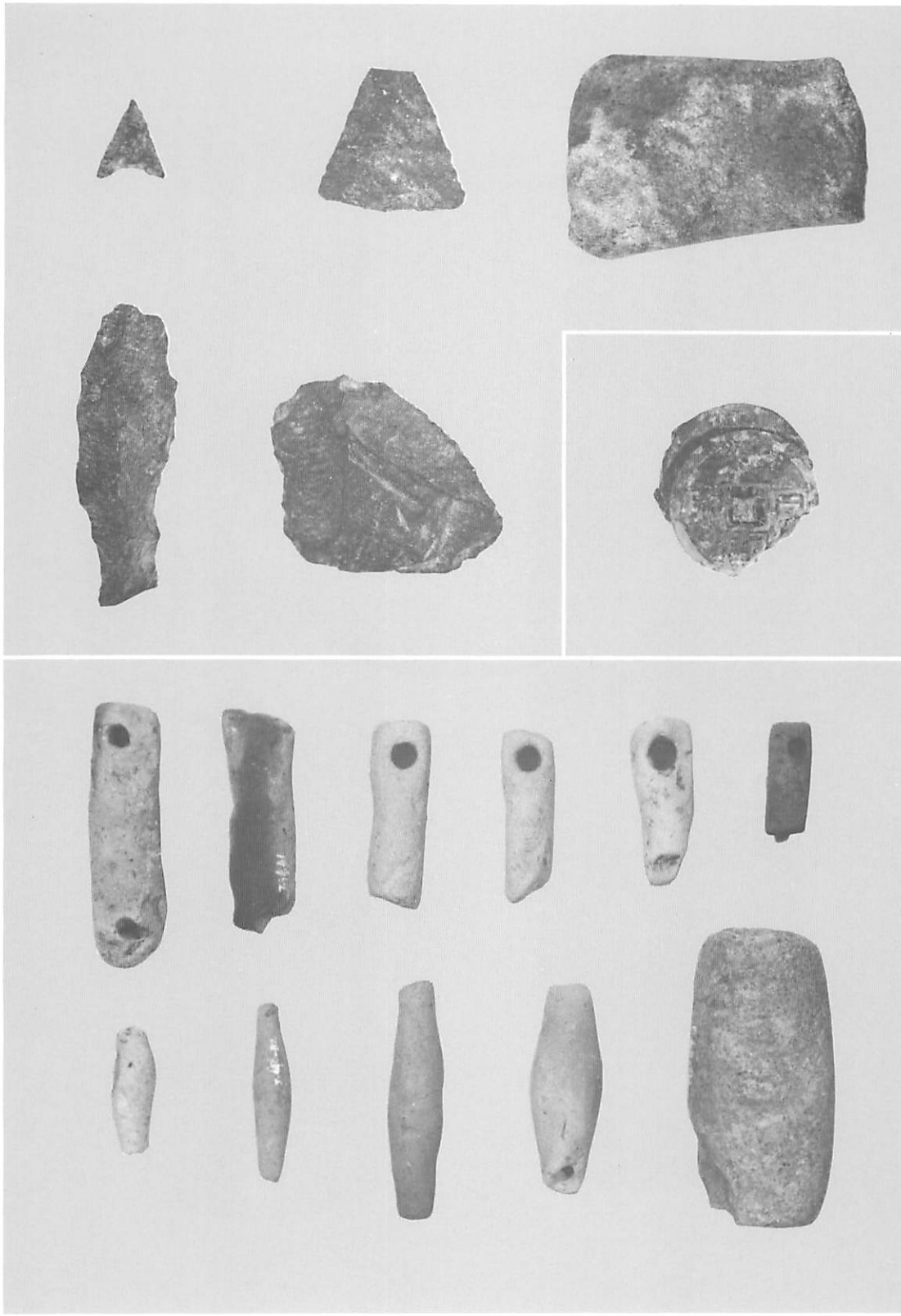
上：土壙93内須恵器甕出土状態
下：建物１－柱穴３内須恵器蓋出土状態

図版第34



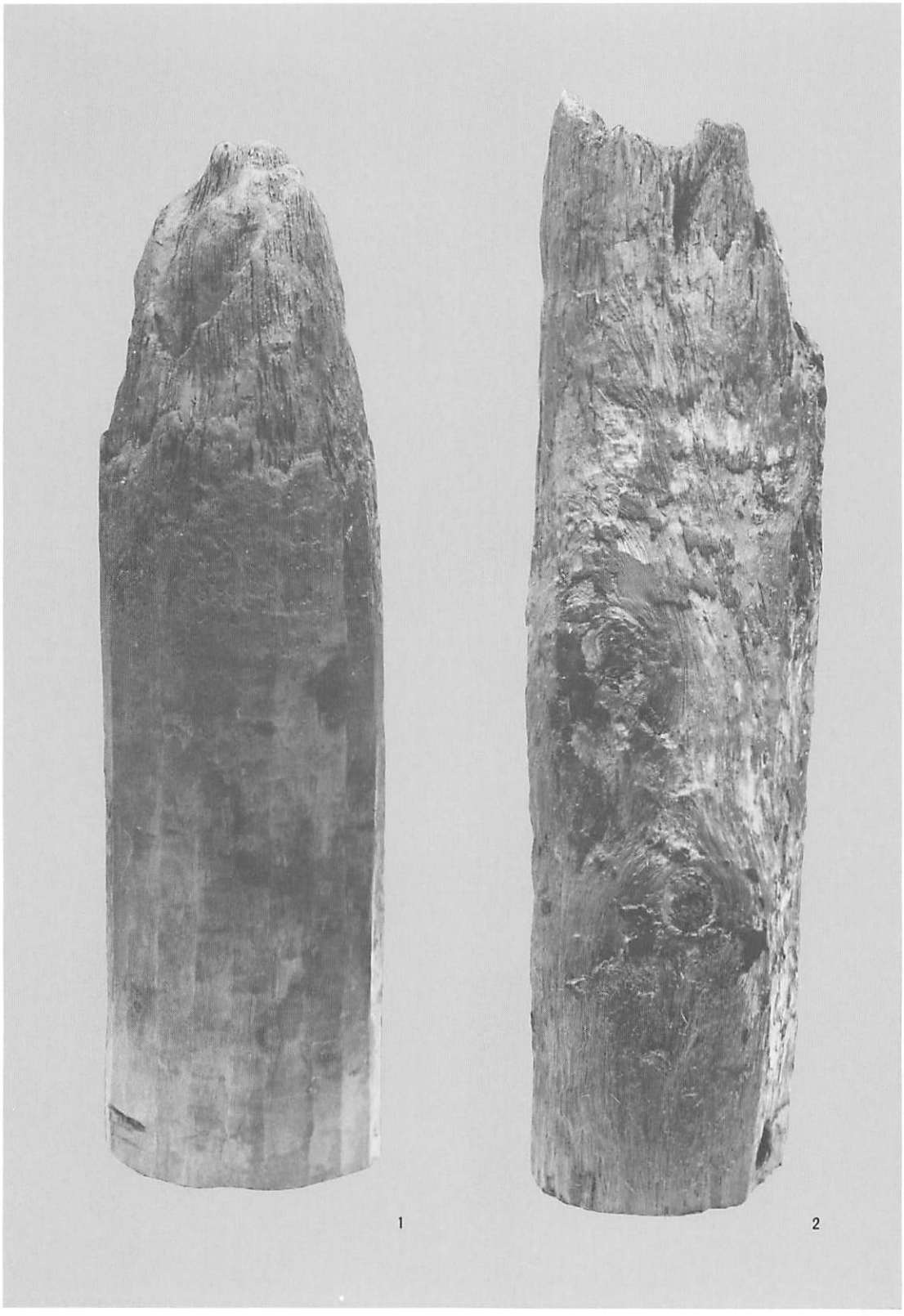


上：土壙93出土須恵器甕(縮尺３分の１)
下：縄文時代晩期・弥生時代土器(縮尺２分の１)



上：石器・和同開珎(実大)
下：土錘(縮尺３分の２)

図版第36



柱根(１・柱根７　２・柱根８)〔縮尺５分の１〕

上：柱根７部分
下：柱根（１・柱根１　２・柱根５）〔縮尺５分の１〕

図版第38

柱根(１・柱根３　２・柱根６　３・柱根４　４・柱根２)〔縮尺３分の１〕

芦屋市
寺田遺跡発掘調査報告書

発行日　昭和60年3月31日
編集　平安博物館考古学第2研究室
南博史
発行　財団法人 古代學協會
604 京都市中京区三条高倉
TEL. 075(222)0888
振替京都8-850番
製作　東洋紙業株式会社
556 大阪市浪速区芦原1丁目3番
TEL. 06(567)2111

EXCAVATIONS AT THE TERADA SITE

IN ASHIYA CITY, JAPAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXV